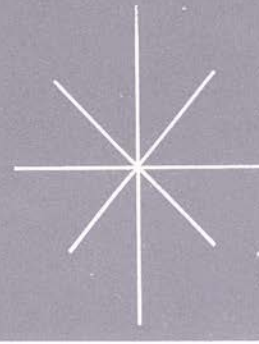
新しい学風を興すために

（附）合宿教室における短歌創作の記録



—— 阿蘇合宿教室の記録より ——

新しい学風を興すために

—大学生による〝阿蘇合宿教室〟の記録より—

大学教官有志協護会
国民文化研究会　編

はしがき

この数年来、国内を二分して争われた幾つかの激しい政治闘争も一応鳴りをひそめて、世は泰平のムードに包まれているが、危機はむしろ内攻して深刻の度を加えているというのが現状であろう。内外ともに、力と力との激しい緊張関係の上にかろうじて保たれている安定であって見れば、多少心して見る人にとっては問題の所在は極めて歴然たるものがあろう。

それは外でもない。人の心の荒廃である。人間不信の情が滔々として一世の風潮をなしている。政治は人の心を治めるという古来の道からはずれて、支配被支配の冷たい力学となってしまった。社会機構は人間が生きてゆくための手段に過ぎないのに、逆に人間がそれらの中に完全に埋没してしまう結果となった。人間の回復を叫ぶ流行思想は、もっぱら社会制度そのものを悪と断じて、罪のすべてをそれに転嫁することに急である。「敵」を設定し、その「敵」に対する憎悪を共通の分母とする階級意識から、真の人間の回復がなされるであろうか。断じて否と言わざるを得ない。少くとも学園だけは、この浅薄な思想に対して正確な判断を持つべきであるのに、最も濃厚にその支配下にあるのは由々しい問題といわざるを得ない。今の学園を支配している極端な政治主義と孤立感から脱却する道はないであろうか。青年学生の心に人間の真心に対する信頼を回復することなしには、現在の学問の頽廃を克服することは永久に出来な

いであろう。偏った人間観の上に立てられた学問は、その分析が精緻を極めれば極める程、益々いびつなものとなってゆくであろう。偏狭なドグマや感傷的な観念論が、時流にのり、科学という美名のもとに、如何に青年学生の心を毒していることであろう。今こそ新しい学風を興すべき時である。

我々の主催する「合宿教室」も、昭和三十一年霧島合宿以来回を重ねて七回目を迎えた。我々が青年学生諸君に敢えてこういう「場」を提供したのは、我々なりの願いがあったからである。それは参加者全員が、学校差や性格や能力の差を超えて、同時代に生きる一個の人間としてなまの切実な体験をぶつつけ合って貰いたかったからである。個人の殻を破ること、自分が人に対して真に心を開き、又人の心の中にとび込んでゆくこと、こういう体験は一般の社会生活の中ではなかなかなしがたいものである。そうであればこそ人と心を通わせることのむずかしさ、人と心の通い合った時のよろこび、合宿教室はそれを実感する「場」でなければならない。それが真に行われるならば、我々が従来言い続けて来た「国民同胞感」というのも単なる言葉ではなく、かけがえのない経験として心に永く残るであろう。そして、そういう「友情」が短い合宿教室の期間の後も、継続して守られてゆくならば、その相互研鑽の中から必ず新しい学問も生れて来るに違いない。なぜなら少くとも、人間不信という前提でものを考えてゆく

風潮に対して、事実によってそれを否定することができるからである。実際、これまで行われてきた合宿教室は、参加者にとってしばしば人生観の転機となって来た。いわば合宿教室とは新しい学問を生み出す土壌を培う運動というべきものであった。

かつて「真理をして成らしめよ、たとえ世界は亡ぶとも」と言った著名な学者がいた。閉鎖された特権の座で、抽象理論を組み上げることをもって学問と心得ている学者の感傷に過ぎないのだが、それが神託のようにありがたがられる雰囲気があった。そういう空漠とした無国籍の観念論と、現在の大衆に媚びた進歩思想は、実は同じ根から咲き出した二つの仇花である。それらは共に現実を直視するきびしい意志と、複雑をきわめる人間現象を綜合的に把握する精神を欠いでいる。福田、木内両講師の講義は、そういう幼稚な楽天思想を微塵にうちくだくような力を持っている。この書をよまれる方々は、両講師の講義の中に、現実を綜合的に把握する強い精神をよみとっていただきたい。マルクス流の公式論と比較して、如何に新鮮な方法が提示されているかに気づいて下さるであろう。

将来指導者となるべき学生諸君に要請される能力の一つとして、人の心のいかに微妙な動きをも敏感にキャッチできる感覚を修練して行かなければならない。二百人に余る参加者が全員

短歌を創作するという思い切った試みも、今回の合宿教室で始めて採用された。短歌と学問という結びつきは、一見唐突に見えるけれども、人の心が細かくわかり、自分の心を正確に客観化するということは、あらゆる学問にとって不可欠の前提でなければならない。短歌の創作によって鍛え上げられた感覚は社会科学や歴史学、さらには自然科学の領域までも必ず大きな力となることを信ずるものである。

保守か、革新か、資本主義か社会主義か、そういう果てしない対立が続いている。その対立は一時的な政策的妥協はあっても、一方が力によって他方を圧殺せねばやまぬ程の根深さを持っている。祖国日本の内包する傷は癒しがたい程深い。この悲しむべき現状に対する一つの具体的解決策として、我々はこの記録を編集した。行間から我々の微意を汲みとっていただければ幸甚である。そして、一日も早く、大らかな国民的共感の世界が広がって行くことを心をこめて念ずるものである。

終りに福田、木内両先生には、御多用中にもかかわらず、快く講義要旨に訂正加筆していただいた。ここに厚く御礼を申し上げ、御協力を心から感謝する次第である。

なお仮名遣いについては、この種の書物の制約上、已むを得ず新仮名遣いによった。この点

両先生には誠に礼を失したことであるが、事情説明の上御了解いただいたことを附記しておきたい。文責はすべて編集者が負うものである。

昭和三十八年四月五日

大学教官有志協護会
国民文化研究会

目　次

はしがき……1

一、国民同胞感の樹立のために

第七回「合宿教室」のあらまし……3

この合宿教室のめざすもの……23

二　合宿教室における講義

現代の思想的課題……評論家　福田恆存……49

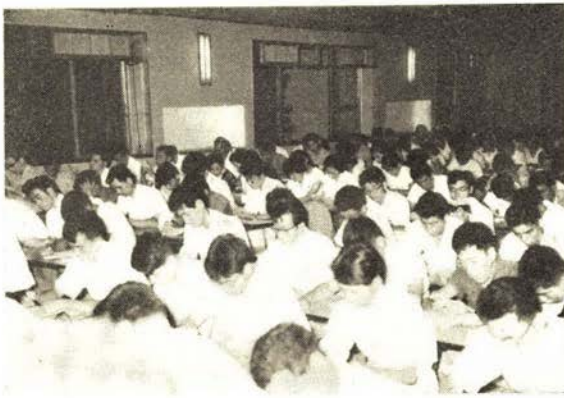
世界の見方……世界経済調査会理事長　木内信胤……97

三、合宿教室における短歌創作

短歌の哲学と技術……亜細亜大学教授　夜久正雄……151
第一回短歌創作と批評……187
第二回短歌創作の記録……217
あとがき……247

■国民同胞感の樹立のために

第七回「合宿教室」のあらまし



一、予　備　合　宿

二、第七回合宿教室

講　　義

輪　　読

班　別　討　論

短歌創作――大観峯登山

昭和三十一年八月、第一回霧島合宿以来、勤評、安保、大学管理法とあわただしい六年の歳月が経過した。それらは国内のいたましい思想的分裂をむき出しに露呈したものであって、我々は今更のように敗戦の傷痕の深さを思い知らされたのであった。その間学園をリードしたのは終始ラディカルな左翼思想であった。その動員力とエネルギーは革命の予行演習というにふさわしいあなどりがたい力を示した。しかし熱狂の後に残ったのは、学生組織の果しない解体分裂と沙漠のようにひからびた心情ではなかったか。温かい連帯感や人間相互の信頼感——総じて戦前の学園に溢れていたみずみずしい友情の世界は寸断されてしまった。孤立した個人が泰平のムードの中で「他を犯さず、他からも犯されない」というような消極的人生観に安住していて果して真の学問的エネルギーを期待出来るだろうか。人の心が分る人でなくて、どうして人間を対象にした学問ができるだろうか。新しい学問を興そうという我々の課題は、一層の切実さをもって我々に解決を迫って来た。

この六年間、合宿教室は主として四十歳前後の国民文化研究会々員の手によって直接運営されて今日に及んだ。合宿教室全般の運営のバトンを早く学生諸君の手に渡したい、それが会員たちの永い念願であった。設営から班別討議まで、千々に心を砕くことは、学生諸君にとって苦しみであると同時に貴重な体験となるだろう。その体験の中で、人の心を真に動かすものは、一片のスローガンや論理ではなく、深い思いやりであることを学んで呉れたら、それは明

日の国家にとってかけがえのないプラスとなるだろう。我々はそう考えて今年は運営を学生諸君の手に移すことにした。冒険ではあるが、その成否は運動のエポックを画することになるだろう。我々は成功を念じつつ準備をつみ重ねた。去る三月二十日から六泊七日、東京青山の日本青年館で行われた幹部学生の合宿研修会は成功裡に終了し、三十数名の学生諸君は夏の大合宿に臨む姿勢をととのえていた。こうして待望の八月を迎えたのである。

一、予備合宿

大合宿の運営を円滑に行わせるために、三月の青山合宿に参加した学生を中心に予備合宿が行われた。それは大合宿の直前三日間、八月十五日から十七日にかけて、阿蘇内の牧の現地に於て催され、日程表に見られるごときスケジュールによって、最終的な訓練と意志統一がはかられた。参加学生は次の通りである。

国武忠彦（早大卒）諏訪田陽三（神戸大）合原俊光（長崎大）松浦正昇（法政大）亀井孝之（亜細亜大）黒木林太郎（熊本大）沢部寿孫（長崎大）山本博資（早大）湯津堂義弘（鹿大卒）尾形紘行（長崎大）徳地康之（滋賀大）高村光紀（亜細亜大）赤坂郁昌（滋賀大）牧野祐児（熊大卒）三宅将之（岡山大）徳田順作（宮崎大）福島宏之（早大）木田浩隆（九大）行武靖枝（東洋大）平木節子（熊本大）古市洋子（東京薬大）以上二十一名

第7回合宿教室予備合宿日程表（昭和37年8月）

17　日	16　日	15　日	
起床・洗面・朝食	起床・洗面・朝食		7.00
			8.00
各係任務分担 班編成決定 会員班別割当	諸　準　備		9.00
	輪　読 「古　事　記」 （小　柳）		10.00
映　画 「文化の戦士」			11.00
北海道大事件報告 （滝　田）	講　義（山田） 「和歌について」		12.00
本合宿設営 準備に移行	昼　食		1.00
	講　義（山田） 「歌よみに与ふる書」		2.00
	合同会義 合宿目標の確認 （小田村）	集　合	3.00
		自己紹介・諸注意 （川　井）	4.00
	夕食・入浴	本合宿会場視察	5.00
		夕食・入浴	6.00
	輪　読 「リンカーン 演説集」	予備合宿上の注意 意見交換	7.00
		輪　読 「続々国民同胞感の探求」	8.00
	就　寝	就　寝	9.00
			10.00

初日の夜は、昨年度の合宿記録「続々国民同胞感の探求」の中の「学問の興隆のために」の章を輪読し、問題点を深めた。第二日目には国民文化研究会々員の小柳陽太郎氏によって「古事記」をテキストに使って輪読が行なわれた。大合宿の輪読をリードするための演習の意味もふくめて、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」と関連させつつ、古代精神の中核に触れた講義であった。続いて会員山田輝彦氏によって、正岡子規の「歌よみに与ふる書」を中心とした和歌の創作、批評の方法をマスターする講義が行なわれた。夜は学生自身の手による「リンカーン演説集」の輪読によって第二日目が終った。

三日目八日十七日には去る昭和十四年夏、信州菅平高原で行われた日本学生協会主催の大合宿の記録映画「文化の戦士」を観覧し、往時の学生運動の姿を今と比較しつつ検討した。その後北海道からオブザーバーとして参加した滝田浩造君は、学園の人民管理で話題となった北海道学芸大学事件の報告を行なったが、その左翼支配のなまなましい現実は、思想混乱の実態を強く訴えるものがあった。

予備合宿を通じて幹部学生にくりかえし要請されたのは次の諸点であった。即ち、

合宿がよかったという印象が鮮やかに後に残るようにしよう。合宿を一人一人が背負うということは、中断されようとしている国の生命を相続する決意をかためるところから出て来る。集った人の人生観をさらけ出し、ぶつつけ合うようにしよう。これは生涯にあるいはたった一度

だけしかない経験であるかも知れないからだ。何よりも一人間として班長をつとめよう。微塵も指導者意識があってはならない。又、学生を実社会から離れた特権的存在と考えず、国民の一人と考えよう。学生諸君は主催者たる大学教官有志協議会や国民文化研究会の人々に対して責任を負う必要はない。責任というならば、それは人生の厳粛さに対する責任でなければならない。班長個人に要請されることは、人のために心を労することを惜んではならないということだ。議論や理屈で処理してはならない。従って夜の検討会（一般参加者の就寝後に行なわれる会員と学生班長合同の会議）は各班長の体験告白とならねばならない。何よりも、強い決意を持って合宿を成功させよう。

こうして十七日の正午で予備合宿は終った。休むいとまもなく、学生班長は明日の準備のために深夜まで忙殺される身となった。

二、第七回合宿教室

八月十八日、阿蘇外輪山の山肌が濃淡の色あざやかに、くっきりと見えて快晴である。予備合宿を終った班長は機敏に動き廻って受付の事務をテキパキとさばいてゆく。会場の阿蘇内牧町立観光会館には、一年ぶりの再会をよろこび合うもの、初めて見る阿蘇の偉容に感嘆の声をあげるもの、次第に若々しい雰囲気が高まって来る。南は鹿児島から、北は北海道まで、文字通り全国的な規模の大合宿が幕を開けた。参加者の内容は次の通りである。

参加者側

◇参加学生学校名

九州大学、福岡学芸大学、福岡大学、福岡女子大学、長崎大学、長崎短期大学、熊本大学、鹿児島大学、鹿児島経済大学、宮崎大学、岡山大学、下関市立大学、島根大学、京都大学、神戸大学、滋賀大学、同志社大学、早稲田大学、慶応大学、法政大学、東京水産大学、亜細亜大学、日本大学、中央大学、武蔵大学、東海大学、東洋大学、日本経済大学、国士館大学、拓植大学、東京薬科大学、神奈川大学、国学院大学、お茶の水大学、高崎経済大学、

計　一五一名

◇一般参加者職域名

航空自衛官、熊本市役所、熊本市教委、熊本電通局、三菱電機、大洋造船、サンケイ化学工業、児玉製薬、山形屋百貨店、三楽オーシャン、福岡県

中学校、熊本市中学校、神奈川県高等学校、計二一名

◇招聘講師　二名　来賓　一名

主催者側

◇大学教官有志協議会　一〇名　国民文化研究会員　二四名　事務係　六名　計四〇名

総計　二一五名

これらの参加者を十三名から十九名の十一班に編成した。今年初めての試みとして、女子二十五名を二班に分けて女子班を作った。予備合宿を終えた班長たちは二人ずつ各班に配置された。

こうして万般の準備が整えられ、厳粛な空気の中で二時から開会式が行なわれた。国歌斉唱に続いて、祖国のために尊い生命を捧げた祖先のみたまに対して黙禱が行われた。大学教官有志協議会を代表して宮崎大学松田松雄教授、国民文化研究会を代表して熊本市役所勤務の瀬上安正氏、参加学生を代表して神戸大学諏訪田陽三君が、それぞれ簡潔で思いのこもった挨拶を行った。

オリエンテーションに続いて、小田村寅二郎会員が「この合宿の目ざすもの」という題で演壇に立った。今や国民同胞感の「探求」の時代から「樹立」と「拡大」の時代が来た。学生という身分と地位が何を意味するか、汗にまみれて働いている勤労青年との間に、特権的なへだて

第七回〝合宿教室〟日程表（昭和三十七年八月）（第二次阿蘇）

19　日	18　日	
起床・洗面 体操・朝食		6.00 7.00
講義（福田講師） 「現代の思想的課題」		8.00 9.00
班別討論	集合	10.00
質疑応答（福田講師）	休養	11·00
昼食	昼食	12.00
班別討論	班編成・自己紹介 開会式・オリエンテーション 「この合宿のめざすもの」 （小田村）	1.00 2.00
講義（夜久講師） 「短歌の哲学と技術」	講義（川井） 「大学生活の意義―学問の研究方法について―」	3.00 4.00
夕食 入浴 散歩	夕食 入浴 散歩	5.00 6.00
第一回短歌創作	班別懇談 輪読手引（小田村・夜久）	7.00 8.00
輪読 「古事記」	班別輪読 「リンカーン演説集」 「ホイットマン詩撰」	9.00 10.00
就寝	就寝	

22　日	21　日	20　日
起床・洗面 体操・朝食	起床・洗面 体操・朝食	起床・洗面 体操・朝食
総合検討	講義・全体輪読 (小田村) 「日本の進路——同信協力の方途」 テキスト 「聖徳太子」	講義(木内講師) 「世界の見方」
		班別討論
感想文執筆	班別討論	質疑応答 (木内講師)
昼食		昼食
閉会式	昼食	短歌批評(夜久)
解散	意見発表 (大教協 国文研)	大観峰登山 ・ 第二回短歌創作
	学校別 地域別懇談	
	夕食 入浴 散歩	夕食 入浴
	班別 短歌相互批評	班別討論
	全体コンパ	
	就寝 10.40	就寝

の線がないか、もしあるならば諸君自身がそれを取り除く努力をしなければならない。学生は時代全体の問題をそれらの人に代って真剣に考えるべき責任があるのだと、昨年度の合宿記録「続々国民同胞感の探求」中の小林秀雄氏の言葉を引きつつ力強く訴えた。

こうして日程表に見られるようなぎっしりつまったスケジュールは、緊張した姿勢でスタートが切られた。

講　義

合宿中にくりかえし強調された問題の一つは学問の研究方法についてであった。鹿児島大学助教授川井修治氏の導入講義はこの点の鋭い指摘であった。氏は現代学生を享楽型、現実型、政治型、哲学型等に分類した。そして、それらのいづれにも属さぬ、人間性の本質に根ざした綜合的人生観の把握の必要を述べ、就中個人と国家の問題を自己に切実な問題として、この合宿の期間中に徹底的に深めてみることを提案した。続いて、二十世紀はじめに活躍したドイツの心理学者ウィルヘルム・ヴントの学問論を引用しつつ、自然科学と精神科学の違いは対象の差ではなく、主として方法の差であること、精神科学における客観性とは自然科学とは異なり、その根本には、価値判断、目的設定、意志行為等の主観的要素がある。従ってその主観を高め、広めてゆく努力によってはじめて客観に近づくことが出来るということを詳細に論じた。自然科学の隆盛に比して人文系の学問の停滞と衰弱が主として方法論の間違いにあることを遺憾なく

指摘した講義であった。

招聘二講師の講義は別に収録しているので充分味読していただきたい。緻密な思考と鋭い論証によって、論壇に注目すべき発言を続けて居られる福田恆存講師は「現代の思想的課題」という題で論じられた。言葉の本質は主観的なものだという点を中心に、現代のインテリの思考の中心となっている言葉は、すべて西洋語の翻訳であるが、その内容の受け取り方の混乱が思想の混乱の原因であることを明快に分析された。

経済評論家として著名な世界経済調査会理事長木内信胤講師は、一昨年の雲仙合宿以来三回目の御講義であるが、「世界の見方」というお話は、激動する世界状勢を背景としたきわめてダイナミックな現実の把握であり、その綜合的で新鮮な対象のつかみ方が参加者の注目をひいた。

両講師の講義は、いずれもマルクス主義によって代表される現実遊離の観念的思弁に対して、現実的思考法の必要を痛感させる名講義であった。特に両講師とも、講義の後約一時間、班別討論によって問題を深め、それらの疑点について更に一時間の質疑応答の時間を割いていただいた。

輪　読

学問の方法論についての精密な講義と共に、古典の言葉に直接ふれるための輪読形式が昨年

の合宿からとり入れられた。輪読という方法は、相互の体験の交流によって、一人で読む時には気づかぬ点を指摘されたり、独断的な読み方を修正されたりして、人文科学の研究を深めて行くために不可欠の方法であることが確認された。十八日の夜は岩波文庫「リンカーン演説集」、国民文化研究会編「ホイットマン詩撰」をテキストに使って班別の輪読が行われた。学生班長のリードによって、アメリカが南北戦争によってセパレート（分離）されていくその中にあってユニオン（統一）を叫び続けたリンカーンの言葉にふれ、又、リンカーンから強い人格的影響を受けたホイットマンの長詩を朗々と唱することによって、アメリカ精神の最も健康な中核にふれる喜びを味わうことができた。

十九日夜は六〇名ずつに分れて三班を作り、国民文化研究会の夜久正雄、山田輝彦、小柳陽太郎の三氏によって、角川文庫「古事記」をテキストにして輪読を行った。この古典を始めて読む人も多かったが、倭建命の悲劇的生涯を叙した格調の高い言葉によって、「ことそぎて力ある」古代の緊張した精神生活を偲んだのであった。

こうして輪読の体験をつみ重ねつつ、第四日目の十九日、小田村寅二郎氏によって、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」をテキストに、参加者全員による輪読が行われた。二百名をこえる者が一堂に会して、一つの古典を読むという企ては相当思い切った試みで

あったが、昨年の経験をふまえて自信をもって臨んだ。特に司会者は憲法十七条の中で太子が、戦争中にスローガン化された「滅私奉公」という言葉ではなく「背私向公」という言葉を使って居られることを指摘したが「滅す」ではなく「背く」という言葉にこめられた個人生活と国家生活の悲劇的緊張について、司会者の体験的な解説が参加者の心を強く動かした。ともすれば思いつきや理屈のやりとりに低迷しがちだった班別討論が、この輪読を一つの転機としてすばらしい展開を示したことによっても、輪読という方法の力を再確認させられたのである。

班別討論

十一に別けられた班における、学生班長の活躍は誠に献身的であった。討論の司会、本部との連絡、夜の班長会議、と多忙をきわめた。最初は自己の固い殻にとじこもっていた人々も、日のたつにつれて

心の通い合う喜びを体験した。戦争の問題、友情、天皇制、学生々活、そういう重大な問題を正面からぶつつけ合って、火花を散らすような激しい議論が行われた。時には白々しい沈黙が支配したり、いたずらに概念的な論理だけが空転したりした。収拾のつかぬような混乱もあった。そういう危機をのりこえのりこえして、概念論の応酬や単なる知識のひけらかしが次第になくなり、なまの体験のぶつつけ合いになって、ようやく班員の心が一つに結び合うようになった。最後の夜の全体コンパの後は、語りつくせぬ思いのために深夜まで話し声が続いた。

短歌創作—大観峯登山

今年の合宿の最大の特色は、短歌の創作をスケジュールに組み入れたことであった。これも合宿の歴史にとって画期的な試みであった。小合宿での経験はあったが、大合宿で成功するかどうか。歌というものについて全くの素人が大部分である参加者に、短歌創作の課題を課するのは冒険に違いなかった。導入講義を分担された亜細亜大学教授夜久正雄氏は一高時代以来この道一すじに生きて来た方である。「短歌の哲学と技術」という講義は、歌を作る意義と、具体的な歌の作り方を中心にユーモアをまじえたやわらかい話しぶりであった。歌は原則として一首一文であること、自分の感情や体験をうたうこと、用語はやはり文語を使うべきで、日常語では切実な経験の表現にならぬことなどが素人にもよく納得できた。特に歌をよむことによってわれわれは人生の経験の意味を把握し、人間同志の内的平等の原則を体験できる、さらに歌

に表現することが我々の感情を永い歴史と、広い同胞につないで行く道であるという指摘は強く印象に残った。この導入講義を手引きに、第一回短歌創作が行われた。頭をかかえたり、指を折ったりして苦吟する姿があちこちに見られたが、ともかく三百余首の習作が提出された。これが十九日の夜である。会員が手分けして約百首をえらんだ。翌二十日午後、夜久講師はこれらの歌一首一首について、作者の心をくみながら正確できびしい批評をした。笑ったり、うなづいたり、歌をよむことの楽しさを実感した。丁度この時間は大観峯登山の直前に当っていたので、改めて第二回目の短歌創作の課題が出されたのである。

大観峯登山は三台のバスに分乗して行われた。外輪山を登りつめて高原の草を踏んで三々五々、約二粁歩いて大観峯に達した。この日は少し靄がかかって、名にし負う阿蘇五岳も茫漠と霞んで見えたが、見はるかす眺望は雄大をきわめ、草を吹く風にも、空ゆく雲にもすでに初秋が感じられた。班ごとに写真を取るもの、草をしいて遠望を楽しむもの、しみじみと話し込んでいるもの、激しい思想生活から解放されて、大自然に浸るよろこびを満喫した。しきりに歌の創作に没頭している者の姿も見られた。山を下った時は、ようやく陽も傾きかけていた。

その夜就寝時までに提出された歌は実に九百余首に上った。二百余名の者が同時にこれだけ多数の歌を作るという経験は稀有な事であった。会員が分担して三〇七首の歌をえらんだ。十枚一組のプリントを二〇〇組作らねばならぬ事務局は戦場のような忙しさであった。素直でよい

歌が意外に多かったのは何よりうれしいことであった。これらの歌稿は二十一日夜の班別相互批評にもちこまれたのであった。

三日間の修練で、ずぶの素人がともかくこれだけのものを作ったということは、まず参加者自身にとって一つの驚きであった。技巧の不充分による表現のまずさは仕方がないとしても、誇張や虚偽はすぐ見破られて痛烈に批判された。作者の表現しようとする気持に入って行って、皆で考えながら字句が訂正されてゆくと、最初の作品とは驚く程違ったすばらしいものに生れ変る。その時、期せずして班の者が皆よろこびの声をあげる。こうして歌をつくる意味とよろこびをつぶさに体験できた。歌は単なる風流の遊びや狭い意味での芸術ではなく、自己の思想を正確に表現し得る力を養うと同時に、虚偽の表現を正しく批判し得る力も併せて養うことができる。技巧の優劣よりも心の素直さが優先するということもよく理解できた。こうして班員の心は短歌の相互批評を通じてしっかり結び合わされたのである。

× ×

合宿四日目の大学教官有志協議会、国民文化研究会の意見発表では、大教協から宮崎大学教授中山至大氏、同松田松雄氏、神戸大学助教授黒岩一郎氏、亜細亜大学助教授梶村昇氏が、国文研からは桑原暁一氏、宮脇昌三氏、岡本弘之氏、徳永正巳氏、宝辺正久氏、上村和男氏がこもごも立って、若い学生諸君に激励の言葉を送った。又、学校別、地域別懇談に於ては、これ

からの学内サークル活動等の具体策が真剣に討議され、持続的な活動への態勢がととのえられた。また、スケジュールの表面には表われていないが、毎夜一般参加者就寝後に行われた合同検討会議は、大教協、国文研、学生班長の構成によって、当日の運営の反省と翌日の行事の検討が真剣に続けられ、しばしば深更二時に及んだ。

こうして最終日の二十二日を迎えた。綜合検討の時間には、参加者全員が講堂に集り、一人三分の制限時間で、次々に希望者が登壇して感想を述べた。それぞれにニュアンスの相違はあっても、心を打つような生きた言葉が多かったのは、まことに嬉しいことであった。しめくくりの講義で小田村寅二郎氏は次のように述べた。

逆コースという言葉がもっぱら否定的な意味で使われ、古いものはすべて悪いものというムードの中で、正しいと思うことを貫いてゆくには異常な決意が必要である。例えば天皇制の問題一つを取っても、歴代天皇の御製という文献的な「事実」に即して考えることは、流行思想に禍された一種の先入観――すなわち「仮定」の上に立つ断定よりも遥かに学問的である。天皇の御心を偲ぶことなしに、政治制度としての「天皇制」のみを論ずるところに問題がある。われわれは正しい学問の方法と強いスピリットによってのみ現代の危機を打開できるのである。

この数日のはげしい精神の起伏に耐えて来た心に、これらの言葉は力強く、真すぐに入って

来た。解散の時刻が刻々迫る中で、感想文執筆に一時間があてられた。したためられた言葉の一つ一つが、合宿の成果と将来への見透しを教えてくれる貴重な言葉であった。

閉会式は国歌の斉唱で初まった。前夜からの台風十三号が通過した後の、雲間から見え初めた青空を仰ぎつつ、心をこめてうたった。大学教官有志協議会を代表して、農学博士水野武夫氏、国民文化研究会を代表して山田輝彦氏、学生を代表して尾形紘行君が別れの挨拶を述べた。緊張した生活をふりかえって、涙を抑えてみんなで「螢の光」を合唱した。一時かっきりに合宿のすべての行事はとどこおりなく終了した。一人一人が静かな決意をもやして、四泊五日の生活を過ごした阿蘇山麓の町を後にしたのである。

この合宿教室のめざすもの

《この一文は合宿教室第一日目に国民文化研究会小田村会員によって行われた導入講義の要旨である——》

はじめに

大学生の社会的責任

社会機構と人間

合宿教室における討論の意味

女子班設定の意図

はじめに

この合宿は今年で第七回ですが、以前の六回のうち、第一回から第三回までは、当時世相も大変混沌としていまして、古事記の言葉をかりて評すれば、「くらげなす漂える」中の合宿であったといえましょう。国を愛する、というようなことが、頭から否定されてしまうほど、祖国の歴史にたいする軽蔑感が世の中にみなぎっておりました。次の第四回から第六回までの三回にわたる合宿につきましては、「国民同胞感の探求」という本を公刊してレポートとしてあります。その第一編は第四回の合宿教室で、阿蘇のこの場所でやったものであります。その次の第五回の雲仙での合宿教室のレポートが「続国民同胞感の探求」、それから第六回の雲仙のが「続々国民同胞感の探求」という本です。それでいまここに第七回目を迎えるに当って私たち主催者は、今回からは「国民同胞感」を「探求」するという心境を脱して、いままでの六回にわたる合宿とは、やや心組みを変えております。すなわちこれからは、「国民同胞感」を日本国中に拡大していこう、樹立していこう、健全に拡がらせよう、ということを目ざして四泊五日の合宿教室を踏み出したいと考えているのです。さき程開会のあいさつで国文研の瀬上さんがおっしゃったように、いまの日本は、なにかわけのわからないままに二つの分裂へとひきさかれようとしており、しかもその分裂がいつはてるともなくつづいていこうとしています。そこで

われわれが、まず第一に考えなければならぬことは、この自分たちの住んでいる日本の国を、なんとしてでも分裂をさせないようにしなくてはならない、ということです。その目標をはっきりと立てて、それに必要な強い意志をお互の心の中に持ち合わなければいけない。しかしそれは一人ではできないことです。それゆえにその共通した強い意志をお互いに持ち合おうではないか、という心組みをもって、この合宿のスタートを切りたいと思うのです。強い逞しい意志を、志を自分たちの祖国の上に寄せながら、これからの自分たちの日常生活を送って行こうという決意に立って、この合宿のスタートを切りたいと思うのです。そこで私はこのことについて、いくつかの条項に分けて合宿の目指すところを次に申し上げたいと思います。

大学生の社会的責任

まず第一に、みなさん方は大学生ですが、その学生という身分と地位は一体なにを意味しているか、ここではそれをまずいっしょに考えてみるところから出発します。諸君は学生であり大学生である。その自分たちが学生であるという意味、その社会的意味はなにか。まず第一には、みなさん方自身の家庭環境が諸君が大学生たることを許しているのだ、という事実がある。アルバイトをして学資を求めている人があるにしても、とにかく諸君は、通学しうる環境

にある。それからまた、第二には、諸君自身が大学に入学するまでの勉学によって、大学に進むにふさわしい学力を持つにいたっていた、という事実にも気付くことができる。しかし、そこでその考察をとめてはいけない。第三の点を考えてみなければならない。すなわち、もし諸君が大学生であるということの社会的意味が、第一の諸君自身の家庭環境の故であり、第二の諸君自身のもっている学力の故であるということだけでおしまいにしてしまったら、諸君は諸君と同じ年輩の大学生でない無数の青年たちと諸君との関係を見おとすことになりはしないか。青年たちは工場で油にまみれて働き、また機械と取り組んで働いているはずだ。また事務に従事する青年たちは、デスクに取り組んで、彼の生活している社会の、その社会機構の歯車の一コマとして働き続けているはずだ。農業に従事している青年たち

も沢山いる。そこでその人たちは大学に進む生活環境を持たなかったから、また大学に進む学力がなかったから、そうして働いているのだ、と諸君が考えるだけでいいのだろうか。また、ここには女子大学生も多数来ておられる。女子の場合でも同じことがいえると思う。同じ年頃の人たちが、あるいはお手伝いさんになってあちこちの家庭に勤めている、あるいは会社の受付係をしている。その人たちと自分たちとの差というものは、自分たちの学力と環境の故であると考えるだけで、その関係について深く考えることを止めてしまっていいのであろうか。諸君が大学生であるという社会的な意味は、それでは解決されていないと、私は思うのです。そこで、考えてみなくてはならないことがあるはずです。諸君は大学を卒業して社会のいろいろな地位につくようになるが、中学出や高校出の人たちにくらべて、いわば出世コースを歩むことになります。彼らより速度のはやい昇進のコースを辿っていくでしょう。そして同年輩の人たちの上に立っていくでしょうし、年上の人たちよりも地位の上の人となっていきます。そこでもし諸君が、いま自分たちが、この人たちとの対比の意味で大学生であるという自覚を深く掘り下げ、しっかりとした責任感を確立させておかないと、将来どういうことになるか。諸君が、その勤労青年たちに対する責任感をあいまいのままにして実社会に入っていってしまうと、彼らと諸君との間になにかの一つの区切りが出来てしまうことはないでしょうか。それは階級意識とまでは云えなくても、あの人たちは一般の下から上って来るコースの人たち

なんだ、自分たちはいわゆる出世コースを辿って行く、課長、部長、重役になって行くコースを辿って行くのだというようなことが、諸君の心中で簡単に決められてしまっていたとすれば、彼らは一生の間、あなた方をどういう眼で眺め、どういう気持で見るか、そこを考えてみる必要があるはずです。あなた方の心の中に同年輩の同じ国民に対して、すでに大学生時代から、分離感というか、軽べつ感というものが、無意識のうちにできてしまっていたら、彼らの側から諸君にたいして羨望感や卑屈感が生まれてくるのは当然のことであるし、それが反抗感になり、階級意識感になってくるのも、あたりまえのことではなかろうか。こう考えてくると、世の中にややもすれば起りがちな対立感や闘争感を、この世の人々から無くしていくにはどうすればよいか、また同じ年輩の青年たちの間に、それがおきてこないようにするには、どうすればよいか、それを考えなければならないことになる。そこを考えると、この課題に取り組み、この発生を避けるために、率先して従事すべきは、一体諸君たち大学生であるのか、それとも大学に入れなかった勤労青年たちなのか、そこを諸君は考えて見なければならないはずだ。諸君はそこで安易に問題の本質から逃避してはならない。すなわち、社会機構をなおせば、そんな問題はなくなるんだ、といって、社会革命の運動によって解決しようとする人がいるが、それはちょっと待って下さい。いまここで考えようとしていることは、人間の心の持ち方をつきつめていこうとしているのです。社会機構によってどうなるものでもない、それとは

ちがう次元の問題ととりくもうとしているからです。そこで、さきの問題にかえって考えつづけるわけですが、世の中の人がほんとうに国民として一つになって、一つ心になってお互いの社会生活を営もうというのであれば、その道を切り開くのは同じ年輩に関する限りは、学問に携わり、ことに大学に籍を置く人たちが率先してその道を確立して行く以外に、世の中にその道を立てる方法はないと思うのです。片方は勉強する時間の余裕も乏しく、思索する時間も大学生ほどには持ち合わせていないのですから。そこを、諸君はしっかりとよく考えてもらいたいのです。一つの例証となりますが、「続々国民同胞感の探求」一九八頁を開けて下さい。ここに昨年の合宿で小林秀雄先生がお話になった一節がありますが、それをいっしょに考えながら読んで見たいと思います。

「江戸の学者、いまの言葉でいうインテリは大体武士です。身分制度が非常にはっきりしていた時代の武士は禄（ろく）をもらってなにもすることがないのですよ。武士は食わしてもらっている階級なんです。農民は激しく働いている。だから激しく働いている農民は責任がない。武士は禄をもらっているから農民、町人を指導する責任がある。だから武士というのはインテリなんだ、という思想になるし、インテリというのは責任をもった階級、特権階級なんです。もしこの責任を果すのがいやなら、百姓になれ、というわけです。それで、その責任とは学問をする責任なのです。人生をいかに生くべきかということを他人に教えた

り、自分で体得する責任があるわけです。これを免れることはできない。それが山鹿素行などが説いた武士の身分論です。」

という一節があります。これは「人生をいかに生くべきかということを他人に教えたり、自分で体得する責任」が武士にあるといわれたことで、武士には、百姓や町人に代って社会、国家の全体のことを悩み苦しみ考える義務がある。武士とは、そういうものなのだ、だから、それを考えるのがいやで自分のことばかり考えようとするのなら武士をやめて百姓に戻ったらよい、町人になったらよい、それが当時の思想であった、と小林先生はいわれています。武士は武士たるにふさわしい人生問題というものと四つに組んで、それを真剣に考え学問をして行かなければならない「宿命」があったのだということを指摘しておられるのであります。諸君が今日の社会で、大学生という立場に立っていることを、この武士のことと思い合わせて考えてみて下さい。諸君と同年令の大ぜいの青年男女は、働らくだけがせい一パイで日々を送り、思索したり勉強したりする時間を十分にもっていない。だからそれらの人々に代って大学に学んでいる諸君は、その人たちの分まで、〝人生とは何ぞや〟ということについて、考えなければならないと思う。だから、学問に従事していることについての、社会的国家的人間的人生的な意義を、諸君は真剣に考えて行かなければいけないのです。

社会機構と人間

それには、何よりも「もの」が正確にわかるようにならなければいけない、人々の心もわかるようにならなければだめなのである。学問の目標を知識に限ってしまってはだめであって、学問というのは、人間社会における人間同志のつき合いの道すじを明らかにすることであり、ものの道理がわかってこなければ学問をしたことにはならない、と考えるべきでしょう。それと同時に、人は十人十色というように、千人集まれば千人全部違うし、その考え方も全部違うのです。その千差万別に違う考え方の人たちが、なにを考えているかということを知るようになっていかなければ、諸君は、学問をしていることにはならないのです。

そこで、目を移して一つ社会の実情を見てみましょう。会社を例にとってみれば、そこには、社長がおり重役がおり部長がおり課長がおり係長がおる。組合を見ても、その中にも組合長があり執行委員長がありあるいは執行委員があり書記がある、これらいろいろのポストにいるひとりひとりをとらえて、この人たちが日々なにを考えて暮しているのか、なにをしようとして一日暮しているのか、ということを観察してみよう。まずその人たちからそのポストに付随している権力と権限とを除外して生まのままの一人の人間にしてみたらどうなるだろうか。社長からは、社長の権限をとりのぞいてそして部下にむかわせてみたらどうなるか。部長からも

課長からも係長からもその権限を除外してみるとどうなるか。権限を「かさ」に着ていばっていた人たちでないにしても、その権限を無にして部下たちと人間的に対等のつき合いをする心ぐみが、その人たちにはたしてあるだろうか。それが平素から用意されていたとすれば、こうした場合でも、そこには大した変化はおこりえないはずである。人間同志の信頼関係が、その基礎に確立されているからである。また労働組合の組合長に付随している権限とか命令権とかいうものを除外して、その人を見てみる場合にも、同じことが云えるのではなかろうか。更に政治家についてみても、国会議員、県会議員はバッジをつけている、そのバッジをその人たちからはずして全く裸の一人の人にその人を戻してみる、そういうようにしてその人たちを見てごらんなさい。はたしてその人たちを世の中の人たちが挙げて尊敬したり、その部下たちが前と同じようにその人たちを尊敬して見続けるであろうか。その人たちに付随している権限と権力と命令権を社会の人々は見たり評価したりしているだけで、その人の人間性そのものを評価していたのではなかった、ということが発見されそうである。だから、世の中の人は代議士というとえらいというし、大臣というとえらいという、あるいは社長だというと会社の人はみんなおえらい方だという。重役でもそうなのです。係長に対してはその係の下の人たちが係長を尊敬するという社会生活を送っております。送ってはおりますが、現代という時代は、その人それ自体がどれだけえらいのか尊敬するに値するのか、それともその地位がえらいのか、そこが、

はつきりしなくなつている時代なのです。地位の蔭に人がいるのです。その地位をとつてしまうとその人は全然消え失せてしまうのです。

ところが、いまの社会を見て「これは社会機構が悪いのだから、そのポストに着いている人がだめなのだ」というふうに考える人間が出てくる。そして、機構をなおせば、その地位にふさわしい人がその地位につくようになる。だから社会機構をなおそうではないか、それ以外には方法はない、といいだす。しかしこのことは、そのように一概にいえることでしょうか。社会機構を直してみたり作り変えてみても、その新しい社会機構にもやはり、いろいろなポストが出来てくる。最高のポストもあるし中間のポストもある、とにかくポストは依然として同じくあるわけです。その新しく出来るポストに、それぞれの人間を配置してみた場合に、社会機構は変わつても、人間は変わるわけもなく、お互いに排他的、利己的な人間同志のやることであつてみれば、やはり、同じことではないか。ことに社会主義体制では、上下の区別は、一そうきびしくなり、地位に付随する権限や命令権はもつときわだつて人々を制約してしまう。これで一体、機構を作り変えれば人が直るという自信がつきましようか。機構が人を直しうる力をもちうるだろうか。人というものは人の心の努力によつてのみ直つたり感化されたり立派になつたりするものではないのでしょうか。機構を直せば人がよくなりますか。私にはどうしてもそうは思えないのです。人というものはある程度は社会機構の影響をうけて変わつていく

こともあるが、それは大したことではなく、一定限度に止まるだろうと思うのです。それよりも、人を直し、人を正し、人を立派にしていくものはやはり人から人へと伝播していく感化力であり、教育力であり、発奮によったり反省によったりして、人々は、りっぱな人間になっていくと思います。その人自身の自発的な発奮や自覚がその人を立派にしていくのであろうと思うのです。

諸君もやがて、社会に出て行かれます。社会に出てから課長になり部長になり、さらには重役などになられる。また、組合に入って組合の委員長にもなられ、書記長にもなって行かれるだろう。また政治家にもなられるだろう。そうしたときに、諸君は、それらの地位、ポストが、本来その地位につく人に要求している幅の広い、奥行きの深い人間的な洞察力、思索力、反省力、平等感覚、などを用意してそのポストにつくように準備していかなくてはならない。そうでなしに、ただ、その地位を得るために、がむしゃらに働き、人をおしのけてそこに行こうとしているだけならば、それは意味がないのです。みんながそんなふうにしていくとすれば、日本中の人全体が、社会の人全体が、どこかの地位に辿りつこう、その地位に辿りついたらまた次の地位に辿りつこうというだけで、一生の人間のエネルギーを使い果たしていくならば、世の中というものは非常につまらいものになってしまうだけです。事実、近代社会は、そうしたものになりきってしまっているのではなかろうか。だから、諸君は、この近代社会の弊風をこ

そ改革しなければならない。諸君はいろいろな地位に就いていくであろうが、その地位がもっている権限と命令権を除外してもなお、その仕事ができ、また部下や同輩が心からあなたの傍に寄って来るような人にならなければならない。また、同じような志を持っている上長者とも知己になり、自分の相談相手になってもらえる人物だ、と思われるようになってもらいたい。下の人からは、諸君が上長者としての権限や命令権を振り廻わさないでも慕われ、胸襟を開いて話しうるような人に、諸君が自分自身を鍛え上げていってもらいたいのです。そういうことをしなければ、どうしても世の中はよくなるとは思われないのです。革命によって、いまの社会の指導者たちを、一度に全部殺してみたところが、それに代って登場する現在の、部長や課長や係長が役に立つでしょうか。おそらく無駄なことです。なぜならば、それらの人たちは、いままで地位こそ下であるが、重役や社長と同じ種類の人生コースを辿ってきており、命令権とか権限にしがみついてそれらの係長や課長になって来ているのですから。また、いろいろな組合活動における下部組織でもそうなのです。そういう同じ傾向が社会全体に一般的に見られるのがいまの時代です。全部改革しようとするには、全部の人間を一度殺してしまわなければ改革にならないでしょう。代わるにふさわしい人間は一人もいないんです。機構を変えて上の人たちだけを除いてみたってよくなるなどということはありえない、この世の中は、そんな簡単なものではなかろうと思うのです。

そこで再び大学生活に返って考えてみましょう。もし諸君が諸君と同じ年輩の青年たちの身の上を考えずに、またその人たちに代わってものごとの本質を、真剣につきつめて考えようとしないで「自分は大学生なのだ」といい合っているならば、私はそれこそ誤ったエリート意識であるといいたいのです。エリート意識が世の指弾をうけてきたのは、いまにはじまったことではないが、ここでは、その内容を少し、絞って考えてみなければならない。たとえば、東大と私立大学というような学校差をとらえて、東大生はエリート意識があっていけない、というようなことは、実は、人間的価値からいえばレベル以下の東大生への忠告であって、問題とする足りない。また、年令の差から来るエリート意識も大したものではない。上級生と下級生の間において、上級生がもつエリート意識などというものも大したものではない。しかし、同じ年輩の青年男女の間で、一方は学生として、勉強し思索することのできる生活におり、他方は働いているときに、その勤労青年たちが、働らきながら、この社会を守り育てていてくれるのだ、という大学生としての一番大切な心がまえを忘れてしまっているとすれば、そこにこそ誤ったエリート意識の重大な芽生えが発生していると思うのです。諸君がそれに気付いてくれるかどうかが、第一の問題点です。そしてもし、それに気づいてくれたら、これはいけないと感じて勇気をふるってそれを捨てて行かなければいけないだろうと思います。この合宿に参加した機縁を境として、それを排除して行っていただきたい。そこで諸君が、心に固く決意すべき

ことは、第一には、自分が大学生であるということの社会的意義を、国民的責務を、そして人間的義務を自覚して、日本国中の万人に代って、大ぜいの人に代わって心を悩まし、心を労して行こうとする精神的苦闘と勇敢にとりくむ決意をすることです。

さきほどの小林秀雄先生の言葉を借りて云えば、「それがいやなら学生服を脱いで、あしたからどこかの工場に行って働け」ということになりましょう。昔の武士はそういうものであったからこそ働かないで禄を食んでいたのだと小林先生はいっておられます。現在の社会をみて、不平等の多いことに気づき、それを憤ることは諸君として当然ですし、その憤りを足場にして世の中をみることも大切です。ただ安易な機構的革命論に走るだけでは余りにも軽薄にすぎると思うのです。もっと人生そのものの起伏をみ、もっと人生そのもののありのままの姿をと

らえるよう努力すべきだと思います。諸君は「考えよ」「悩め」「憶念せよ」――とにかく心的活動、精神的労作にもっともっと突入していかなければならない。要するにほんとうに学問をするにふさわしい態度を確立せよ、それを避けて自己一身のことだけを考えようとするなら、もう学生服を脱いで勤労生活にはいれ、ということもできるし、心を労する努力をさけて革命運動に狂奔するだけなら、これも学問する基本的態度とは遠くはなれてしまうのであるから、これまた学生服を脱いで、実社会にとびだすべきではなかろうかと思うのです。

合宿教室における討論の意味

さて、この合宿の運営に当たって、「班別の懇談会や討論会」をもちますが、それについて大切な心構えを次にあげておきたいと思います。今日の大学生諸君のやる会議の運営には、非常にすぐれた公平なやり方を見ることができますが、その反面、次のような傾向が目につきます。というのは、チェアマン（座長、議長、あるいは司会者）が、そこに集った人たちみんなから意見を出させて、そしてみんなが納得したという線で議事を取りまとめるというふうにする。そのこと自体はそれでいいと思いますが、しかし、往々にしてこういうことはないでしょうか。一つの問題を審議して検討して行こうとするとき、全体の意見を「取りまとめなければならない」ということが先に気がかりになって、色々努力して取りまとめてみると、それは集

った人たちの最大公約数的な意見にすぎない。しかもその内容は、あまり最大公約数的にまとめるため、その結論は平凡すぎるものがでてしまって、なにもそんなに討議の時間をかけて検討しなくてもはじめからわかりきっていたようなことをまとめたに過ぎなかった、というようなことがよくある。しかし一つの議題の賛否を問うようなとき、たとえば、「デモに参加するかしないか」というようなことを討議するときには、どちらかの結論が出るから討議の意義はあるわけだ。しかし、一般的な討論ことに人生問題や思想や芸術や宗教にまでふれる問題などの討議で、いたずらに最大公約数を求めようとして、議事のとりまとめを急ぐことは、むしろマイナスであることを知らなければならない。たとえば「人間はどういうように生きて行ったら一番正しいのであろうか」という問題を話し合うときを考えてみればいい。それは、討議とはいっても、実は「道を求める」場なのです。道を求めるための検討会なのです。そういう場合には、全体の人の考え方をそこで集約出来るようなものではない。そこでは多数の同意をさがし求める態度ではなくて、集った人たちのうちの誰か一人でもいい、ほんとうに心からしみじみとした発言をするものがあったら、その人の発言に、一同が耳を傾け、心を寄せてそれにきいる、という雰囲気が全員によって用意されていなければならない。体験的な表白や告白の発言と、観念的な理論的発言とが、座長や司会者によって並列的に処理されるなどということは、もっとも避けなければならない。だからこの場合の座長や司会者はその全員のだれよりも、高

度な精神力と、人のことばの真実性の度合いを直観しうる力をもっていなければならない。だから、能弁家や饒舌家というようなものはそこで権威ある存在になってしまってはいけないということです。また理論構成をもって相手を説伏しよう、ごまかしてしまおうというような発言者も、全員から見破られていかなくてはだめなのです。そうではなくて、どの人間が、どの人がほんとうに真剣にものを考えているだろうかということをお互いによりよく感じ取ろうとする態度が大切で、いいかえれば、その会合で、ほんのわずかの発言であったにしても、人生体験の真実にもとづいた発言をした人に、全員が注目し、その高いレベルに全体のレベルを上げていくように心していることが大切なのです。それはなぜか、というと、学問を研究する場というものは、つねに一歩先へ進んで行く道を求めているわけです。学問の場においては大ぜいの人の最大公約数を求めてみても、それは資料的なものになるだけであって、そのもの自体からはそれほど高く評価されうるものはでてこない。わずかただ一人の人がちょっとヒント的に云ったことに全体の人が「ああそうだった」と云って思い返えしながら、そのただ一人の人がわずかに発言したことにみんなが従って行こう、そこまで上って行こうとするような努力が、学問の場には、絶対に必要だからです。共同研究も、共同討議の方法も、そのようでありたいのです。これは諸君だけの問題ではなく、いまの日本の社会全体のまずい風潮ともいえます。たとえば、重大な問題を審議しなければならない場において、つねに最大公約数的なもっともレ

ベルの低いところに結論をもって行くことに力が注がれていて、もっと高いところに高貴な意見が出ていてもそれを同席者が黙殺してしまっている、という情景がしばしば繰り返えされています。これはいまの日本の嘆かわしい一つの傾向です。したがって、この合宿、ことに班別討論における班長の任務は、非常に意義深いものを持っていますので、班員諸君も、その点よく協力して、学んでいってもらいたいと思います。

女子班設定の意図

最後に、今度の合宿において三十数名近い女子の方々の参加があります。従来女子と男子を同一の班に配分するように組織されておりましたが、今年は女子班を別に編成しました。その意味についてご説明申します。ここに集まられた女子の大学生の方々に対しては、女子学生であるとともに、やがて人の母となられる位置にある方々であるという気持ちもあわせて持ちながらここにお迎えしたわけです。と申しますのは、男女同権ということが、終戦以来叫ばれて、女子の社会的地位が種々改革されて来たことは、私ども心から喜んでいるものであります。しかしなおかつ日本における男子に対する女子の在り方については、これから改めて解決され切り開かれて行かなければならないたくさんの問題があることを感じております。日本の女性の在り方、人間としての女性としての在り方、あるいは男女同じ道を進むにつけての女性

の在り方という問題は、これからの女子および、ことに女子学生によって大いにその問題に取り組んでいただき、その道を開いて指し示していただかなければならない問題のように思います、したがって、大学でも男女がいっしょに勉学しておられる時代ですから、ここでは別の班にして、男女それぞれの特有の問題を別箇に検討していただくことがよいと思ったわけです。女子諸君にとっても、諸君と同じ年令で実社会に入っている大ぜいの同性が、学生としてのみなさんに期待している沢山の問題があると思うからです。日本の家庭生活が次第に近代化されるにしたがって、女子にとっての問題にも厳しいかずかずの期待が寄せられています。それらとも大胆に取り組んでいって下さい。いまどきの週刊誌やラジオ、新聞等は男女の問題をあまりにも軽薄に扱いすぎているように感じます。たとえば、男子をコント

ロールするにはどうしたらよいか、などという受身の問題だけが論じられています。しかし、男の心に欠けてはならない大切な点は何か、それを男子に忠告し助言し、いさめることのできるような、強くやさしい女の心は、どのようにして修練されていくかも、検討すべき問題の一つでしょう。先天的な男女の差異を、人間的信頼感と相互尊重によって、内的に平等に高めていく道は、どうしても確立していかなければならない問題だと思います。いたずらに外面的な平等を求めすぎてそのために、内的平等の道をおろそかにした嫌いのある戦後の日本でありますので、男女同権という言葉の中にももっと深い肉付けと味わいある筋を立てて行かなければならないように思うからです。女性のやさしい女心、行き届いた思いやり、それらは男性がなかなか知りえないでいる深さと奥行きとを含んでいるでしょう。女子学生諸君にここでお願いしたいことは、男子学生と共に考えるべき問題とともに、女子自身の相互の間において検討すべき問題をも真剣にとらえていただきたいのです。どうか女子班を編成した積極的な意味を理解していただきたいと思うのです。立派な男性をどんどん産んで育てて教育していただけば国もしたがってよくなるし、社会もよくなる、その立派な男性を産み育てて教育して行く直接的な立場に立たれるのは女性でございますので、人の母たるべき将来を心に描かれながら、女子班の運営に当っていただきたいと念じます。

われわれ日本人は、戦時中によく聞いたことですが、将校も兵士も戦場で戦死するそのとき

に、「天皇陛下万才」と叫ぶか、「お母さん」と絶叫して死んで行くか、いずれかの場合が多かったということです。「お母さん」と叫んで死んで行った兵隊さんのその叫びは、自分をこの世に産んでくれた母の胎内に、またその心の中に、いま戻って行く、という声であったかも知れない。それは、いま死せんとするに当って、この世に生まれ育まれたその「生」と、いまの「死」とを統一せしめようとする人間の本能的な姿であるかも知れない。また「生」を貫いていた母の暖かい慈愛に万腔のこの世の「生」の感謝を捧げようとする姿であったかも知れません。また「天皇陛下万才」と叫んで行ったその声は、やはり自分の住んだ祖国に向かって自分の「生」の限りを捧げ、その祖国の生命の源と考え続けてきた天皇陛下に向かって、「天皇陛下万才」という声が叫ばれて行ったものと考えられるのです。いずれにしても、生死の境において叫ばれた言葉が、祖国の親としての「天皇陛下万才」か、しからずんば自己の生みの親としての「お母さん」という声であったということは、決して軽々に見すごしてしまってはならない問題を含んでいるのであって、ほんとうの人間の真実の姿をそこに示しているものであろうと思うのです。母のいのち、母の使命は、大の男が死に当って心を寄せる最高のものであることに思いをいたしたいと思います。

産みなさぬものなしといふあらがねの土はこの世の母にぞありける

明治三十七年の日露戦争の際に明治天皇が詠まれた歌であります。母というものの力に寄せ

られた天皇の強いお心持ちだと思います。日本の国の神話に出て来る天照大神という神もまた女性でございます。女性というものの在り方、あるべき姿というものを女性自身によって検討していただくための女子班をどうか有効に活用していただきたいと思います。

（小田村寅二郎）

合宿教室における講義

現代の思想的課題

福田恆存

はじめに……言葉は主観的なものである……「物」に対する日本人の感覚……
言葉の背景をなす価値観・(1)　マルキシズムの用語　(2)　西欧と日本……言葉と生き方との分裂……悪に耐える思想……「現実」の意味……知性の限界と感情
《質問に答えて》
悪について……過去とのつきあい……言葉について……　教育と教養……
……理性について……人生の目的……日本の将来

はじめに

今日の私の話は「現代の思想的課題」ということでありますが、実は今日私がお話し申し上げようと思うのは、西洋の思想と日本の思想との違いということになろうかと思います。日本が明治以後西洋の思想を受け入れて近代日本というものが生れて今日に至ったわけですが、その近代日本の姿についてお話ししようと思います。

思想的課題と申しますが、当然その前には思想的混乱という事が前提としてあるわけです。今日の思想の混乱のもとは、いうまでもなく明治時代に西洋の思想を受け入れて、その結果として生じたものなのです。この混乱は何としても正さねばなりませんが、そのためには混乱の原因に対するはっきりした自覚がなければなりません。ところで私は、お前の書いたものには解決がないというように人々からよく言われます。「お前の言うことは大体その通りかも知れないけれども、それは診断であって解決にはならない」という風に言われることがよくあるのです。ところが私に言わせれば、解決などという事を考えているからいつになっても混乱が続いていくのです。混乱の姿というものが本当に私たちの目に映っていたなら、解決はそれぞれの

人に応じて当然起って来るはずであって、混乱の自覚がないのにいきなり解決の道を説いたり、また解決のために一所懸命努力したところで、ますます混乱を重ねるばかりだと考えます。だから大事なことは解決を急ぐことではなく、混乱している現実を誰でもがその人なりにはっきりと見きわめる事だと思います。従って私は解決を考えたことはない、ただ私は現在の日本が如何に混乱しているかを見ていただきたい、少なくとも私が見た混乱の姿を皆さんに見ていただきたいと思って、ものを書いておりますし、こうして今お話をしているわけです。従って私の話からは絶対に解決法は出てまいりません。しかも現在の日本においてこの解決の道というのはここしばらくは見出せない、少なくとも私たちの目の黒いうちには出て来ないかもしれないというように考えております。それで明日から何か役に立つ知識を私から御期待にならないようにしていただきたいということを最初に申し上げておきます。

言葉は主観的なものである

まず私は言葉の問題から入って参りたいと思います。言葉というとすぐ国語問題かと思われるかも知れませんがそうではありません。もっとも言葉に対する根本の考え方が間違っているからこういう国語改革、国字改革というものが生れてきたわけですから、結局は同じ問題を扱うことになると思いますが、ここでは言葉に対する基本的な考え方についてふれてみたいと思

います。

言語道具説ということをよく申します。言葉は道具なのだ、道具だからお互の間に通じなければならない。同時に、通じさえすればどうでもよろしいという考え方です。表音主義者たちははっきり自分でそう申しており、言葉が何か神秘的なもののように考えるのは間違いだと申しています。他方表音主義者に反対の人達は「言語を道具とは何事だ」と申します。ところが私は言語道具説で結構だと思うのです。言葉によってしか、ものを考えられないのだから、言葉は考える道具で差し支えない。問題は道具ということの解釈の仕方にあるのではないか。私が言葉は道具だという時と、安直にものを考える人がそういう時とでは、同じ道具という言葉は使いますが、その道具ということに対しての考え方が本質的に違うのです。

普通「人間を道具に使うのか」という時、それは何となく生きていないもの、死物という風に考える。あるいは精神ではなく、物質という風に考える。「道具扱いをする」というと軽蔑の意味がある。しかし私は道具というものをそういうようには考えていません。道具というものは物と心が出会う場所であるというように考えています。道具と一口にいうけれども、それは単なる物にすぎないのか、すなわちそれを使う人間から離れて存在し得るものなのか、それともっと人間に密着したものであるか、そのことをよく考えてみなければならないと思います。このことは職人が如何に道具を大切にするかを見ればよくわかります。これは私の子ども

の時の経験ですが、私の家で普請をやって大工が鋸だの鉋だのを持って参りました。職人が食事に行っている時、私はこっそりそれらの道具を使ってみたのです。ところが職人が帰って来るとそれがすぐ見つかってしまいました。自分の手慣れた道具を、素人の子供が使えばどこかに狂いが生じる、それは職人たちが自分でそれを使ってみるとすぐにわかるのです。何も左甚五郎のような名人ではなくても、大工で飯を食っている人間なら必ずわかる筈です。それらの道具は、その機能を最もよく発揮できる状態にあった。しかし素人の私が使ったために狂いが生じたのです。すなわちその鋸がどのように使われれば最も機能的に働くかということは、その持主である大工さんが一番よく知っているし、その大工さんが使うのに一番いい状態にある事が最も機能的であるといえるわけです。ところが私がそれを扱ったために、その最良の状態がこわされてしまったわけです。これは例えば万年筆だとか、何か割合身についた道具を考えていただけばおわかりだと思います。

よく道具というと手足の延長であると言われますが、実を言えば手足もまた道具なのです。その人の生理あるいは心理というものにぴったり密着して機能的に動いている道具なのです。道具というものは決して単なる物質、物ではない。すなわち物ではあっても、必ず主体である私たちの精神とか心とかいうものの癖を受けているものなのです。いかなる物も必ず私たちの心がそこにしのび込んでいる。万年筆の例でもおわかりのように、物というものは必ずそれを

使う人の手癖になじんでいる。あらゆる物がその人の生き方を内に含んでいるのです。だから物といって軽蔑するのは間違いなので、道具にしろ物にしろ、それはすべて心を離れては存在しない。心そのものである。あるいは心と物とが、物質と精神とが出会う場所である。道具というものはこのように考えるべきだと思います。

そういう前提で考えて見れば、言語道具説というのは決して悪いことではない。言葉というものは、言葉という客観的な存在と、私たちの心が出会う場所という意味での道具なのであります。しかしわれわれがうっかり、鋸というものが私たちから離れて存在するものであり、Aの大工によっても、Bの大工によっても同じ効果を発揮するものだと考え勝ちであるように、言葉もとかくそれを使う人から離れた客観的な意味をもっていると思い勝ちなのです。しかしこれが大きな間違いであって、マイクロフォンとか、コップとか、それを使う人の個人差が少なく、独立に存在し得る要素の強い言葉もありますが、言葉によってはむしろ主観的な要素を非常に強くもっているのです。

早い話が今の道具という言葉が良い例で、それを死物と解している人もあり、生き物と解している人もあるというわけです。またたとえば身近な例をとって、母親だとかあるいは恋人だとかいう言葉を考えて見ればわかります。一体母親というのは万人にとって共通の存在であるか。たしかに、自分を生んでくれた女という共通な意味はもっております。ところがわれわれは母

という言葉を決してそういう動物的な意味で使っているわけではなくて、個人個人によって起る千差万別のイメージをそれにこめて使っているのです。生れた時から母親の顔を見ない人が母という言葉を使う場合と、いつくしみ深い母親に育てられた人が母という言葉を使う場合とでは、その言葉にこめられた内容は全く違って来るわけです、その他、恋だとか愛だとかいう言葉も同様で、それらの言葉を皆一様に使ってはおりますが、その場合使う人によって意味している内容は一人一人違うわけです。それに気がつかないで「愛」という言葉には何か客観的な共通な意味があるものだときめてかかって安心している。ところがしばらくたってその違いがやっとわかってくる。その時になって「あなたは私をだました」というようなことになるのですが、だましたのは実は相手ではなく、「愛」という言葉は共通なものだと思いこんだこちらの錯覚から来ているわけです。このようにみんなが自分が使い易いように、言葉を自分の道具として使っているのです。今述べたように鋸や愛や母親や、その他あらゆる言葉がその人個人の言葉となってしまっている。すなわちそれは国語というよりもその人の個人語なのです。だから同じ言葉を使っておりながら、皆が外国語をしゃべり合っているようなものです。本当の外国語ならわからないからはっきりしてお互に誤解は生じない。ところが何か同じ国語をしゃべっていると、すっかり同じ言葉を使っているように思いこんで、そこに混乱がおこるのです。

それでまず第一に言葉というものは、客観的なものではない、というよりも自分の生命そのものであるということをはっきり腹に入れて貰いたいと思います。

「物」に対する日本人の感覚

大体道具や物を自分から離れた死物として扱うのは、日本人本来の生き方ではないと思います。明治以前の日本人はそういう扱い方はしていなかったのです。私たちは子供の頃修身でよく倹約という美徳を教わりました。進歩的な考え方、ことにマルクス主義的な考え方からすると、倹約を道徳の徳目として教えるのは支配階級が自分の支配に都合のいいように、被支配階級を貧苦の内にとじこめて置く為のものだと言うことになります。しかし私は必ずしもそういうことで片づくとは思いません。そもそも倹約とは物自体を尊ぶという事なのです。例えばよその家で出された食事を残すと「もったいない」と考える。それは第一にその食物に食物としての本来の機能を発揮せしめなかったから「もったいない」のです。第二にその食物を作ってくれた相手の家の人の誠意を十分に受けとめ得なかったという意味で「もったいない」わけです。このようにすべて物質の中に何か心を見て行くというのが日本人の本来の生き方です。そういう点で、一種の美意識というか、文化感覚というか、そういうものが私たちの中に自ずからに備わっていたのです。従って私たちは物を粗末にすることに心の醜さを感じるのです。相

手の誠意をふみにじり、また自分が誠意を尽していないということに醜さを感じるという感覚が私達に備わっていたのです。それが明治以来崩れて来たわけですが、それはいうまでもなく西洋文明をとり入れたからに外なりません。

それでは西洋の文明というものは本来そのような、物を物として生かすという感覚がゼロであるかといえば、必ずしもそうではありますまい。西洋人にもそういう感覚はある筈ですが、それはわれわれとは違って西洋風に生きてきた。そういう西洋人の生き方に則って自然科学が発達し、科学文明が生じ、機械が生れたのです。ところがそれが日本に来たとき、われわれはその基である西洋人の「心遣い」を受け取らずに、出来上った「物」の方だけを受け取ったのです。従って西洋の文明がはいってきた時、それは単なる「物」としてしか目に写らなかった。鋸のような非常に直接的な身近かな道具ならそれに対しては、これは単なる物ではなく生きているのだという観念があっても、これが西洋の発達した機械になるとそうはいかない。人間から完全に離れたものと思いこんでしまったのです。しかし少し機械というものに身を入れはじめると決してそんな単純なものではないことがわかり始めて来る。機械の中にも心を見るようになるのです。

たとえば飛行機のように文字通り文明の粋を集めて作った物質、機械に対しても愛情が生れてくる。特にそれを扱っているパイロットはその機械に命を賭ける人たちですから、その飛行

機の中に心を見出さないではおられないのです。すなわち自分の愛機に対してはほかの人がもっていない深い愛情をもつと同時に、その飛行機の癖というものが自分としっかり結びついてくる、こうしてほかの人ではできない操り方が出来るようになるわけです。

しかし明治の人々が便利な機械を見たとき、それが完全に「物」に見えたのは無理からぬことです。われわれはその時代の人々を責めることは出来ないので、結局はその時代の宿命であったと思うのです。これは目に見える機械や道具だけではありません。政治上の制度でもそうです。民主主義的な議会制度にしろ、官僚組織にしろ、すべてそれは物としか見えなかった。単に西洋文明に追いつき、西洋文明をものにする一つの道具として支配して行けばいいと考えたわけです。同時に、西洋でこれだけの価値を発揮したものならば、日本でも同じ効用を発揮出来るだろうと考えたのは当然であります。しかし、それがやはりそうではなかった。簡単な例をひきますと、電車を輸入することはわけはないのです。しかし交通道徳の方は簡単には行かない。文明の利器を輸入すれば当然そこには人間関係が違ってくる。しかし異った人間関係を輸入する、自分のものにするということは実に難しいことであります。日本は公衆道徳が駄目だとか何とか言う、それは大抵日本人が駄目だという言い方で言われるのですけれども、そうではないので、西洋の機械を輸入したのですから、当然そこには日本人の今までの生き方では処理できない問題がいろいろ出てくるのです。こうしてせっかくはいってきた「物」も、そ

れを支える「心」を伴わないために様々な混乱が生じてきたわけです。

言葉の背景をなす価値観

(1) マルキシズムの用語

その混乱の中で一番大きなものは、最初に申しました「言葉」であります、すなわち言葉というものは、みんな客観的な意味をもっていて世界中どこでも共通であると思っている。ところが実際はそうではないということが、西洋から日本に入ってきた色々な言葉について言えると思うのです。例えば「文化」という言葉一つ取っても、西洋と日本とでは違った意味に使っているけれど、それに気付いてはいない。違った意味だということがわかれば混乱は起きません。しかしそういう自覚がないから混乱が起きるのです。「文学」という言葉なども全く同じであります。

今日私たちが使っている言葉はほとんど全部と言っていい程、西洋の言葉から飜訳されて来たものであります。これは驚くべき事であって、私たちの言葉の語彙の中から、西洋から来た言葉を抜いたら一日も暮せない。ことに知識階級はそうです。そうであればやはり日本と西洋の違いというものを十分計算しておかないと混乱が起きるのは当然でありましょう。

今話しかけた例でありますが、文化だとか文学だとか、大衆、民主主義、ヒューマニズムと

か、そういう言葉はみんな西洋と日本では違った意味で使われています。しかしそれとは少し異って資本主義、権力、支配階級、侵略主義というような言葉が、特定の立場に立った言葉として独自の働きをもって使われていることにも注意していただきたいと思います。これらの言葉はマルクス主義というものを考えなければ出て来ない。極端な言い方をするとマルクス主義の方言であります。ところがマルクス主義者でない、もっと一般的な人々がそのことには全く無関心にこういう言葉を使っているわけです。マルクス主義者の言葉というのは、プロレタリア革命を起すということを前提として作られた術語であります。従ってその言葉は革命を起すのに都合のいいようにして―「都合のいいように」というのは必ずしも悪い意味ではありません――全部こしらえてあるのです。ところが今日プロレタリア革命を起こそうとしない人までがその言葉を使ったらどういうことになるか、当然妙なことになるのです。たとえば「権力」という言葉があります。この言葉を使う場合、これは打倒すべきもの―不当なことをするはずのものという前提があるわけです。資本主義社会の否定を前提として出て来たマルクス主義ですから当然そうなるのであります。だから政治的支配力を持っているすべての人に対して「権力」というように呼べば、これはその度に「けしからん」と言っているのと同じことになって来るわけです。

言葉というものはその人その人の個人的な、使い易い道具であるということは、その言葉を

使う人の感情とか価値観がみんなその言葉の中に含まれているということです。だから「権力」というと、それはただ政治を支配する力だという客観的な意味ではなく、「この力はけしからん」という価値観が完全に含まれてくるのです。

また「侵略主義」という言葉があります。これも主としてマルクス主義を中心として出来た言葉であります。ある学生が私の所に来て、アメリカの侵略主義だとか、帝国主義だとかさんざん喋ったのです。私もその時疲れていたので「侵略主義と君が言っているのを聞いていると、何だか悪いことみたいだね」と言ったら、呆気にとられた顔をして「いいことですか」と言う、「いや、いいことではないけれども、侵略というのは何故悪いの」と聞いたら困った顔をしておりました。侵略というのは果していいのか悪いのかという価値観をよく考えないで、侵略主義などという言葉を使うところに問題があるのです。私は「侵略というのはなぜ悪いのか」とわざと無茶な質問を致しました。もちろん私は、侵略というのはいいのだという結論を出させようと思って言ったわけではなく、侵略というものが何故そのように簡単に悪いと言い切れるか、もし侵略を悪いと言ったならば、他に色々な問題が出て来やしないかということを聞きたかったのです。

侵略というのは国家的エゴイズムでありますが、これを否定したとする。とすれば個人のエゴイズムはどうか、これも否定しなければなるまい。階級のエゴイズムはどうか、これも否定し

なければならない。あらゆる侵略というものはエゴイズムで、自分のために他人を犠牲にして行くということですが、これを徹底して考えて行くと大変な事になって、身動きがとれなくなってしまう。虫一つ殺すことができなくなってしまいます。これを一番よく考えたのが仏教です。しかし人々は、虫と人間との間に違いがあるではないか、人間は殺していけないけれども、虫を殺すことは許されるのだ。そんなことまでエゴイズムだと言っていたら、生きることが出来なくなると言います。だがこれは西洋的な考え方で、東洋、あるいは仏教の考え方から言うと、人間も虫も生物という意味でやっぱり同じになるのです。ヒューマニズム―このことについてはあとでふれたいと思いますが―それは本来人間と外の動物とを区別して考えるところから出て来たものですが、これは論理的に何ら根拠がないのです。人間の生命の方が蟻の生命よりも尊いという根拠は全然ないわけで、人間の生命の方が尊いというのは一つの仮説にすぎません。この仮説を抜きにしては「侵略主義は悪だ」という考えは出てまいりません。私はその人がこのような仮説の上に立っていることを自覚して貰いたかったのです。

仮説といえば、国家的侵略はけしからんという結論を導き出す仮説もあり得るならば、それを正しいとする仮説もあり得る。またある時期においてはそれも自然であったという仮説もあり得るし、あらゆる時期において、これが自然であるという仮説もあり得るし、あらゆる時期を通じて、これはけしからんという仮説もあり得る。そういう仮説、前提、価値観というもの

があつて、そのうちのある一つの価値観をとつた場合に、侵略主義という言葉が、悪であるという意味をふくんでくるのであります。

植民地という言葉もそうですし、独立という言葉もそうです。今日私たちは、国家的独立だとか、中立だとか、色々騒いでおりますけれども、みんな前世紀の独立という観念を用いて今日の独立を考えているのです。民族主義という言葉でもそうです、民族主義という言葉の歴史を辿つてみれば、そこには随分違いがある。その違いは全部価値観の相違から来ているわけです。だからナポレオンのナショナリズムはけしからんけれども、ナセルのナショナリズムは認めるという形になつて来るのです。それで、極端に考えるならば、時代の価値観の違いで言葉の価値観が違うのだから、それを使う人の個人の生き方によつてもその言葉は違つて来るということが当然考えられるのであります。例えば一つの仮説に立つてナセルのナショナリズムを認めることが許されるならば、それとは違つた生き方を仮説として、ナショナリズムの善悪を決める行き方も当然認められるわけです。どちらだつてかまわないではないかということになつてくる。そうすると何か非常にニヒリスティックになり、絶望的になつて、一体何が真実だかわからない所に一応行きつくわけです。しかしそれが如何に絶望的であろうとも、私はどうしてもそこに行きついたうえでものを考えなければいけないと思うのです。だが人々は皆勝手に、知らないうちにある約束を受け入れて、その通りに言葉を用いて怪しまないのです。現代

における混乱のすべての原因はここにあると申せましょう。

(2) 西欧と日本

最近起っている問題では、大学の自由、大学管理問題というのがあります。これも実におかしいことだし、先程の問題と深い関連があると思うのです。今日の大学というのは、アメリカの教育制度の六三制を受け入れて出来上ったもので、アメリカの大学と同じものなのです。しかもこの大学を貫いている教育精神を、戦後の進歩派たちは、マルキストとリベラリストとを問わず、「戦前のあり方は間違っていた、この方がいいのだ」ということで受け入れたのです。ところがアメリカの大学制度の根本精神はソーシアル・アダプテーションということであります。すなわち社会に適応することです。ソーシアル・ニーズに応える、社会的要求に応えることがその目的なのです。他方ヨーロッパの大学は、極端に言えば学問のための学問という態度で来た。しかもそれが曲りなりにも日本における戦前の大学のあり方でもあったのです。それに対してアメリカは広大なフロンティアを控えて、この社会的な必要に適応するための大学として出発した。デューイの実用主義的な哲学から出発しているわけです。それはソーシアル・ニーズに応えるというものであって、アカデミック・ニーズに応えるというヨーロッパからもたらされた戦前の大学観、教育観とは明らかに違っているのです。従ってその教育観、大学観を受け入れたならば、学問の自由というのは二のつぎになる。第一はソーシアル・ニー

ズ、第二にアカデミック・ニーズでなければならぬ筈です。ところがそれに対して大学の自由、アカデミック・ニーズということを主張するのは、否定した筈の戦前の教育思想、教育理念というものをもち出して来ることになるわけです。しかも一方戦後の教育制度、教育理念というものは、ちゃんと別のところでは用いてやっている。その二つのものが全然整理されていないところからいろいろの矛盾が出てくるのです。しかも現在ではヨーロッパでももう学問のための学問、アカデミック・ニーズに応えることから出発した大学でもずいぶん変ってきて、今日ではソーシアル・ニーズとかナショナル・ニーズというような問題が大きく前面に浮かび上って来ているわけです。従って全世界を通じて大学の中にはこの二つの要請による、二つの機能が生じて来ています。こういうことを無視して、ただ「大学の自由」を叫び、言葉を弄んでいては問題は決して解決出来ないだろうと思います。これなどは一つの問題を論じてゆくときその前提となっているものを無視したために起る混乱の典型的なものだと言えましょう。

もう一つ先程一寸ふれました「文化」という言葉について申し上げましょう。この文化という言葉について私は前にも書いたことがありますが、文化は英語で言えばカルチュアです。だが逆に、カルチュアは日本語で何と訳すかと言えば、「文化」と答える人もあるだろうし、教養」と答える人もいるでしょう。カルチュアにはこのように二つの意味がある。それでは私たちはこのカルチュアという言葉にふくまれている「文化」と「教養」という二つのものをどの

ように使いわけているかと申しますと、大体「教養」という場合には個人に属するものとして使っている。「あの人は教養がある人だ」「教養のない人だ」とはいうけれども、「あの人は文化のない人だ」とはいわないのです。教養というのは個人の身に備わったもの、文化というのはある時代だとか国家だとかいうものの、身についた生き方を称しているわけなのです。このように外国語ではカルチュアという一語で言い現わせるものが、日本語では文化と教養という言葉に二分しているわけです。従って私たちが文化という言葉で喋っているときには、教養という要素が一つもはいって来ない。私はここに問題があると思うのです。西洋人が「あの国のカルチュア」と言っている時には個人の教養ということと同じ言葉を使っているのですから、教養という意味が「カルチュア」という言葉の周辺には常にまつわりついているわけです。それから教養と使った時にも、それが拡って行けば文化ということになる、そういう含みをもって使っているわけです。それが日本の場合には、文化といったら、そこには個人というものが全然入って来ないという弱点をもっております。ですから「文化国家」とか「西洋文化」とかさかんに文化、文化と言いながら、個人には一つも教養のない人間が出て来る。

教養というのは教育とは全然違うので、教育は知識を与えるものですが、教養というのは、その人の身についた生き方なのです。これも一度書いたことがございますが、秋口のこと、ある田舎の電車の中で、たまたま隣に座った老婆から言われた言葉から、ふとそのことを思い出

したことがあります。その電車は座席が進行方向に向って相対して平行についてをりましたが、隣の老婆が窓を開ける前に「この窓を開けていいか」と私に聞いたのです。方言であったので初めはよくわからなくて、二三度聞き返しましたが、要するに「窓を開けたらあなたの迷惑になるか」と言っているのです。そのお婆さんというのは決して学校教育を受けた人とは思えないのです。小学校もろくに出たか出ないかわからないようなお婆さんなのです。私は大磯に住んでいて、湘南電車で時々出かけるのですが、私にそういう言葉をかけた人には一度も出会ったことがない。ところがこの湘南電車で東京へ通っている人たちは大部分インテリであります。その時私は学校教育と教養は違うということを改めて強く感じました。そのお婆さんの言葉は、普段の細かい家庭の躾の中で身につけたものでしょう。しかしまさか電車の中で窓を開ける時の挨拶の仕方までは教わらなかったと思うのです。教わってはいないが、しかし、自分が行動を起すときに、絶えずそれが他人の迷惑になるかならないかということを考える躾は、その人の心の中にしみ込んでいたにちがいない。私は先程、交通機関は簡単に西洋のものを輸入することが出来るが、交通道徳は輸入できないと申しましたが、もし本当に文化というもの、教養というものが身についていたら、新しい文明の利器が入って来ても、それにすぐ即応することが出来る、ということなのです。西洋で私は何度も「窓を開けてもよろしいか」という事を聞かれたのです。そういう教育を全然うけていない、いわゆる封建的なしつけに育てられたお婆

さんがそれを口にすることが出来て、近代的な西洋の教育を受けたわれわれが口にすることが出来ないという事実に思い至った時、大げさに言えば愕然とせざるを得ない。教養とか文化とかいうものは一体何か。このお婆さんの方がわれわれよりよほど文化人ではないかということになります。しかしながら私どもの間では決して文化という言葉がそういう含みで使われてはいないのです。文化というと何となくフワフワしたもの、ハイカラなもの、西洋的なものということになっております。極端に言えば「文化だわし」とか「文化七輪」とかいう程度にしか使われていない。「西洋の文化」とか「平安朝の文化」とかいう時も、実際は同じように使っているのです。要するに何か自分とは離れたもの、高級で便利なものという風に使っています。

従って文化というものを具体的な物として受け取っているのではなく観念的な価値として受け取っているわけです。それは西洋のものに限らず、「平安朝の文化」という場合でも、要するに自分とは縁のない、一つの過去の時代の集積、あるいは成果として使っているのです。すなわち自分と関係のない離れたものとして使っているのです。

T・S・エリオットが「文化というのは生き方である」と申しましたが、大抵の場合そういう意味では使っていないのです。なにか高級なもの、便利なもので、そして自分から離れたものとして使っているので、日常の私たちの生き方としては使われていないのです。もし生き方

として文化というものを考えるならカルチュアを教養と訳す場合の、教養という意味もちゃんと通じて来るわけです。

もう一つヒューマニズムということについてお話しておきたいと思います。ヒューマニズムと言っても現代の日本では人情という位の意味にしか使われていない。せいぜい人道主義という程度にしか使われていませんが、元来ヒューマニズムというのは人道主義とは何の関係もない、というと言いすぎかもわかりませんが、ともかくそれとはおおよそ異ったものなのです。ヒューマニズムというのは、ギリシア・ローマの豊かな文化の再発見（ルネサンス）としての人文主義から出発している言葉です。従ってこれは人間主義と訳してもいいのですが、これはその前の中世の神中心の生き方というものに対して出てきたものなのです。しかもそれは神を中心とした中世の生き方に反逆して、人間を中心として生きる生き方を定めようとしたのではなく、いつの間にかルネサンス人のうちに、いままでとは違った生き方が出てきて、人間という観念が次第に形作られてきたとき、中世をふり返って「ああ今までは神中心の生き方だったのだ」ということになったし、それに対して自分達の生き方が以前とは異ったものとして自覚されてきたのです。その生き方を後世がヒューマニズムと名付けたまでです。従ってそういうヒューマニズム——人間中心主義というものをルネサンス人がもっていて、それで神中心の中世に反抗したという考え方は明らかに誤りです。ともかくヒューマニズムという言葉一つをと

りあげても実に数多くの問題が出てくると思います。それを現代の日本では実に安易に、人道主義というような誤った意味に使っているので、そこに様々の混乱が生れてくるのだと思います。

言葉と生き方との分裂

西洋文化が輸入されて如何に言葉が混乱してきたか、ほぼおわかりのことと思いますが、今度はもう一つ角度を変えてお話してみたいと思います。

私たちの家庭で父親や母親が話している言葉、私たちがそれを聞いて育ってきた言葉は、本来の日本の生き方に根ざした、身についた言葉です。ところがそれ以外の言葉は子供のとき全然聞いたこともない、それが教育を受ける年代になって急に入ってくるのです。学校から家に帰るともう家庭ではそのような言葉では口が利けないという状況です。学校では友達とマルクスだとかニイチェだとか話しているわけですが、そんなことは家庭では一切通用しない。芋が煮えたか煮えないかという話しか通じません。しかし親と通じない言葉を使っていて、それが一体どうして身につくかという事を考えざるを得ないのです。もし自分が本当に民主主義という言葉を理解したならば、芋の煮えることにしか関心のないお婆さんにこれが話せないわけはない。途中でいきなり会った人は別として、毎日一しょに暮しているお婆さんにそれが話せな

いわけはないのです。ところがそれがなかなか大変なことなのです。必ずしも筋道をつけて話さなくても、身につけた民主主義的な生き方というものであれば、お茶をのみながら話をしている中にでも、お婆さんに伝わらぬわけはないのですが、これが実に大変なことなのです。大変なことだというよりも、今日のインテリは、そういうことをしなければならないのだと考えることさえしないのです。お婆さんというものは古いものだ、どうせ死ぬものだ——どうせ死ぬものと言えば自分もどうせ死ぬものなのですがそこまでは思い至らない——というような態度で生きてきた。もうわからないのだ、だから早く死んで自分たちの世界になればいい、自分の言葉だけが通じる世界が早く来ればいいと思って生きて来たのです。だがそういう生き方では絶対に駄目なのです。大学教育をいくら盛んにしようと、高校に全員入学しようと、日本人の生き方というものはそう簡単に変わるものではありません。そんなことよりそういう生き方と言葉との間の溝というもの、これを埋めることを考えねばならぬので、今日私たちに課せられている生き方、あるいは思想というものの課題はそういう事であろうと思うのです。

悪に耐える思想

現代は世の中がめまぐるしく変っていく、ことに日本のように急に近代化を取り入れてきま

すと、いろいろな分野でそれに対処する思想が生れてくるわけです。しかしそれらは皆それぞれの分野に寸断されたまま放置されていて、それら近代文明を全体としてどう動かすかという根本的思想、哲学というものは、明治以後今日まで一つも出来上ってはいません。いないというだけではなく、それが必要だという考えすら、いままでにほとんど出ていなかったといっても過言ではないでしょう。そのような問題について二、三申し上げてみたいと思います。

私は大化の改新以後の有間皇子の乱というのを芝居に仕組んだことがありますが、その頃その時代のいろいろな思想を少し考えて見たのです。その時感じたことですが、大化改新当時に日本がぶつかった問題というのは、明治あるいは戦後の今日の問題に非常によく似ているのです。そう考えながら当時の歴史を見ていくと、藤原鎌足という人間に非常に興味をおぼえました。鎌足は御承知のように神祇官の家柄に生れ、日本の自然宗教、神ながらの道を奉じ、当時の天皇家の祭祀を司っていたわけです。ですから日本固有の思想というものを中心に生きてきた人物であるといえましょう。ところがこの鎌足は当時の内外から迫ってきた危機に対して、一所懸命に儒教を勉強していたのです。それは何故だろうかと私は考えました。私は当時の神ながらの道というのは非常に立派な生き方であると思うのです。しかしながらそれは己れを虚しうして自然の心を心として生きる生き方ですから、根本において間違いはなくても、それだけでは当時の混乱した状態を切りぬけることができなくなって来たということを、恐らく鎌足は自

覚したに違いないのです。当時の異常な混乱を正すためにはやはり人も殺さねばならない。蘇我一族も亡ぼさねばならない。これは悪であります。この悪に耐える思想というものが鎌足に必要であったわけです。しかしそういう思想は従来の日本の生き方の中からは生れてこない。従って鎌足はそういうものを求めて、儒教というものに縋った。すなわち当時の危機を打開するものとして鎌足は儒教を求めていったと思うのです。従って神祇伯の家柄に生れながら外国の文化、思想に対して非常に寛容な態度をもって臨んだのです。

悪に耐える思想と申しましたが、思想というものはみんなそういうものだと思います。秩序を守るために、あるいは全体感覚をわれわれのうちに植えつけるために、当然犯さなければならない悪というものがある。それに耐えてゆく、それが思想というものだと思います。政治というものはなんらかの意味で悪を犯さなければ成り立たない。ある時は嘘もつかなければ成り立たないのです。政治にかぎらずあらゆる思想というものはみんな悪を持っています。キリスト教すらそれを免れない。どんな思想でも必ず悪をもっている。思想において大義名分というものが必要になってくるのも、そのような悪を行わなければならないからなのです。思想というもの、一つの生き方というものはそういうものであろうかと思います。

明治以後の日本はそのような一つの生き方をもたなければならないのです。過去の封建時代に対して日本の近代はそれをもたなければならない、さらに又西洋に対しても日本はそれをも

たなければならないのです。即ちわれわれはこの二重の要求の中に立っているわけです。しかも近代の西洋は、西洋そのものとは違うのですから、結局西洋に対して日本はその生き方をきめねばならないと同時に、西洋の近代に対してもなんとかしなければならないのです。そこに近代を動かしてゆく根本思想、哲学が生れてこなければなりません。

「現　実」の　意　味

近代の物質文明の生き方というものは、いいか悪いかは別問題として、これが今日最も力を得ていて、それに反抗する人すら皆それにひっかかっている。そういう時代に、やはり私たちは本当の意味で日本人の生き方、古代の日本人の生き方はどうであったか、それが今の私たちの中にどう生きているかを考えねばなりません。今日の私たちの生き方、西洋の近代を受け入れている私たちの無理な姿勢を正しく見きわめて、何とかして近代文明に対応し得る思想を作り上げねばならないと思います。しかし思想を作りあげるということは容易ではないので、天才の出現を待たなければ駄目です。しかし天才が出てくるためには大ぜいの人の無言の努力がなければなりません。この大ぜいの人の無言の努力というのは、西洋と日本の出会いによって生じた、そしてそれが「言葉」に最も端的に現われているところの混乱を本当に自覚すること、すなわち現実をよく見ることなのです。

しかし現実という言葉を一つとってみても、実に目茶々々に使われているのです。大抵現実というと自分を含めないで言っている。現実に対処すると私たちはよく言いますが、その場合現実に対処する自分、現実と戦っている自分、これは一体現実なのかどうか、という問題が起きるわけです。勿論これは明らかに現実であります。さらに私たちの父や母は無学で無教育で、封建時代の中に生きていて、いまはやりの言葉を使えば、前近代的なものを身につけて生きている。この人間、これが現実の中にふくまれるかというと、今の社会科学者にはどうもはっきりしていないのです。この人間、その人たちと私たちは一緒にいまの日本の現実に生きている。しかし現代日本の色々な混乱を正して行こうとする時、一般の人々はともすればこの父や母も私たちの同伴者であることを忘れているのではないか。一つの現実を改革しようとする時、おやじおふくろの気に入るように直そうとは絶対にしない。気に入るように直そうとしないのは勿論、どう考えているかを勘定に入れることさえ全然しないのです。ところがその人たちが大てい四十になり五十になると、おやじと同じようなものがおれたちの中にあるという事に気づく。私自身の経験から言っても、私が二十代で親に反抗し、おやじのうちに見ていた不愉快なものが、いまの年になるとチャンと自分のうちにあることがわかって来る。これは個人的な性格ばかりではありません。社会に対する生き方なども、おやじと同じものが自分の中にあることがわかってきます。

ところが現代の人々の生き方の中には私たちのおやじの生き方に限らず、歴史というもの、すなわち私たちの先祖が生きて来た生き方が現実の中に入っていないのです、私はこのことが実におかしいと思うのです、日本人が過去に生きて来た生き方というものは、やはり今存在し、目に見えている現実と同じ現実であります。形として自分の目に映らないものはもう存在しないと思っている。これは近代主義者のよくいう現実密着の日本人の悪い癖です。しかし、目に見えないものでも生きているのだという事がわからなければ困るのです。こうして現代の人には歴史というものが見えなくなって来ているのです。私たちの目の前にある現実の、本当の力が見えなくなって来ている。これが私たち現代人の弱点ではないかと思います。

知性の限界と感情

大体、ものごとをただ理性だけで、それも浅薄な理性だけで判断しているからそういう事になって来る。何か言うと「お前のは感情論だよ」という。感情論というとまるで悪いことでもあるように言う。しかしその人が理性の人であるならば、感情というものはどうして悪いのかということを、それこそ理性的に証明して貰いたい。感情というものでは生きて行けない、感情を抑えなければならない理由をまず言っていただきたいのですが、それは無視して、「感情論だ」という一つの言葉を感情的に言い出すわけです。

感情というものは人間にとって非常に大事であります。私たちの生活のうちおそらく八十パーセントは感情で生きているので、あとの二十パーセントが知性、それもなけなしの知性で生きているのです。それなのに、その知性の判断でなければ言うことを聞かないという。これほど愚劣な、いや、非理性的なことはない。何故そういうことになるかと言えば、自分たちの感情を軽蔑しているからです。自分たちの感情を信じて、その上に生きておれば、自分たちの知性がなけなしの知性だということは、はっきりわかりますし、その知性の限界というものもわかるわけであります。もちろんそのことは決して感情通りに振舞ってもいいということではなく、理性と感情の間に、お互に協定を結ばなければならないということなのです。感情というものはくだらないもの、それは無視出来るものというふうに考えることがいけないのです。そのような判断を下す理性というものは、実は非常にひ弱な理性なのです。だから感情というものをもっと尊重しろというのは、もっと理性的に強くなれと言うことだと言えましょう。少しでも理性的に考えるようにすれば、自分たちがいかに感情の中に生きているかということもわかってくると思うのです。

まだ言い足りないことがずいぶんあります。むしろ言い足りないことのほうが多いのですが、時間もまいりましたし、あとで質疑応答の時間もございますので、一応私の話はこれで終ることにいたします。

《質問に答えて》

悪について

（問）　戦争中多くの人を殺して、それを手柄話として故郷に帰って話す人がいるのですがこのような人にとって、人を殺したことは悪であるかどうか、すなわち人を殺すことが善か悪かについてはその場合々々においていろいろ評価されるものかどうかについてお尋ねします。

（答）　戦争で人を殺す、あるいは革命で人を殺す――そういうものは悪ではないという立場に立つ思想があるわけです。それはなぜかといえば、国家が危機にさらされる時に同胞を守る、同胞が一〇〇人殺されるのを、むこうの人間を一〇人殺すことによって防ぐのだという大義名分があるわけです。革命の場合もそうなので、大衆や階級のためにその邪魔になる少数者を殺すことが正当視されるわけです。ここではっきりしていることは人間のいのちというものがすべて数に還元されるということです。一〇人殺しても一〇〇人のためになるのであればいい、あるいはいまの人間を殺しても将来の子孫のためになるのであればいいという考えがそこにあるわけです。

しかしながら他方私たちのうちには、たとえどういう理由があっても、人を殺すことは悪いことだという考えがあります。これは道徳律というような、外から与えられたものというより

も、教えられなくても私たちのうちにある一種の本能なのです。ところが一方ではある瞬間において人を殺したいという本能も存在するのです。だがともかくも最高の道徳は、たとえいかなる理由によっても人を殺してはならぬということです。その道徳の前には戦争も国家悪も、組織悪もあらゆる悪がすべて許されないわけです。

だがここで申し上げたいことはそういうことを言う権利が一体誰にあるかということです。われわれはみんなそれほどまでに厳しい道徳律によって生きているかどうか、たしかに人を殺すという例をとればそれが悪だということは割合簡単に言えましょう。ところが一人の人間が生きていることは必ず誰かの犠牲の上に立っている、これは仏教などでも必ず取り扱う問題ですが、人間は生きることによって常に他の動物や生物を犠牲にしているわけです。だから窮極においてエゴイズムの問題になるし、このエゴイズムというものを徹底的に否定するという思想——私はそれこそ本当の意味での宗教だと思いますが——が根本になければ国家悪などという悪を糾弾できないわけです。しかも宗教の根本にはただ自分勝手な振舞いを否定するだけではなく、人間存在そのものが悪であるという考えがあるのです。この問題を通らないではわれわれは悪の問題を取り扱うことは出来ません。

だから私は、よく国家悪や組織悪などについて反対する運動を見ていていつも思うのは、われわれにそれをいうだけの人間が出来ているかということです。どこにだってそんな人間がい

る筈がない、しかしそれにも拘らず戦うという自覚、そういう自覚があればいいのです。そうであればいいのだが、大ていの場合は自分は善であって、自分はとても人殺しなんかしないというような顔をしている、そういうことが、私にとっては実に不愉快だし、そこにはなにかとんでもない間違いがあると思うのです。そうでないためにはいま言ったようにつねに絶対的な悪、人間は悪なしでは生きられないという問題をいつも見つめている必要があると思うのです。

過去とのつきあい

（問）　先生は最後のところで、日本独自の思想というものを作り上げていくべきだとおっしゃいました。私もそのとおりだと思うのです。すなわち戦後の日本の思想的混乱の一つの大きな原因は、戦前における、歴史を非常に重要視してきた考え方が根本的に変ってきたところにあると思うのです。それで今後の日本思想については、新しいものを作ってゆくのか、あるいはその中に日本の歴史をどのように取り入れてゆくのか、そのような問題について御伺いしたいと思います。

（答）　いまのあなたは戦前は歴史を重要視してきて、それがひっくりかえったので混乱がおきたとおっしゃったのですが、失礼だが私はそうは思いません。実は戦前に歴史というものを

そんなに重要視していたのではなかった、ほんとうに歴史というものを深く考え、歴史につき合って学問をしたり、生きたりしたことはなかったのだと思います。そのような正しい歴史とのつき合いが行われていたのは明治までだったわけです。では明治以後はなににつき合ったかというと、西洋の文明開化につき合ったので、文明開化に都合の悪い歴史というものは、日本ではみんなご破算にして来たのです。もちろんその間に国家主義的な一つの生き方はありましたが、この国家主義というのも実は西洋流の生き方なのです。すなわちあくまで西洋の先進国に追いつこうとする富国強兵策なのです。そういう観点から都合のいいように歴史を整えようとしたのです。こうして日本を近代国家として作り上げるのに都合のいいナショナル・ニーズに応えた歴史教育が行われて来た。

戦後今度は逆にそれを否定しましたけれども、私は同じことをやっていると思うのです。ナショナル・ニーズが、ソーシアル・ニーズという言葉に置きかえられただけのことで、ほんとうに歴史とか過去とかいうものをまともに取り扱おうとはしない。やっぱり現在の必要から捌いている。

私は現在の必要があって過去を振りかえるのではなく、過去とまじめにつき合うことによってそこから現在の要求が出て来る、それがほんとうの意味の現在の要求だと思うのです。たとえば一つの家の中でいえば子供に欲望があってこれをじゃましているのが親だ、だから親を裁

くのだというのではなく、親とまともにつき合っていて、それでなおかつ自分のうちにある欲望、それが本当の欲望だと思うのです。それと同じように歴史を虚心に見てゆく、善悪をぬきにして、私たちの祖先がどういうことを考えたかを見てゆく、すなわち過去の人と一緒に生きてみることが大切なのです。その中から本当の現在の要求が出てくるわけです。だが戦前戦後を通してこういう歴史とのつき合いは行われていないのです。

私が日本独自の思想という場合でも、なにも神がかり式に言っているのではありません。日本は明治以後古今未曽有の経験をしたのです。が、そこには大きな無理があった、その無理を調整するのが日本独自の思想であるというように考えます。それは他国におしつけるような性質のものではない、日本だけに通用する、日本人を生かす道でなければなりません。しかし明治以後日本が苦しんできたものは、多かれ少なかれ西洋自身の問題でもあるわけですから、そこに生れてくる日本独自の思想というものは結果としては世界のためにもなると思います。すなわち、西洋でも近代というものの弱点がだんだん暴露して、化けの皮を現わしはじめてきた、文明開化一点張りで来たのに対して、人間の精神が追いつけなくなってきたのです。それは日本の近代が明治以後苦しんできたものなので、むしろこちらの方が一足お先に被害を蒙っているのです。原爆を受けた以上に——原爆を受けたことは大したことではないので、その前に日本は西洋文明という原爆をうけてその中で苦しみながら今日ここまで至っているのです。

従ってその中から生み出される思想は結果として西洋に影響を与えることが出来ると思います。しかしそれが目的ではないので、あくまでも日本がどう生きていけばいいのか、それに真剣にとりくまなければいけないし、そこに必ずや何ものかが生れてくる筈だ、私はそれを日本独自の思想と申上げたまでです。

言葉について

（問）　言葉は個人々々によって違うので、主観的なものだとおっしゃいましたが、その点もう少し詳しく説明していただきたいと思います。

（答）　私は言葉というものは客観性がないと言いました。ただ自然科学に限らず、社会科学でも科学というものは客観性がないと困るのです。そのために人々は人為的に客観的な言葉、術語、専門語を作るわけです。それが社会科学の術語です。民主主義という言葉でもそうです。しかしそうして作られた言葉にももう違いが出てくる。

マックス、ウエーバーは社会科学の言葉というのは理想型だと言っております。民主主義というときには、あるところにはそれが非常に濃い濃度をもって存在する、あるところには薄くしかない、そういうようなものから、言葉のユートピアを作って、それを民主主義と名付けるのだ、それが社会科学の用語だというわけです。たとえば民主主義といってもギリシャ時代に

奴隷制度と共存した民主主義というものがある。アメリカの民主主義と、日本の民主主義とは違うけれども両方とも民主主義と呼ぶのです。そういうふうに内容のちがいはあるけれども、やはりそれに共通した概念がわれわれの頭にある。だからそれによって言葉に客観性ができて、社会科学が成立するというわけです。これは大体社会科学者を承服させているようですが、私に言わせればずい分苦しい弁解だと思うのです。そうでも言わなければ社会科学というのは成り立たないだろうというように思うのです。

しかしそれはそれとして一応認めましょう。だがその場合にはぜひとも扱う領域を一定しておかなければなりません。その外へちょっとでも出たら困るのです。ちょっとでも出たらということは、たとえば経済学の用語を文学に適用するというようなことではありません。それがいけないことはわかり切ったことです。そうではなく一つの言葉、それが経済学の用語であれば、それが生れてきたのはその当時の経済的現実を根拠にしているわけですが、その根拠になった経済的現実が変化してしまっているのに、その用語を不用意に使ってはいけないということなのです。例えば資本という言葉はマルクスの当時の経済情勢から分析して、便利な術語として作られるわけですが、その時代の資本主義と現在の資本主義とがはたして同じかどうか、若し違うとすればそれと同じ資本主義という言葉で呼んでいいかどうかという問題が出てくるわけです。

社会科学の中でも経済学というのは物質を扱うから割合に共通に使えます。しかしこの場合でも経済というのはお金やお札がただ一人歩きで動いているのではない、人間が使っているのです。そうすれば人間の信用とか欲望とかその他色々なもの――精神的、心理的なものがからんでくるわけです。たとえば同じ五〇円という場合でも人によって価値観が違ってくる。自然科学のようにキチッと五〇CCなら五〇CCというわけにはいかない。だから簡単に経済学とはいうけれども、科学として非常に成り立ちにくい要素をふくんでいると思います。

言葉というのはたとえ社会科学の中でもこのようにあいまいに使われていて個人差がずいぶんあるのですが、仕方がないからそれを切り捨てて使うことにしているのです。それは或る程度やむを得ないかもしれない、しかし切り捨てているという自覚があるうちはいいけれども、その自覚が失われればそこにひどい混乱が起るのだと思います。すなわち社会科学の用語は客観的であり、その扱っている対象が、まるで自然科学の物質を扱っているようにすっかり固定したものと考えるところに間違いがおきるのです。そうではなく自分が扱っているのは個人差を切り捨てた一つの「仮説」であるという自覚をもっていれば、もっと科学的に客観性が出て来るであろうと思います。

教育と教養

（問）　先生はお話の中で教育と教養の違いを言われたのですが、もう少し具体的にわかりやすい説明がいただけたらと思います。

（答）　教育ということですが、今日の教育というのは全部集団教育を意味しているようです。学校教育というものはみなそうなのです。この合宿教室で行われているのは塾というものに近いと思いますが、教育の本来のあり方は塾なのです。学校では本当の教育など行われていない、そこで行われているのは、教育の一分野である知識の伝達ということなのです。知識の伝達を今日では教育と言っているわけです。だから教育ある人間が教養ある人間に限らないと先程申しましたのは、知識のある人間は教養のある人間とは限らないということなのです。

教養というのは根本は心遣いです。細かい心遣いです。あらゆる対象に接して、品物でもいいし、人間でもいいわけですが、そのときにいつでも相手の気持になってつき合う気持、それが私は一番根本になければならないと思います。

今日ではつき合いと言えばいやいやながらという意味に、何か心ならずもという意味に使われるようになって来ております。それはもちろん正しい使い方ではないと思いますがつき合いというものの中には、自分を殺さなければならないという、つらい面があるのは事実です。ところが今日の教育なり、思想なりの傾向は、そのように対象につき合うということはあまり重んじないのです。だから男女同権の問題でも何でも、大てい問題になってくるのは、あいつの

方がとくをしているということですね。「男の方がとくをしている」と女の人はいうわけです。「だから女にもとくをさせろ」ということになる。そこには相手に仕えようという気持は全然ないのです。文明というものはみんなそうなので相手に仕えないですむように、二人の間にいろいろ物を置こう、機械を置こうとするわけです。だから文明が発達すればする程相手につき合うという気持がなくなってくるのです。

私はアメリカで半年ばかりアパート生活を一人でやりましたが、これは独身者には実に快適に出来ているので、なぜこのアメリカで男は結婚するのかなと思った位、社会が機械化されているわけです。だからすべてセルフサービス、自分のことは自分でするというと昔の修身みたいで非常にいいようですが、これは他人のためには何にもしないということになっているのです。これが現代文明の姿だと思います。

御飯をたべる時、女が給仕して、男は給仕されるばかりだから男はとくじゃぁないの、と今の女の人は言うのです。「だけどどうして給仕するのが嬉しくないのかな」というふうに私は思うのです。人に仕えるという喜びを失うというか、それを大事にすることを忘れてしまっている。もちろん男の方でも自分の女房に仕えているという気持が大切なことはいうまでもありませんが。ただその仕える場所や方法が違うだけです。ともかくお互に仕えるという気持をもつこと、これが正しい生き方、教養のあり方だというように思うのです。言葉の上からみて

も、物を「使う」というのも、偉い人に「お仕えする」というのも同じ「つき合う」という言葉から出てきているのです。

理性について

（問）　ものごとを理性だけで考えないで、感情を大切にしなければならないとおっしゃいましたが、そのことと神を信じるということとは関係があると思います。その点について御話をおききしたいと思います。

（答）　私は自分より大きなもの、人間を超えたものの存在を信じようとすることは人間の本能ではないかと思います。それに対してただ理性でもって、「それはなんら根拠がない」と断定する人がいるわけです。しかし人間というものは苦労のない時、うまくいっている時にはさほど思わないけれども、失意に陥った時、又は死を前にした時などには、やはり人間を超えたものを考えざるを得なくなる、それは何と言っても事実なのです。

理性とか合理主義とかいうけれども、合理主義は非合理なものの存在を常に自分の前に自覚していなければ成り立たないと思います。非合理なものを切り捨ててしまう合理主義などというものは存在し得ないのです。現実に自分が理解できないもの、説明できないものが自分の中にも外にもある。そういうものを合理主義で切り捨ててゆくということは明らかに合理主義で

はないのです。ほんとうの合理主義というのは私たちの目の前にある現実を十分に見つめて、それでなにか計算をし、割り切ろうとしたときに、そこに必ず残るものがある。それを常に目の前において、合理、理性一本ではいかないということを自覚し、一つの仮説としてものを出していく、それがほんとうの合理主義的な態度であると思います。

人生の目的

（問）　講義とは直接関係がないのですが、人々はよく幸福を得ることが人生の目的であると言います。しかし私は、幸福を得るために人生を生きていくのなら、人間は生きていなくてもそう変りはないと思います。結局人間はなぜ生きているかということになりますが、そのようなことを先生はどのように考えておられるかお聞きしたいのです。

（答）　乱暴な言い方ですが、ほんとうは人間なんかいなくてもいいのです。そんなことははっきりしているのです。私だっていなくなったってかまわないので、それこそ原爆や水爆で一ぺんに地球が吹っ飛んでも別になんということはない。それはわかり切ったことです。ただぼくたちは生きていたいのでしょう。何かのために生きているのではなくて、生きていたいのでしょう。ぼくたちはなにものか、生命、自然の力に押されてただ生きているのでしょう。しかも人間は自然の一部であって、そして自然的な調和を欲しているわけです。私たちはそれを幸

福というように名付けるわけです。たとえばいま非常に生き甲斐を感じるという、その生き甲斐というものを人は幸福と名付けるのです。

もつともなにを生き甲斐と感じるか、なにを幸福と感じるかは人によつてずい分個人差があると同時に、また高低があります。物質的な欲望の満足を幸福と感じる人もいるわけです。しかしいろいろな物質的なものが満足されて来たときにも、そこにはやはり不満があるわけです。昔の偉い人は、お釈迦様とかイエス様とかいう人は、そういういろいろなものが満たされたとき、すなわち現在の自然科学の隆盛、それからもつと先のことまで見抜いて考えていたと思うのです。どこまで行つても人間というものはなお憧れるものがある、なお満ち足りないものがある。それで、どういうところに達しなければ人間というものは安定しないものかという問いに対して答えたのがあいう天才でしょう。結局幸福というもののほんとうの状態――それは最後は信仰でしょう。そういう信仰を得て安定した状態、なにが来ても恐れない、だから非常に静かに、楽しく、光に溢れて生きるという世界なのです。

しかし根本的には、サルトルではないが、人間の作ったものにはみんな本質というものがある。「本質」というのは「目的」と言いかえてもいいかと思いますが、存在よりも先に本質がある。たとえば鉛筆なら鉛筆というものの目的、効用、用途、そういうものが先に頭にあつて、そのあとで鉛筆が存在する。ところが人間のほうは本質があとで存在のほうが先にあるの

です。すなわち人間というものは本来目的がないのですから、いまあなたのおっしゃった点、なくなったって一向かまわないのです。人間がそんなに貴重だと思うのはなにかの錯覚であって、なくなってもかまわないのです。しかしただ、まず存在した、そして存在し続けようという欲求がある、その前提のもとにみんなものを考えたり生きたりしているわけです。

日本の将来

（問）　さきほども質問がございましたが、現代の混乱を克服するためには、日本には新しい思想が打ち立てられなければならない。それについて先生からのお答えがあったわけですが、では具体的にはどのような思想が規定されるべきなのか、もう少し詳しくお話いただきたいと思います。

（答）　それは私にはわかりません。私がそういう思想をもっていると思って話を聞いていただくと、これは買いかぶられたことになるのです。私はそんなものは全然持っていない――というとおかしいのですが、持とうとして努力はしておりますが、それがこういうものだとは到底いえないのです。

おそらく私は、まだ平和な時代がつづいて、それで一〇〇年位たてば、日本もなんとかなるのではないか。それは思想の問題ばかりでなくてすべてそうだと思うのです。大体一つの外国

文化というものや生き方、思想というものを自分の国に入れて、それを消化してしまうまで普通は何百年とかかるものです。日本は明治以後近代産業化ということだけをやってきているから早いように見えるのだけれども、それを自由に日本的なものにするためには、大陸の文化が入ってきた時それが消化されるまでには四、五百年かかったように、非常に長い年月が必要だと思うのです。ことに現代のように世の中がどんどん、めまぐるしく変っている、それには西洋自身が追っつかないという時代ではなおさらです。だからみんなじれったくなって、短気を起すわけです。なんとかしなければならない、自分の目の黒いうちになんとかしようということを考える。

これはよく言われる例ですけれども、イギリス人は庭をつくるときに、苗を買ってきて安いのを植えるのです。「爺さんのくせにそんなものを買って来てなぜ植えるのか。お前の死ぬまでにはどうにもならないのに。」と私たちは思うのですが、彼らが考えているのは子や孫のことを考えているのであって、時間を見る見方の波長が非常に長いわけです。ところが日本ではいま言ったように外国の文明を取り入れたのだから、大変時間がかかるにもかかわらず、考えるのは短兵急で忽ちのうちにその近代化が西洋にすぐ追いついてしまう、そして日本独自なものを忽ちのうちに出そうとして焦る。そうすると今度はそれが非常に固陋な国粋主義になってしまったりするのです。こうして日本は左へぐっと傾いたかと思うと右へ傾いていく、明治以

来歴史をみるとみんなそういうことをやっている。結局は焦るからなのです。ゆっくりやればいいので、自分の子や孫の時代でもいいし、もっと先でもいい、そういうところに焦点を合わせてゆけばいいのです。「自分の目の黒いうちに」というのはエゴイズムなのです。自分がよくしようというからいけないので、自分がただその歴史の一つの流れの一環をなすのだという自覚をもたなければならない。だから私が「自分ではそれだけの立派な思想をもっていない」というのは謙遜だと思われる方がおられるかもしれないけれども、そうではなく、現代では誰一人としてそんな大それた思想をもっている筈はない、みんなが模索していろいろなことをやっていると思うのです。

ただその中に「これが解決策」ということで押しつけてくる人間がいるのは事実なので、私はそれに対して非常な反撥を感じるのです。そんなことではなく、みんなでゆっくり歩こう、おれの歩き方はこれが一番歩きいいのだとAがいう。BはBでこちらの方がいいという。そういうことをみんなやりながら、Aの歩き方、Bの歩き方というものに、お互がつきあってゆく、そうすれば非常に歩みが遅いわけですが、無理のない生き方なのです。こうしてみんなに共通な地盤が出来上ってしまえば——そのときこそ、それが揺がぬものになってくる。

西洋では近代というものがどんなに没落にむかって行っても、あれは長い年期をかけてあのようにやって来たからそれだけの根強さをもっているのです。しかし日本では事情はそうでは

ない。従って非常に焦るわけです。例えばマルクス主義というのが日本ばかりでなく一般後進国に人気があるのはなぜかと言えば、歩みの遅いのに業を煮やしてしまうとあれが一番いい、全部御破算にしてしまえばゼロという共通地帯が出来る。あれでもだめだ、これでもだめだ、そんならいっそのこと過去を全部否定してしまおう、全部ひっくりかえしてやろうという革命の思想が出やすいのです。

そうではなく、もう少し自分に忠実に――自分に忠実にというのは他人のそれぞれの生き方を尊重して、それにつき合ってゆくという気風なのですが――それをみんなが養ってゆけばいつか日本人の生き方が見つかるだろうと思うのです。上から無理に押しつけたり、下から無理に押し上げたり――上からというのは戦前、下からというのは戦後ですが――そういうやり方はいずれも失敗して、そのたびに混乱の度をふやすだけだというように考えております。

講師略歴

東大文学部英文学科卒業。日本女子大講師を経て戦後劇作家、演出家、文芸評論家として活躍「福田恆存著作集（全八巻）」の他「常識に還れ」「論争のすすめ」「現代の悪魔」「私の国語教室」「国語問題論争史」（以上すべて新潮社刊）など数多くの著作があり、現在「シェクスピア全集（全十五巻）」の翻訳を新潮社より刊行中。

世界の見方

木内信胤

一、はじめに
—全体と部分との関連—

二、世界情勢の展望
(1) アメリカ
(2) ヨーロッパ
(3) 共産圏
(4) 後進国

三、日本の位置と役割

補説
(1) 後進国の将来
(2) 現代日本の課題
(3) 日本における農村問題

一、はじめに
―全体と部分との関連―

世界の経済、あるいは日本の経済の根本をなすもの、その大きな輪廓についてお話するわけですが、絵を描く時にはデッサンということを致します。デッサンが固まらずに描くのではまずいし、大きな狙いをはっきりさせないでおいて、ディテールばかり描くということでは絵にはならない。そういう意味で、世界について日本について、一番大きな見どころというものをお話したいのです。

私はみなさんに一応は知識として知ってほしいということで申し上げるわけですが、同時にその中でおのずからものの見方というものを話していくことになります。そういうわけで私が申し上げることは単に知識の内容を覚えて帰ってほしいということではない。だから学校の講義を聞くようなつもりでは聞かないでいただきたいと思うのです。

私は世界の経済というものを見るときには世界の政治的な動き、あるいは歴史的な動き、つまり思想も社会もこめた人間生活全般にわたるものと離れてこれを考えることは出来ないと思います。経済を特に論ずるのはいいけれども、その時には政治、思想、社会一般というものが、つねにその裏になければならない。私はいつもこれらをゴチャまぜに捉えようとしている

のです。ただ重点が経済にあるというだけです。本当は重点を経済におきたくないのですが、私はほかのことはあんまり知らないから、やむを得ず経済を中心に考えているわけです。

現代は、マルクスのおかげかどうか知りませんが、まったく経済ばやりで、経済がすべての根源であるかのようにいわれているし、また事実ある程度そうなのです。しかしそれではいけない。私はむしろ経済というものをいい加減にあしらうような人間社会に早くなってもらいたいといつも思っております。

ところが現在は、大きな輪廓もさっぱりわからないくせに、小さなところを掘りさげてアメリカの景気がどうだとか、国際決済制度がどうだとかそういうことを論ずるのが経済だと思っている人が多い。とんでもないことでそれらは世界経済の部分にすぎないのです。全体の把握がしっかりしていなければ部分をいくらやってもだめな筈です。全部だめだというのではない、人生には捨てるものは何一つないのだから。しかしそれらの部分の研究は、全体をつかんでいる人が使ってはじめて役に立つ。部分しか知らない人が、いかにそれが正確だといっても、それでいきなり全体的議論をしても、それはだめなのです。

家を建てる場合、どこかの柱の組み方だけを詳しく知っていても、それだけでは家は建てられない。大事なのは家全体の設計なのです。あらゆる部分はそれが全体の中でどういう位置を占めるかが大事なのです。たとえば外務省の建物をごらんになると、スマートにエレガントに

出来ておりますが、その建物の中には同じような室がズラッとならんでいる。そこまでは結構ですが、外務省というところは外国に対して秘密を守らなければならない、ときには嘘をつかなければならないこともある。そのためには入り組んだ建物を作っておかなければならないはずです。ところがいまの外務省の建物は外から見ると、中味がすっかりわかってしまうような建物です。ですから、どの室に毎晩おそくまで灯がついているとか、どの室に何人ぐらいいるということから、なにに重点をおいているかということまで、みんなわかってしまうのではないかと私は心配するのです。そんなことではいい外交は出来ないでしょう。最近の日本には満洲をとってしまうとかなんとか、そういう特別の意志がないからあけっぴろげでいいのかも知れないが、私が申し上げたいことは、例えば建物をひとつ造るにもそういう根本になるものがちっとも論じられていないのが現代の風潮だということです。

「パーキンソンの法則」という本には「いまの世の中は大事なことは論じられないで、つまらないことばかりが論じられる世の中だ」ということが書いてあるそうです。会社でも、政府でも、役所でも、ほんとうに大事なことは二、三分しか論じられない。それが小さな末節的なことになると何時間でも論じられる。それがいまの世の中だと書いてあるそうです。会社の場合は利益を得ようというハッキリした目的があるからまだいい。国家となるとそれをどうしたらいいのかという大事な問題は、それは難しいから誰も論ずる力がない。結局そこは飛ばして、

やれ民生を向上するとか、やれ経済を増強するとか、えらそうにいうが、なにが増強なのかなにが向上なのかということはやっぱり論じられない。そこも飛ばして、末節に入ると、大ぜいの役人が寄ってたかってワイワイやる。それは小さくは外務省の建物でも、大きくは国の行政のやり方でも同じと言えるわけです。

ですから、経済を論じるにも、何をするにも、その前にもっと大きく、一体いまの世界はどういう世界なのかということを論じなければならない。そこで今日は、私はその根本をどのように考えているか、そこを出来るだけ簡単に要約してお話ししたいと思います。

二、世界情勢の展望

いまの世界は一体どういう世界か、一口で言えばそれは、大体四人の役者が踊っている舞台であるといえましょう。四人の役者とはアメリカが一人、ヨーロッパが一人、共産圏が一人、その他全部で一人、合わせて四人です。私がそういうことを言い出したのは五、六年前ですが、それから二、三年すると、これは四人ではなくて三人というほうが本当だということに気がついて来ました。第一のアメリカと第二のヨーロッパとは実は一つなので、しかもそこに日本も入れて考えるのが本当ではなかろうかと思うようになったのです。あるいはいまの世の中は四人の役者が三人になりつつある過程であると言ってもいいかもしれない。いづれにしてもその

四人の役者は各々何をやっているか、舞台の上でどういう芝居をやっているかということがいま申し上げるべき大事なことですが、その前に四人の役者それぞれの役柄は何かということを知っていなければならないのです。

(1) アメリカ

アメリカという国は、つい数年前まで「一国で非共産圏の半分ぐらいの力」を持っていたような、べらぼうに力の大きい国です。それがアメリカの一番の特徴ですが、それと同時にアメリカは「中産階級」の国ということをよくおぼえておいていただきたい。アメリカは大金持の国だと思っている人が多いけれど、それは錯覚なのです。大金持はいますけれども、その数はだんだん減りつつあるし、もう新しく出来ないような仕組みになっているのです。何故なら税金が高いからどんな金持でも死ねば相続税で大半とられてしまう。その前に例年の所得税で、二十万ドル（日本のお金で七二〇〇万円）以上の所得の九〇何%かがとられてしまう。だからいくら儲けても七二〇〇万円以上の分は手に残らない。七二〇〇万円というのは決して大きなおカネではないのでこの頃は日本でも年収一億円以上の金持が相当沢山出て来ている、（それを私は決して悪いとは思いませんが）ともかくアメリカでは金持は小さくなりつつある。それに反して下の方が大きくなりつつある。そこでアメリカは、最初に言ったように、大

中産階級の国になったのです。アメリカの政党は、民主党も共和党も政策はほとんど同じですが、それもこの事実の現われといっていい。

しかしアメリカがいまのような大中産階級の国になり切ってしまうまでには相当の歴史があったのです。いわゆる資本主義が盛んになってきた時代には、大きな金持が沢山できた。それは今世紀の始まりの頃ですが、その頃は金持が沢山出来るし、貧乏人もふえるし、マルクスの予言通り国内は二つの階級に分裂して行くかのような姿だったのです。それが現在では全然逆になったのです。それがいまのアメリカの実情であり、アメリカについて知っているべき要点なのです。

ついでに申せばアメリカは大企業の国だと思っている人が多いが、これも誤りです。アメリカは「中小企業を中心とする国」で大企業はますます大きくなってはいますが、雇用の量からみて、中小の方が多い。即ち人間はどこでどう働いているかというと、大企業で飯を食っている人は中小企業より少いし、段々にこれからオートメーション化がひどくなれば益々そうで、何万人、何十万人と使っていた会社はだんだん少なくなって来る。だから中小企業、独立の企業、自由職業で飯を食っている人の方が、すでに多いばかりでなく益々多くなりつつあるのです。また投下資本の全量からみても、上げる利益からみても、大企業の占める比率はだんだん小さくなりつつある。即ちアメリカは意外にも中小企業の国であり、いよいよそうなりつつあ

るということを知っておいていただきたい。

さて、ここまで申しただけでもすでにおわかりのように、アメリカという国は「マルクスの言った予言が誤りであったということを完全に身をもって実証した国」なのです。しかも一層面白いことに先程もちょっと申した通り二〇世紀初頭の頃はそうでなかった。アメリカにも恐慌が度々ありましたが、一九二九年から三二、三年にかけての恐慌が一番ひどかった。その頃はアメリカ人自身、マルクスの言う通りこれで資本主義もおしまいかと思ったという話です。ところがそのあとルーズヴェルトが出て「ニューディール」をやった。これは大きな実験のようなものでしたが、あれこれやっているうちに、人間の知恵が進歩し、経済というものは盲目的な力で動いているのではないということ、すなわちこうすればああなる、ああやればこうなるということがわかってきた。それがある程度までわかってきたときに第二次大戦が始まった。もしそれがわかっていないうちに戦争になっていたらアメリカの経済は破綻していたかも知れない。その結果日本は負けないで済んだかも知れない。ところが経済というものはああやればこうなるということが相当わかって来たとき戦争をやったから、わかった通り実行したのです。こうしてアメリカはインフレを起こさずに戦争をやることが出来た。過去の歴史においては戦争をやれば必ずインフレになるに決っていたのです。ところがアメリカは戦後にもインフレの原因を残さないように戦争をした。

私は第一次大戦のあとドイツが大インフレーションになった次第を、その後ドイツに行ってよくきかされましたが、その頃と比べて今度の戦争のときの人間の知恵の進歩というものはなんと素晴らしい違いであろうかと思うのです。それは、少し前の人間というものは実に馬鹿なものだったということです。だから昔のことを考えるにはその当時の人の理解の程度がどの位だったのかをよくよく考えておかなければならない。それを考えないで過去の出来事で未来を予測しようとすればとんでもない誤りを犯す。ところが経済というものは盲目的な力に左右されるもので、いつの時代にも同じ法則で動くと考えて、「知恵の進歩」という要因を認めようとしないのがマルクス流の考え方です。だが人間というものは、大体知恵さえ進歩すれば、自己をコントロール出来るのです。自己を引っ張って行けるのです。その事実をアメリカは実証している。これはマルクスに対する最大の反撃です。その上更に、アメリカは中産階級化したということは、マルキシズムというものが完全に誤りであったことを、まことに鮮やかに実証したものであります。

つまり一口でアメリカとはどういう国かといえば、マルクスの誤りを遺憾なく立証したのがアメリカだということです。この基礎知識にのせてアメリカを、また世界を見ていただきたい。これがいま踊っている四人の役者の一人、アメリカという役者の性格です。アメリカがそういう性格だという認識が、太陽がきらめいているように、あなた方めいめいの心の中にいつも

ハッキリときらめいていなければならない。そしてその基礎の上にものを考えることをしなければ、小さな部分をどんなに細かくいじくっても、結局それは何の役にも立たないことになるのです。

(2) ヨーロッパ

第二の役者はヨーロッパですが、ヨーロッパとは、「いまの世界を形成した原動力」であるということを最初に認識しておいていただきたい。それは「ルネッサンス」に遡ります。その前の中世は全面的にキリスト教に靡いていた。そこに思想の変化が起ってギリシャ精神が復活して現世的になった。神様に奉仕するばかりが能ではなく、現世を楽しんでいいのだということになってきた。当時昔のギリシャ彫刻などが発掘されたりすると、それは相当の驚異だったのです。世界はそのようにして次第にギリシャ精神を復活させて行くわけですが、その大きなプロセスをどう考えるか、それはすべてものごとを考える上に非常に大切なことですが、今日はそれについてはふれません。しかし要するにルネッサンスがあり、つづいて宗教改革があり、そして近代ヨーロッパが始まったわけです。ところが当時は、神聖ローマ帝国というものもあったが、要するにローマ法王が全部を支配しておったようなものでしたから、人間同士が国というものに分れて、それでお互に争うということはあまりなかった。これはルネッサンスのあ

と、まだ大分長くそうだったのです。ところが宗教改革のあと「宗教戦争」というものが始って、新教と旧教とがお互に戦争をし出しますと、いつの間にかそこに「民族国家」というものが出来て来た。ここが実は大切なところで、その民族国家というものは、フランス語を話すのがフランスという国、ドイツ語を話すのがドイツという国というように固まって行った。それが「民族の形成」でありますが、この「民族主義」というものは、元来アジア、アフリカのものではない。ヨーロッパのものであるということを記憶していただきたい。

そしてこの民族国家が形成される過程において、彼等は実に激しい戦争をやりましたが、その結果そこに、近代科学技術によって代表される、いわゆる「近代文明」というものが生れて来た。それはギリシャ的というのか、非常に自然征服的なものであります。自然を駆使してそれを人間の要求を満足させることに利用して行こうというタイプの文明です。その自然の駆使がだんだんうまくなって、電気を使うとかその前に蒸気を使うというようなことになった。こうして非常な短期間に大きな歴史上の変化がもたらされることになった。それは、いわゆる「産業革命」からいえば、わずかに二〇〇年かそこらのことです。ルネッサンス当時のヨーロッパの文化の程度は、当時のインド、当時の支那と比べて別に大して優れていなかった。ところがいまでは、ヨーロッパの力は急激に上昇して、比較にならぬものとなった。

ヨーロッパの力は、自然外にはじき出されることになったが、ルネッサンスから間もなく航

海術が発達して新大陸の発見というようになった。そしてそのあと長く、ヨーロッパ人の「植民地獲得」ということがつづく。こうして世界が彼等によって分割されるようなことになった。考えるまでもなく、現代の地図というものは、このような近代ヨーロッパの力のほとばしりによって出来上ったものですが、このことをよく考えに入れておいていただきたい。

そのようなヨーロッパの征服を免れた国はごく僅かしか存在しなかった。アフリカではエチオピア一国ですが。東洋では昔のシャム、いまのタイ。支那は半分植民地になったようなもの。それから日本。中南米は勿論全部植民地。日本は敢然として明治維新をやって独立を守りぬいたが、もう少しぼんやりしていたら危かったでしょう。日本の幸運は、何分にも距離が離れていたから、彼らの力はあまり強くは働かなかった。こうして現代の世界というものが出来上ったのです。

ところがそのヨーロッパが第二次大戦を最後として、お互にはフッツリと戦争をやめることになった。この事実は、例えば民族国家が出来て以来何百年の間仇敵の間柄であったフランスとドイツの関係を見ていただけばわかる。だからこそEECも出来たわけですが、要するにいまのヨーロッパは、ある意味で民族国家が出来る前のヨーロッパにかえろうとしているわけです。そういう大変化が行われている。

なぜそうなったか、その理由如何に拘らず、先に申した通り、いまの世界はヨーロッパが作

つたものです。そのヨーロッパは相互に戦争をやったからこそえらくなった。それがいま、戦争を相互にやらなくなったということは、現代の世界もまた徹底的に変っていくに違いない、ということです。こういう世界の起動点になっているのがヨーロッパで、ヨーロッパとはそういう役者なのです。このヨーロッパの変化ということが、現代では一番大事な、根本的な問題だと私は考えているのですから、私からみれば、この点がわからないと、世界のことは全くわからないといわざるを得ないのです。

(3) 共　産　圏

次は共産圏ですが、一体ソ連という国はどういう国かといえば、ちょうど明治時代の日本と同じことがソ連についても言えるのです。ピーター大帝は明治天皇と丁度同じようにヨーロッパの文明を取り入れて自分の国を強くして、独立を守ろうとした。ソ連という国はかわいそうな国で、六回もヨーロッパに侵略されて、首都危しというところまできた。ソ連という国はヨーロッパの外にあって、つねにヨーロッパから圧迫を受け、それに対抗しようとして、頑張ってきた国なのです。ところがそのソ連は、これを歴史の必然というか偶然といっていいのか知りませんが、一九一七年、前大戦の最中に革命をやって共産主義というものを採用した。その共産主義が誤りであることは、さっきアメリカの時にお話したように、すでに全面的に証明さ

れている。そういう間違ったものを採用したのがお気の毒なことにソ連なのです。もちろんマルキシズムに非常な改造を加えてきた。マルクスが今墓の中から出て来たら「私が言ったことは全然違う」と言うでしょう。それほど変ってはしまったが、その考え方の基礎にマルクス主義があるのはやっぱり事実でしょう。この間違いであるところのマルキシズムを採用したことがソ連の犯した誤りの一つです。ところがソ連はもうひとつ、マルクスは「資本主義が発達したらこうなる」といったのに、資本主義がまだ発達していないところ、いわば「場違い」のところに共産主義を導入したという第二の誤りを犯した。この二つの重大な誤りを犯しているのが、ソ連という国の根本的な性格です。

ところで、そういう誤りを犯した結果はどうなのかというと、万事不都合なことが起きて来る。従ってそれを押し切って行くためには、スターリン流の強圧を加える以外に方法はなかった。スターリンは大豪傑ですから、それに第二次大戦が始まったので、ともかくもあそこまで凌いで行くことが出来たが、しかしそのスターリンもついに神経衰弱で気狂いのようになって死んで行った、とフルシチョフが話してくれましたが、つまり人間のナーブとして耐えられなかったのでしょう。そこでもう、フルシチョフにも誰にも、再びあの真似は出来ない。フルシチョフという人は非常に能力のある人ですが、スターリンとは段が違う。そこで現在のソ連には何が起っているかといえば、それはつまり「自由化」といってもいいが、要するにマルクス

主義から離れていくことです。スターリン流の強圧が出来ない以上、マルクス主義の誤りが露呈してくれば、それを直すためには、どうしてもマルキシズムから少しづつでも離れないわけには行かない。それがいまのソ連において進行している事実なのです。言いかえればソ連は「普通の国」になりつつあるわけです。

先程私はソ連は共産主義を採用したと申しましたが、これについてアーノルド・J・トインビーが実に面白いことを言っています。歴史の上で、いつでも強い文明と弱い文明が接触した場合には弱い文明の方は逃げて隠れようとするか、もしくは積極的に、偉い方から学んで自分も同様にえらくなって国を守ろうとする。この二つに一つしかない。ソ連も日本もその後者の道を選んだ適例であるが、ただソ連には他に見られないめずらしいことがある。ソ連は西欧から、大砲の作り方とか、軍艦の作り方などを学び知っただけでなく、西欧が作り出したところの一つの「教義」を輸入し、それを自分で採用すると同時に、その教義を使って西欧にカウンター・アタックを加え始めた。この教義――トインビーはクリードという言葉を使っているのですが――そのクリードもまた武器とすることが出来るので、ソ連はそのクリードを武器としてカウンター・アタックをかけているという、これは世界歴史に前例のない珍らしいやり方だというのです。前例の有無は私は存じませんが、まさにその通りで実に面白いことだと思います。

ソ連が共産革命をやったのは一九一七年で、この前の大戦の最中ですが、戦争がすんで暫ら

くしたら、ソ連は盛んにカウンター・アタックをかけ始めた。当時はアメリカもまだ恐慌の前で非常な思想的混乱時代でしたから、そのカウンター・アタックが実によく利いた。ドイツもまさに共産化しそうになった。その寸前、いま一歩というときに出たのがヒットラーですが、もし当時のドイツが共産化したら、話はすっかり違っていたでしょう。ドイツは資本主義が本当に熟していた国ですから。いまでも英米人は盛んにヒットラーの悪口を言うけれども、実はヒットラーのおかげで助かったのではなかったか、という見方も許されるわけでしょう。

私はヒットラーのドイツに住んでいたし、彼の演説などはよくラジオで聞きました。ヒットラーが演説するときは、銀行でも何でもその間みな仕事の手を休めます。そして放送をきく。全市がシーンと水を打ったようになる。歩いている人もどこかに入ってきくのです。大したものでした。ラインランドにドイツが進駐したときの演説など、実に息づまる思いでした。フランスが怒れば戦争になったのです。当時のドイツはまだ弱かったからやられてしまうかもしれない。みんなかたずを飲んで聞いたものです。大した光景でした。生じっかのオーケストラなんかよりずっと面白い。ヒットラーのやったことの善悪ということとは一応別にして、その面白味がわかないと政治や経済はわからないと思います。要するにドイツはヒットラーによって共産主義から救われたようなものです。それまではドイツにはソ連のカウンター・アタックは実によく利いていたのです。

ところでそのカウンター・アタックはいまはどういうことになっているかといえば、アメリカはもう不死身です。マルクス主義は全然間違いだということがみんなにわかってしまったので、いくら共産主義の説教をしても労働者も誰も一向に見向きもしない。この間フルシチョフがアメリカに行った時一番フルシチョフに強く当ったのが労働組合だった。「お前の国はなぜ労働者にストライキを許さないのだ」というようなことで、逆につめよったわけです。アメリカ同様、カウンター・アタックが利かないのは西ドイツです。特に西ドイツは東ドイツの様子がよくわかる。避難民が大勢入ってきた。それを目の前に見ているので、共産主義というものはじつに困ったものだということがはっきりわかってしまった。ヨーロッパの他の国では共産主義に魅力を感じる痕跡がまだ少しは残っているけれども、どんどんと色あせている。ただ先進国の中で日本だけはまだマルキシズムから解放されない人が沢山いる。もうわかりそうなものですが、心を閉じている人には、いつまで経っても何を見せてもわかって貰えないのでしょう。だがそれでは世界からおいてけぼりを喰ってしまうだけです。

そういうわけで現在はそのカウンター・アタックは、先進国に対しては全然利かない。それでやむを得ず彼等は、その対象を第四の役者としてこれから申し上げようとしている後進国に求めている。以上が第三の役者たるソ連の性格、そしてそのソ連がいま舞台で演じている仕事の一部です。

中共についても同じことが言えるわけです。中共もソ連と同様に「二重の誤り」を犯している。ただ中共はその特徴として農業が特に問題なのですが、毛沢東は、革命後のソ連をみて、ソ連はマルクス主義を実行していると言いながら農業のざまはなっていないと考え、自分は思い切ってマルキシズムを農業にも実行してみようと決意したのではないかと思います。そこで踏み出したのが「人民公社」でしょう。その人民公社は、一時は非常によく見えたが、現在では収拾すべからざる状態になってしまった。しかし政府の把握力が強いから、謀反はできない。それで国全体が一口に言って栄養失調のようになっている。とんでもないことです。

そこで蔣介石は、台湾から「本土反攻」をやるつもりでおります。たぶんいづれやるでしょう。やることがいいか悪いかは別ですし私もやってもらいたくないとは思いますが、一般に考えられているように反攻なんか出来るものか、蔣介石がやったってかなうものかというのは間違いだと思います。やったら成功するかもしれない。ソ連が出て来ないという保障があればたぶんやるでしょう。そして成功するかも知れない。ともかく中共とは、このように考えていていい存在です。

(4) 後　進　国

第四の役者は後進国ですが、大体地域的に申しますと、中南米に、アジア、アフリカ。その中間の中近東がはいるわけです。その後進国の特徴としては、第一に相互に非常に違うということを認識していただきたい。例えばインドからビルマに来るとほっとします。なんとなく気が楽になります。その気分の相違は大変なものですが、ビルマは御存知の通り仏教国です。仏教というのはヒンズー教、あるいはイスラム教と違って、絶対主義でない、だから万事がなごやかです。タイへ来るともっとハッキリしてちょっと日本に帰ったような気がします。ビルマとインドとは、同じくイギリスが治めていたに拘らずこのような相違があります。

第二に後進国は、政治的にみて、自分を治めることが出来ないという非常に困った特色があります。ましてデモクラシーで治めるなどということは一層難しい。全然読み書きができなくて、人の国のことなど全くわからず、自分の周りのことしか考えられない。そんな人にデモクラシーだといって投票させて何になるかと言いたいのです。ところがそのデモクラシーをやめるとアメリカが援助を停止する。だから実に困ったことになっているのです。しかもその生活は独立以後全然といっていいほど、よくならない。戦争はなし、饑饉はなし、ＤＤＴなどまいて衛生をよくしてやるから、人口は大変にふえる。その上自分では碌すっぽものも作らないから、どうしても助けてやるほかはない。そこで全部が、アメリカとヨーロッパ、やがては日本も加えていわゆる先進国にぶら下ろうという形になるわけです。だから日本も、アジアの一国

だからといって「おれは後進国のほうに近い」などと思っていたら飛んでもない話です。

後進国はどうしてこんなことになっているかというと、第一にその貧困の原因を、長いことヨーロッパが搾取したからだと考えている人が多い。しかしそれだけが原因ではない。搾取がやんだはずの独立以後のインドネシアはオランダが搾取していたはずです。ところがオランダを追っ払った以後のインドネシアは、いわばどうにもこうにもならなくなった。一方オランダは、インドネシアを失った当時は本当に自他共に再起不能だと思って嘆いたものです。ところがやってみるとメキメキとよくなって、いまは西ドイツとちっとも違わない。その西ドイツとオランダとを含むＥＥＣが、やがてその生活水準においてアメリカに追いつこうというのだから、この不思議をどう説明するか。そこがわかっていただきたいのです。こんなことは旧観念では全然わからない。そこを説明するのが「植民地無用論」です。もちろん後進国が独立を得たことは人類の歴史の大進歩でしょう。ところが植民地は解放さえすればよくなるかというとそれは全然違う。逆に先進国の方は、植民地を失って困るかと思ったら、ますます繁栄していくというのが現在の世界なのです。何故そうなったかと言えば、後進国はもともとよくなる要素をもっていなかったからだ、私はそう思います。

では後進国と先進国との本質的な違いは何か。私は要するにそれは「近代科学技術を駆使する能力」の有無にあると思うのです。その科学技術というのも、孤立した知識ではあまり役に

立たない。例えばインドが原子炉をもって原子力を使うことを覚えたところで、そんなものはインドの経済になんの価値もないのです。問題はすべての要素を含めた総体的な科学技術の国民全体としてのレベルにあるのです。

また一方科学技術を使いこなすには「組織」に乗せなければならない。ですからその国に「秩序」がなければならない。自分の国という経済単位を、秩序を保って維持していくという力がなければならない。秩序を保つというのは約束したことがチャンと行われるということです。契約が重んぜられるということです。それを秩序という。別の見方をすれば、それは過去の積み上げが使えるということです。過去の積み上げが使えて、将来に対して見込みを立てることが出来るということです。そこではお互に信頼感がもてて、それ故に安心してすべての人が十分に分業的に仕事をすることが出来る。自分がこれだけを専門にやっていても、他の人が他の分野はちゃんとやっていてくれているという信頼感がある。このように非常な分化があるということは、非常な綜合があるからですが、その綜合的な体制が確立していて、どんな部局を突込んでやっていても全体に役に立つというのが本当の組織なのです。そういう組織が造られていなければ、国の経済は動かない。

今日のお話の最初に、経済学においては経済の部分だけをやってもだめだと申しましたが、これも実は同じことで、綜合がしっかりしていなければどんな部分をやっても結局空漠たるも

のになってしまうのです。その綜合する力をもっているのが先進国、もっていないのが後進国なのです。

後進国はこれまで植民地だったために碌な教育が受けられなかった。だからそういう能力を身につけることが出来なかったということもあるでしょう。しかし彼らもあんまり大きなことはいえない。もし植民地になっていなかったら、それこそ何にもなかったかもしれない。昔のとおり槍とか弓矢とかでお互に戦争をしているという状態がいままで続いていたかもしれない。ヨーロッパ人が来て余計なことをしなければ彼らは非常にハッピーな天国にいられるかというと必らずしもそうではない。例えばアフリカ人の生活は猛獣との戦いであったり、天候が悪ければ餓死しなければならず、疫病とも不断の戦いがあるといったそういう生活が続いていたかも知れないのです。

そこで後進国にいま一番大切なことは秩序を保ち組織にのせて仕事をする能力と、近代科学技術を使う能力をつけることです。それがなければ先進国がどんなに設備を作ってやっても何にもならない。むしろかえって害があるとさえ思う。だから私は後進国援助ということは思い切ってやめてしまった方がいいのではないかといまでは思うようになった。アメリカでもそのことが次第にわかってきた。しかしうっかりするとソ連の方にとられてしまうから、それがこわくて援助しているのです。しかし援助することが後進国に害ありとするならばこのままでは

っておくことは出来ない。もしソ連が後進国を舞台に怪しからんことをするなら、むしろソ連を直接叩いたらどうか。そんなことをすれば戦争になるからこわいというのなら、アメリカを始め西欧はもっと強くなったらどうか。そういう論理が次第に力を得るように変ってくるのではないかと思われます。いまは原水爆戦争をおこしてはならないという一心で、そういう見方には人々は目を蔽っている。だがそんなことを言っておれば、後進国は段々ひどいことになって、いつか世界がメチャメチャになってしまうかも知れない。そういうことを考えねばならぬのが、今の世界であると私は思っているのです。

以上をもって「四人の役者」それぞれの性格の話を終ります。その四人が舞台の上で何をやっているか。現にやっている動きは、どういう話の筋をはらんでいるものか。それは「人類の歴史」の解釈の問題であります。その点ここでは深入り出来ませんが、その解釈の糸口になることは、少しばかりお話しすることが出来たと思います。

三、日本の位置と役割

さて最後にいままで申しました世界状勢のなかの「日本の位置づけ」の問題ですが、私の先進国の定義、いいかえれば「近代科学の技術を組織に乗せて駆使する能力」という点では、日本は先進国のなかでも超一流であると思います。どうかすると世界一かもしれません。それは

ソニーのようなものを見てもわかる。この頃は時計のようなものもスイスの時計よりいいのが出来ています。しかもそういう小さなものだけでなく、船を作っても日本が一番早く作ってしかも一番安い。それにはチープ・レーバー、すなわち仕事の能力の割に安い賃金で甘んじているということもありますが、それだけではないのです。もっともチープ・レーバーも実は結構なことなのです。レーバーをチープに提供出来るということは、それ自体、国民の能力の表現なのですから。またそれは日本人の生活の中にもあるのです。もともと日本人は簡素な趣味を愛します。だからいまでも大金持というものは存外倹約家なものです。きのう金持になったばかりの連中がバカバカしい金を使う。とにかく日本人というのは、概して余分な消費はしない国民ですから、日本人の生活は全体として安上りに出来ている。だからものを安く作れるので、これは日本人の大長所なのです。日本人はそういう一種の天才であるかもしれない。その上日本人のやることは実に要領がいい。そしてよく勉強をする。各自よくなろうとする意欲が実に強い。なにかを知ろうとする熱意がはげしい。日本人はそういう意味では素晴らしい性質と能力とをもっているのですが、こうみることが、日本に対する評価の基本になる。それが「日本の位置づけ」なのです。

資源がないからとか、国が小さいからとかいう理由で、日本はだめだと考える考えはフッツリとすてていただきたい。いまの世界は、昔の「戦争をすることが建前であつた世界」とは変っ

たから、もはや資源の有無とか、国の大小とかいうことは大した問題ではない。それはさきほど「植民地無用論」としてお話した。植民地というようなものは、いまはむしろ邪魔ですらある。現在日本は、満州や朝鮮をもっていないからこそ実に楽なのです。私の年輩の者ならみんな知っていますが、当時における満州や朝鮮というものは、実に大きな負担だった。当時は、平和なときでも、またいつかは戦争があると思って国を経営していた。その戦争のため必要とあらば、満州、朝鮮、台湾、そのコストがいくらかかろうとも、そういうことは考えずに当時の日本人はこれを経営した。ところが今ではもとの列強は相互にはもう戦争をしません。それに日本人はいまさらアメリカに復讐をするということを考えないわけです。こうしていれば日本という国はますますよくなっていく。まことに不思議といえば不思議な次第です。昔は強い国はみな相手に隙があれば出ようとしていた。それで隙を与えない必要のため、どうにかして強くなろうとした。しかしいまはそういうことがない。だからこそ、国の大小・資源の有無に拘らず、科学技術を使う能力だけがものを言う。国内に資源がないことは苦にならないし、領土も、植民地もいらない。そういうことになったのがいまの世界です。

すなわちいまの世界において一番切なことは、「列強意識の消滅」ということなのです。これまでは相争う列強というものによって世界が形成されて来たが、いまではそういうことはない。従ってナショナリズムというものも割引きされていい。ナショナリズムとは、喧嘩をする

ときには非常にいいものです。だからどの国でも戦争態勢に入るときには、ひどく祖国愛といったものを鼓吹したものです。ところが現在では、このナショナリズムが割引きされるばかりか、文字通りの「共存共栄」の世の中になった。すなわちいまの世界には、対共産圏関係を除いて戦争要因はなくなったといっていい。別の言葉でいえば、「絶対平和の基礎」はすでになり立っているのです。

しかしこのことは別の面から見れば世界中が奇妙に、何か張り合いのないようなものになって来たともいえることです。それはいままで偏狭な愛国心ばかり養って来たからでもありますが、要するに世界は、これから一転して、精神的に大堕落をする可能性があると私は考えます。しかもそこへもって来て、ヨーロッパ人のキリスト教に対する信仰というものは、なんといっても衰えを見せている。いまのヨーロッパもアメリカも、キリスト教を知らなければ、キリスト教に対して或る程度の共鳴がなければわからないといっていいほど、それほど滲み通った、それほど大切なキリスト教ではありますけれども、現在では人の心を支配する程度からみて、ひどい衰えを感じないわけには行きません。ですから、これを宗教的に言えば、現代はまたノアの洪水でもなければならない時代と考えていいのかも知れません。もしくは、「バベルの塔」という話を知っていますか。人間がバカに偉くなってしまって、塔をバベルというところに作りました。それが天に届きそうになったので神様が怒って、塔を壊してしまうと同時

に、人間の言葉を別々にしてしまった。そのため人間は共同の動作ができないようになった。またそうして人間はバラバラに分裂してしまったため、相互にケンカをし戦争をするようになった――というのが旧約聖書の中の神話だそうです。このような「ノアの洪水」あるいは「バベルの塔」というような話が、いまは頭の中にチラチラしなければならないような世界の姿であります。ノアの洪水の代りに原水爆戦が突発するということが実際にあるのかもわからない。事実そういう恐ろしい時代でありますが、そういう恐ろしさをぐっと噛みしめる見地から世界というものを考えるべきなので、現在の目先の専門的なこまごました現象だけを取り出してみたところで、どうにもなるものではないのです。

随分こわいことをお話ししましたけれど、だからといって焦ったらかえっていけないことになる。戦前の日本は焦って失敗したけれども、いまは科学技術さえ知っておればいいのですから、単に生活をよくするためなら焦る必要は全然ないのです。しかしこのことがまた他の方面から考えれば、人の心を堕落させることになるのです。だからみんな焦りたいのかも知れません。堕落するのがいやだからでしょうね。一種の潜在意識でしょうか。日本人がみんないつも尻を叩いてほしいのです。「大変ですよ、大変ですよ」と云ってもらわないとなんだか物足りない。それはそうしないとモラリティー（道徳性）がもたないという潜在意識の働きでしょうか。ところが実際には、焦る必要は全然ないのですから、やっぱり焦らないのがいいのでしょ

う。ですからこれからの日本は、もっとグッと落着いて、上手に馬に乗る人がしょっ中手綱を締めているように、そういうつもりで走っていたら、例えば経済成長にしたところで、ずっと早く、ずっとうまく行くでしょう。いまは野放図にやるから馬が横を向いたりなにかして落馬したりする。それで大さわぎをして、また乗り直して走っているというような恰好なのは実にまずい。

しかしもっと深い問題として考えて、この焦る必要がないということは、実は日本国はもっともっと「個性的になっていい」ということを示しているのです。むこうと競走するのなら焦りたくもなるが、むこうの真似もしなければならぬ。いわゆる「西欧化」が必要であった。ところが現在はそんな必要はもう存在しない。日本人は日本人らしくあっていいということが世界の情況の中にありありと出ているのです。同時にそれは、世界中の国が悉くみなその「国の個性」に生きていいということですが、世界中がそうなってはじめて、このむづかしい世の中もうまく治まってゆくのでしょう。一人一人が個性的になるということは、他人と離れることでもなければ喧嘩することでもない。いい個性というものは決してそんなものではない。その日本人は日本人らしくやるということが、たとえば選挙のやり方、政治のやり方等に現われたらどうなるか。現在私にもそこをハッキリ考えることができませんが、そうなるのでなければ、日本には本当の民主主義は育たない。借りものではだめだからです。そこで選挙も政治も憲法

も全部改造してもいいのです。それをやることが今後の課題であると同時に、それをやって初めて本物の日本が誕生する。他の国も同じようなことをやれば、それがこれからの「望ましき世界」ということになります。

以上が世界および日本の現状について私が考えていることの大略です。

結局現在の世界は、最初にのべたように、もうヨーロッパとアメリカとを別々に考える必要はない。それに日本も加えて「先進国」という一人の役者になりつつある。それに対して「共産圏」という役者がおり、それは強く変貌して「普通の国」になりつつある。そこに「後進国」という第三の役者がいるが、これは深い深い理由から、独立はしたもののどうにもならないことになりつつある。それがいまの世界の姿です。そのなかでは日本もそうだが、他の国も、みなゆっくり構えて〝各自の個性に生きる〟ということが、これからの最重要の課題となるであろうと私は思う。そう考える理由をいろいろと述べましたが、大事なのは結論的な言葉ではなくて、その理由付け、むしろこう考えることの全体――それを思想体系といいましょうか――その全体としてこれをお考えになることを希望します。

補　説

(1) 後進国の将来

現代では国の大小とか資源の有無とかいうことはそれほどものをいわないので、近代科学技術を組織に乗せて使う能力だけがものをいうということを申しました。その能力が先進国においては顕著に現われているのですが、後進国がだめなのはその能力がないからだということが事実ならば、後進国開発問題はその能力を鍛えることにあるわけです。しかし能力というものは自分で鍛え出すものでしょう。みなさんの体験をふりかえってみてごらんなさい。それを人からもらって来るわけにはいかない。何かヒントを得ることは出来ます。人から鼓舞激励を受けることもできます。偉い人の治績を見、あるいは偉い人に接すればおのずからこちらも鼓舞されて、それで自分の能力が鍛えられるということはあります。しかし結局は自分でやらなければ能力は絶対にできて来ない。だから後進国についても、自分でやらせたらいいのだ、下手な援助をしたらかえって害になるというセオリーがここから出て来るわけです。

では自分で能力を鍛えるのにはどうしたらいいか。ここにもうひとつの問題は、彼らは実は自分がよくなろうという意欲を欠いているということです。

私は何度もこういうことを体験しているのですが、たとえばフィリッピンのある人が私にあ

る会合で（一九五四年京都で行った『太平洋問題調査会』の会合、それは「後進国の生活水準はどうしたらよくなるか」を論じた）言ったことがあるのですが、「あなた方は後進国をよくするよくすると言って大騒ぎをしているけれども、あなた方はわれわれがトロピカル・エーリア（熱帯）に住んでいることを忘れているのではないか。われわれのところでは、朝起きれば椰子の実が三つばかり落ちている。それを切りさえすれば非常にいい飲料が得られる。土地は余っている。フィリッピンはいまの三倍の人口を収容できるのだ。お魚だって川でも海でも網を投げればかかって来る。バナナはあるし別にこれという差し支えがないから、われわれはこうしているだけで、なにもあなた方がギャアギャア云ってくれる必要はないのだ」とこういうことを云ったので、これにはみんな唖然とした。しかしこの言葉には相当な哲理を含んでいる。何れにしてもこの言葉が示しているのは、「彼らには向上意欲が足りない」という事実です。そのもっとはなはだしいものがインドなのです。

インドに至っては、われわれは仏教を知っているからよくわかるのですが、ヒンズー教徒の考え方では、現世の生活がつらいのは前世における悪業の結果です。また現世における最大の功徳、善行はそのつらさをじっとこらえることだ、その忍従の功徳によって来世ではいいところに生れて楽ができると思い込んでいる。ですから経済がよくなる筈はない。こういうわけでほんとうのことを言えば、彼らをよくしてやろうとすることが本当にいいことかどうかわから

なくなるのが真相です。だからわれわれとしては無理によくしようとかからないで、彼等自身、本当によくなろうとするならば、こちらでもそうなれるように出来るだけのことはしてやるという態度がいいのでしょう。ではそれにはどうすればいいかということを簡単に端折って申し上げるとこうです。

第一に彼らに教えるべきことは、いまは植民地というものは誰にとっても不要に帰したのだということです。先進国のわれわれを見ていただきたい。先ほども述べた通り植民地をすべて手放してしまったけれども、われわれ先進国同士の貿易はふえるし、先進国同士技術を交流し資本を交流しているが、それだけで大変に経済はよくなって来ている。だから後進国の人に対しては、先進国は後進国との貿易がふえることによってよくなるのではなく、先進国だけが相互に交流し融け合ってゆくだけで、すばらしくよくなりつつあるという情況をよく話して、あなた方には非常に気の毒であるが、あなた方はどうなろうとも、われわれは別にそれほど困ることはないのだということを納得させるべきだと思います。後進国との貿易が全くなくては勿論困ります。また全世界が乱れたら困る。しかし全世界の三分の一くらいの後進国が普通の状態にあってくれれば、あとはどうなろうと、たとえ共産主義に投じようと、先進国では依然としていまの超スピードの繁栄が続けられる。まことに現代には、旧い観念では到底理解できない不思議なことが起っている。こういうことは後進国の人々に聞かせれば、がっかりすることで

しようが、事実ですから、率直に「そういう間柄になっているのだから誰もあなた方の国を取りには行きませんよ」と言って教えてあげるべきでしょう。だから一方において「安心なさい。早くよくなる必要はないのですよ。自分のペースでいらっしゃい」といってやると共に、他方、「自分で本当によくなるための努力をしないなら、放っておきますよ」ということを言うべきです。

日本の場合もそうなのです。さきほども日本は日本人の個性を存分に発揮すべきであって、自分のペースでやればいい、急ぐ必要はないということを申しましたが、その急ぐ必要がないということは、後進国全部にも、又その他の国にもあてはまるのです。勿論早くよくなりたければ急いだらいいのですが、どうしても早くよくならなければならない、そうしないと他の国から何とかされてしまうということはないわけです。大概の場合、早くよくならなければならないと思って焦るから、却って進歩は遅いのです。後進国の指導者は国民に「おれを指導者にすれば必ず独立してみせる。独立したら生活はすぐよくなるのだ」と言って聞かせている。そういう、いわば空手形を出しているわけです。その体面上早くよくなりたい。指導者は大体みなそうなのです。そういう指導者を今、強いて叩く必要はないけれども、なるべくそういう連中がはやらないように、「急ぐ必要はないのだぞ」ということを言ってやるのが本当のいい意味での環境づくりになるのです。

ではそういう環境を作った上でなにをするかというと、第一に彼らは自分の生活を向上させようとする意欲が足りないのですから、そこが変ることが第一だと思います。例えば自分で作って使ってみたら実に嬉しい感じのものを自分で作らせることです。私の考えではシャボンとかマッチとかいうものを作るのがいいのではないかと思います。マッチとかシャボンとかいうものは、随分プリミティブな方法でも作れる。粗悪なものでよければ簡単なことで出来るのです。一日の労働のあとそのシャボンで手を洗って夕飯を食うということになれば「なんと気持がいいだろう」と考えるはずです。しかもそのシャボンは自分で作ったとなると、そこに実に素朴な形で向上意欲が生れてくるわけです。

だからビルマならビルマのどこの村へ行っても、シャボン工場のごく幼稚なものがあるということになるのがいい、と私は思う。そういうことを奨励し、そのために若干の科学技術がいるから、それは教えてやる。機械も造ってやる。それは結構でしょう。こうして工場生産がはじまれば多少ともそこにマーケッティングというものが出て来る。マーケッティングが出て来ればやがて金融組織というものを作らざるを得なくなる。そういう必要に迫られてはじめて人間は動き出す。それが或る程度落ち着いてきて国民全体に自信がついてくれば、そこではじめて向上にスピードが出て来るわけです。だから彼らがわれわれに追いつくということはそうなにも不可能なことではない。ただその出発点はそういうふうにしてはじめなければならないと

思います。

ところでそういうふうにして彼らがシャボンを作っている間、これが大事なところですが、その間は「われわれはシャボンをビルマに輸出しなくてもいい。どうぞ関税障壁でもなんでも造って、それでおやりなさい」とこう言ってやるのが開発援助です。言い換えれば、彼らがお稽古中である間は、「自由貿易」はストップなのです。つまりお稽古のためという一種の新しい保護貿易が必要なのです。われわれはいつも輸出輸出と言って騒がないで「お前さんがそうしている間はわれわれは売らなくてもいい」と言ってやるのが親切というものです。そのあとでシャボンは大体覚えてしまえばなにもシャボンを作るだけが能ではないのですから、あとは重点を変えてもいいが、一応日用品的なものを全部作ったらいいでしょう。ですからあるときが来たらシャボンの保護貿易はやめてしまって、シャボンはどしどし輸入して、同じ町工場ではなにかほかのものを作ることにしていいわけです。そういう考え方に立てというのが私の「後進国開発理論」なのです。

その場合先進国の心組みとして一番大切なことは、後進国に対するいままでのような援助は打ち切るという点です。しかしそのためには「もしも援助を打ち切ったら私たちは共産主義になりますよ」といって後進国が切りかえしてきたとき、「どうぞ御自由に」と言えるところま

で、アメリカはじめ先進国に覚悟が出来なければならない。しかし残念ながらいまのところでは、まだそう言い切ることは出来ない。今すぐでは危いのです。ですからそうやるためには第一に、もう少しソ連や中共の情況を世界中に知れわたらせることが大切です。そして私が今日お話ししたことの半分ぐらいでもいいから、それが全世界の常識になって欲しい。そうなったら大丈夫ですがそれまではちょっと危いのです。それからもう一つは、さっきもちょっと触れたように後進国の三分の一ぐらいは、ちゃんとしていてこちらを向いていてくれないとまずい。全部が乱れたり共産主義になったりしては困るのです。一番の大問題はインドですが、インドが共産化しても平気だという腹がまえが出来るにはちょっと大変です。それにはもう一つ前提が要るのです。それは先進国同士の結びつきが、もっと本物にならなければいけないということです。

いまの新聞でみるとドゴールが頑張っていて、ケネディがイライラしているように見えますね。日本の新聞ではドゴールが悪いようにみえる。しかし私はドゴールのほうがいいのだろうと思いますが、ともかく先進国同士の根本的なものの見方が今日お話したようなラインで、きっちりきまることが必要です。勿論先進国は、末節的な問題では、お互に争う点はいくらでも争っていいけれど、根本の見方には完全な一致があることを自分自身明らかに認識し、そのことを世界中の誰にもわかるように示しているという状態を造っておかなければいけない。その

一致というものは単に条約でそういったというような底の浅いものではだめで、本当のものの見方の一致が確立されているという状態が必要なのですが、そのような先進国間の一致が出来たら後進国問題の処理は楽にやれるだろうと私は思っております。

またそうなってくれば世界の動きは大きく変ってくる。果してそうなるかならないかはわかりませんが、しかし私はいまのところ少なくともそうならなければ世の中は治まらないものだと考えて、自分なりの努力をしているわけです。

先程ものべました通り私は共産主義国というものは、ごく深い意味では相当軽んじていいと思っているのです。それを重んじ過ぎているのが世の中の誤りだと思っている。ですからこれから先多分、共産圏対自由圏の喧嘩は大したことではなかったのだとわかって来るという形で、その問題は引っこんで行くのではないかと思う。ただしその場合もまた先進国同士の一致がほんとうにできるかどうかというのが最重要のポイントでそれがこれからの見どころとなると思います。その一致が出来れば、万事はほぼ私の予測通りにゆくのではないかと思う。そして後進国問題は、そうなってはじめて本当に解決出来るのだと思うのです。

以上が後進国の問題を中心としてみた「これからの世界はどうなるか」ということに対する私の答です。

(2) 現代日本の課題

日本はさきほど申した通り、これからはもう急ぐ必要はない。今までは真似すべき相手があったが、もうこれからはない。西欧自身がいまは迷っているのです。もちろんだからといって西欧がだめだとは申しません。しかし彼らが今までのようでないことは事実です。その事実と、日本は急ぐ必要がないということとの二つを合わせてみた時に、日本には、自分のペースで日本らしいものを打ち出してゆけばいいという時期が訪れたということが言えるわけです。今までは西洋に追いつく必要上、日本らしいものをうちたてるよりも、ともかく追いつかねばならないということで自己を曲げてきたから変にひねくれた日本になってしまった。それが直るのがこれからの道です。それをどう直すかということがこれからの課題です。

第一に考えなければならないことは、日本では、自然科学の分野は別として、社会科学——経済学、社会学、政治学が関係する分野はすべておかしいということです。すべてが「上滑り、上わの空」だという事実です。どうしても万事ほんものではないという感じ、変ですね、日本という国は。安保斗争にしてもあれだけの事が突発したこと自体も変ですが、すんだらケロリと忘れたようになったことが実に変です。そしてなぜあいうことが起ったのかという説明は誰もしようとしない。ただ忘れていくのです。こういう国は文明国の中ではまことに特殊

です。不思議な国です、日本とは。第一にこのことに注目してほしい。日本の社会ではなにについても、ものの考え方がトコトンまでつき進んで行かない。すべてのものが不徹底のままで流れていく。それは何故かと言えば、私は日本では「学問がほんものでない」からだと思う。

その原因は遠く明治維新に遡る。明治維新では、黒船にびっくりしてむこうのいいところを取り入れて、自分も偉くなって対抗しようでした。当時としてはそれしか方法がなかったのでしょう。しかもその対抗措置をじつに立派にやったから、大東亜戦争までやれる日本になった。明治以来の日本人の念願は「富国強兵」の四字に尽きます。その富国強兵に関する限り、日本人が偉かったからです。この点は世界に対して大いに自慢をしていいと思います。

その明治以後の日本において、富国強兵が目的で、「西欧化」ということはその手段にすぎなかった。そこに問題があるのです。自然科学なら西欧の真似をしてやっても別に問題は起らない。たとえばトンネルを掘るとする。もしそこに学問上の間違いがあれば、トンネルは真中で合わないということが起る。それで間違いは訂正されるから西欧化に格別の問題は起らない。ところが社会科学のカバーする分野となると、このような訂正作用がない。したがって輸入された考え方にまずいところがあっても、訂正されることなくいつまでも続いて行く。

明治の人たちははじめは尊王攘夷ということで、西欧を夷狄として嫌っていたのですが、ひとたび開国進出することになったらサラリと変ってしまった。そこがまた日本人の極めてすば

らしい特徴なのですが、ともかくこのように変ってしまうとそのあとは虚栄心も手伝って、なんでもかんでもあちらのほうがいいことになった。例えば「議会制度」ですが本当は五ケ条の御誓文だけでよかったのかもしれない、明治の日本は。それをわざわざ憲法というものを作ったのです。夜久先生のお話で憲法政治になってから日本人は歌をつくらなくなったということでした。それからあとの日本は、どうも日本らしくない、いやな日本になったようですが、そのことと関係があるかもしれません。ところでその憲法は、当時の日本人が憲法が欲しいと思って入れたのではない、向うが憲法をもっているから、こちらにもなくてはならないと思ってやった仕事です。その憲法の中に議会がある。ある以上は選挙をしなくてはならない。ですからそれ以来、日本人は選挙をしておりますけれども、それが完全な「上わの空」なのです。国家の目的は富国強兵で明瞭でした。しかしそのためには何をやらなければならないかは、偉い人が留学してむこうのことを見て来なければわからなかった。つまり一般の間にはわからなかった。そのわからない国民が選挙をしたとてそれは一種の「飾り」のようなものにすぎなかった。その飾りに過ぎないところが「上滑り」の理由ですが、そのような選挙をわれわれ日本人は過去七〇年もやって来たわけです。ここに近代日本の特殊な性格の原因があり、またその性格が実によく表われていると思います。

「学問」もまた西欧化の一部局をうけもったわけでその例外ではありません。自然科学はい

ま云ったとおり、ものにチェックされるから大丈夫だけれども、社会科学は「飾り」のままでも進むことが出来る。飾りとして存在することが可能だから、マルキシズムというものがいまだに日本では何十年も前と同じように存在している。実際の経済を、また日本の経済の実際を説明するのが経済学の任務であるはずですが、そうではなく、大学の講座というものに座っていて、教えた生徒に点をつけていればいい。すなわち日本の経済学者は大体「飾り」なのですから、何を話していてもいい、マルキシズムをいつまで話していてもいいわけです。私は戦後アメリカ人から次のような質問を受けました。

「日本に来てびっくりした。大学の経済学のプロフェッサーに、あなたの国のいまの経済上の大問題は何ですかと聞いてみたら、そんなことは知らないと答えて平気な顔をしている。そういう人に一人ならず会ったが、いま燃えている現実の経済問題について、一説も持たないような人が、どうしてプロフェッサーとしてつとまるのか。」

そういう質問をうけて、私は、なるほど変だと思い一所懸命に考えた結果がいま申したような、日本では社会科学の分野の学問は、これも一種の「飾り的性質」をもっているからだという判断を下すようになったのです。

プロフェッサーばかりではない。習った方の人も、三井物産に入るとどんなマルキストも三ケ月もすれば普通の人になるといいますが、学生にとっても日本では、学問は一種の飾りにす

ぎないのです。日本ほどただ資格をとるために大学に入るという国は、文明国には他にはありますまい。アメリカでは大学はほんとうに学問というものを身につけるために入るので、当人もそう思っているし、教える方もそう思っている。だから学問という特別な仕事に不向きな人は「あなたは大学にはむかないから」ということでサッサと「さようなら」ということになるわけです。だからアメリカでは落第ということがなくて退校だけがあるのです。そういうわけで学問がほんとうの学問になる。その一方、アメリカというのはありがたい国で、大学の学問などというのはあってもなくてもいいのです。大学に行かなくても、社長にでも何にでもなれる。ところが、日本では、学問といえばそれは特殊な飾りを身につけることだからどうしても学校に入り、何でもかんでも卒業ということにしないといけない。そういう学校で課する学問と、本当の学問との違いがわかりますか。

日本のジャーナリズムとは、そういう学問しか知らない人の作っているジャーナリズムですが、そういうジャーナリズムしかない社会が作り出す政治、経済というものが、奇妙な性格を持っているのは当然でしょう。その性格を便宜上ひと口に「上滑り・空転」といっておきますが、日本の大特徴というものはこの社会科学がカバーすべき分野がすべて「上滑り」だということです。そしてそれが直るまでは、現在のようなつまらぬゴタゴタがつづくわけです。

この奇妙な現状のよって来る所以は、先ほども申しましたように明治以来の日本人がもって

いたアスピレーション（熱望）はヨーロッパに追っ付こうとするための「富国強兵」であって、ほんとうに西洋の文物制度をいいと思って入れたのではなかった、ということにある。これは他にあまり類を見ないきわめて特殊な性格です。が、それが日本だということをわきまえなければ、これからの日本は考えられない。従って今後の日本においては、まずこの社会科学の分野の訂正作業がどうしてもなされなければならないでしょう。それはまことに至難の業ではあるけれども、それをしなければ日本という国は本物にはならないと思うのです。その訂正が行なわれた暁には、例えば経済政策なら経済政策についても、もしそこに間違いがあれば即時に学問のフィールドから訂正のための議論が出て来るということになる。そうなる事が今後の日本にとっては絶対に必要なのです。またもしそこが直らないとすれば、これからの日本はそのような欠点からしてひどい悩みに陥り、政治と経済の絡み合った物凄い難局に当面することになるのではないかと思います。先のことはわからないけれど、このままならそういうことになる筈です。

例えば今の池田政策の失敗、その悪さを世の中の人がほんとうに意識してくれないから、ごまかしの手段、弥縫策で済ましているのです。ただし日本国の運がよければ、そのままなんとはなしになし崩して、どうにかまあまあ安全だというところに行くかもしれません。つまり現在は、馬の背中のようなところを、右にも左にも転ばないで、どうにか歩いて行こうとしてい

る格好ですが、無事に通り抜けるかもしれません。しかし私は、どちらかといえば、途中で何かの事件が起るのではないかと思います。こんな状態のままでおさまるはずはないのですから。創価学会が暴れるというようなこともその一つですね。なにがどう起るかも知れませんが、なにかの事件で日本人はいままでの安易な心持から俄然呼び起されて、とくにそれは政治的な非常な難局だと思いますが、その難局をどう処理するかに当惑する、というときが来るでしょう。

一方においても日本の背後にあるものはいつも世界の関係ですが、世界というものはさっき申した通り、東西関係、対ソ関係はおそらくあまり問題はないが、先進国相互関係と先進国対後進国という関係は大いに変ろうとしている。それに日本がうまく乗っていけるかどうか、もし下手をすれば、日本だけが除け者のようになるでしょう。その場合政治が下手、経済の処理がまずい、理解が間違っているということになれば、その意味でもまた一つの重大な難局を作ることになると思います。そういうのがいまの日本、そこをどう処理して行くかがわれわれの当面している課題です。

(3) 日本における農村問題

以上のお話だけではあまり抽象的なので、今のような観点から経済政策の上でどのような問

題が出て来るのかということを、もう少しお話ししておこうと思います。

あなた方も農村の子弟でおありの方が多いと思いますが、いまの日本では「格差訂正」の問題が重大な関心をもたれています。日本の中における「後進地域」という言葉がありますね、その地域をよくすることによって、その格差をなくしようとする問題は、もうひとつの「社会的格差」すなわち中小企業に働いているものと大企業に働いているものとの生活の差という問題と共に、これからの日本経済のひとつの中心問題となっているわけです。

地域格差の問題は大体農民とそれ以外の者との関係、とみてもいいわけですが、私がそれらに対していま考えている対策をちょっと申しますとこういうことなのです。いま日本では——これも既成概念でお考えになってはだめである一例ですが——農民はどうしたらよくなるかということが色々と論じられています。農林省の政策はいままで一貫して、「専業農家」であるものをよくしよう、そのために一家当りの反別が少ないと思えば反別をふやし、機械化が大事だと思えば機械を与えることにオカネを使い努力する、という方向であった。そういうことでこれまでやって来たのですが、事実はどうなっているかといえば一〇年前でみても日本の農民の収入は、その四割が「兼業収入」なのです。「農業外収入」なのです。いまは六〇%は農業外収入になっているかもしれない。そこまでは行かなくても五〇何%かにはなっているでしょう。農林省が専業農家を育てて行こうとする政策に拘らず、現実はそうなのです。そこからみて農林

省のいままでの政策は間違っていたのだと私は思うのです。

では農村問題の解決はどこにあるか。日本という国は、これが国の小さいおかげなのですが、まず道路という道路は全部舗装したらどうなるか。現にイギリスはそうなのです。新しい「名神国道」あるいは東海道の「自動車専用道路」を作るというのは実は二の次にまわしていい。ああいうことよりもいまあるままでいいから日本全国の道路を「舗装」してしまうとどういうことになるか。そうすればどんな辺鄙な農村でも、最寄りの都会に一時間、というようなことになります。それによって全農村全農民に変化が起るのです。すなわち農民は十分に暇を利用出来るようになる。いまだと雨が降ると非常に時間がかかってしまう。天気の時でも早くは行けない。ところがそれがもし簡易舗装でも何でもいい、舗装された道路になれば、雨が降っても降らないでも同じ時間で行けるようになる。そうなると農民というものは、その時間をなにかに使えるようになる。そこで農民がいままでのようにどんな労力をかけてもいいから増産しようというのをやめて、なるべく労力をかけないで出来るだけの収量をとろうということに切りかえて、なるべく暇を作ろう作ろうとするようになるのがその変化、そうなると農村は救えると思うのです。

その暇はどう使われるか。それは都会の問題と関連してくるわけですが、現在は東京が大きくなりすぎてどうにもしようがない、大阪もいずれそういうようになります。大きすぎてす

ごい無駄があり非能率が起ってくる。今年の冬に東京ではほんとうに昔のような青空の見られたのはただの一日しかない。私はそういうことを始終考えている人間ですから、しょっ中観察しているのですが、一月四日という日だけ昔ながらの青空を東京で見たのです。四日はよく晴れておりました。あとの日は朝には「きょうはいい日だ」と思っていても一〇時、一一時になるとどんよりして来る。排気ガスですね。工場の煙なのですね。一月の四日は何故よかったかといえば、大晦日頃から自動車もあまり通らなくなり、工場も休むし、ビルディングのヒーティングも止まってしまったからです。だから空がきれいになったが、五日になったらもうだめでした。そういう都会というものに住めるのがいい人生なのかと考えざるを得ない。日本では急ぐから、焦るからそういうことになるのです。さっき話したように、急がなくてもいいということになればこういうことも変ってくるはずです。まず第一に、都会では一切煙を出さないということにしたらどうか。日本では煙を出し放題に出して、それで物が安くて出来る、だから輸出できるといって喜んでいる。しかし日本品は必要以上に安いのです。それであまり安すぎるというのでむこうにいつも叩かれて困っている。だからコストはもっと高くなってもいいから煙を一切出さない工場に切りかえたらどうかと思います。そうするためには東京で煙を出したら、ものすごい税金をかければいい。そうすれば煙を出す工場は煙を出さない設備にしてコストが上るか、あるいは東京から出て行くしか方法がない。ところが農村の方は先程述べ

たように、これから農業にはあんまり手間はかけないし、暇で人手を余しているから、その受入れ態勢はすでに出来ているということになる。日本は全体として狭いのですから工場がどこに移ろうともあんまりコストは違わないという有利さを持っているのです。

伊豆に下田というところがありますね。この間から電車がついて、えらい観光ブームになったのですが、その大分前に、舗装はされてはいないけれどバスの通う道が出来たのです。そしたら下田の農民はすぐカーネーションを作り出した。東京へトラックでもっていけば売れるからです。あの不完全な、舗装されていない道路が出来ただけでも、下田という遠隔の地がそういうふうになるのです。私はそれが日本人の有難いところだと思うのです。すぐ敏感に反応するわけです。ですから私は、全国を舗装したら工場は全国的に分散し、農民は出来るだけ暇をつくって、最寄りの工場で働く。しかし工場の方も農業の忙しい時で天気のいい日はいつでも休みをとってもいいというようなことになることが可能だと思う。そうなると農民は農民としての心持は失なわず農民でありながらほかのことをやっている人間になる、それで収入はうんと大きくなる。東京はきれいになる。過度の人口集中は止まる。その結果として農民の収入も他とあまり変らなくなる。それが格差是正です。それで地域格差も直ってしまう。私は随分型破りだけれどもそういう日本を構想しているのです。勿論それにもっていくにはまだまだたくさんのことを論じなければならないけれども、私の考えの輪郭は右のようなものです。

あなた方は御存知かもしれないが、ドイツのエアハルトなどの仲間で、レプケという経済学者がいます。私は八年ほど前にこのような話をゼネバの彼の家でしたことがあります。彼が「日本の農業は土地が狭くて一人当りの反別が小さくてだめだそうだ。一体日本の農業はどうなるのだ」と聞くので、「いや小さいところがいいので、小さいから片手間でやれる。だからみんな農業外収入を得る。農民だか他のことをしている人間だかわからないような人間になってくる」と話したのです。するとあのレプケという大学者はすっかり喜んで立ち上って私と握手して、「メイ　ゴッド　プリザーブ　ジャパニーズ　ファーマーズ」(神よ、日本の農民を温存しまたえ)と言ったのです。なぜ彼がそれほど感謝したかというと、そういうのが人間としての生き方としていいのだという彼の信念的な哲学があるからです。

最近の人間は、たとえば薬を飲まなければ寝られないとか、いつもジャズが聞えていなければ勉強出来ないとか――いわゆるながら族ですね――静かなところに一人座っていると淋しいとか、そういう人間になってきた。これはみんな文明病ですけれども、これを一口で言えば人間が人間らしくなくなって、機械の一部分になったということです。私は人間はオールラウンドな人間に還らなければいけないと思うのですが、はしなくも日本という国は土地が小さいからわけなくそうなれそうです。アメリカの農民というのは悲しいかな土地が大きすぎてただ機械を動かすだけの人間になっている。土には触っていないのです。トラクターを動かしているの

だから、彼は機械労働者になってしまっている。そういう一面的な人間です。一面的人間といえば都会に住んで毎日自動車を運転しているとか、どこかの工場で働いているとか、オフィスで帳面つけばかりやっているというのはみんなそうなのですが、現代における人間の課題はそういう一面的な人間ではなく、多面的な人間に還るということではないでしょうか。そういうことをレプケは見とおしているから、私の言ったことが、すぐにその解決に結びつくことを悟って、そのように喜んでくれたのです。

現に日本の農業を調べてみると五反以下の人の方が生活はいいのです。二町以上もっている人もかなりいい。その間の人がいま一番悪いのです。そういうことが日本の情況です。この規模の小ささということ、その中に今までの既成概念では理解出来ない救いがある。ほかの国ではスイスなどにそういう傾向はありますが、ほかにはあまりないのです。

一体ものは何でも小さいほうがいいのかも知れないのです。これは夜久先生に伺ったほうがいいのかも知れませんが、大きなことでなければ感激しない心に比べれば、小さなことにでも敏感に、すなおに感激する心の方が偉いのかも知れませんね。勿論小さなことしかわからないようではだめでしょうけれども。以上が私の考えている日本の未来図の一部です。

講師略歴

東大法学部独法科を卒業。横浜正金銀行に入り上海、ハンブルグ、ロンドン等において勤務、戦後大蔵省に移って終戦連絡部長の要職にあった。昭和二十四年「外国為替管理委員会」創設にあたり、その委員長となる。現在世界経済調査会理事長。著書に「綜合経済政策の提案」（日本経済復興協会）「国の個性」（文芸春秋社）「世界の見方」（論争社）などがあり、現在月刊「経済論壇」に「国策を考える」を連載中。なおグループ研究により世界経済調査会の名によつて出版されているものには「後進国開発の研究」等多数のものがある。

合宿教室における短歌創作

短歌の哲学と技術

夜久正雄

一、はじめに―日本古来の詩と政治との関連

二、短歌の原則

一首一文ということ・俳句との相違…自己の体験をよむこと・理屈をよんではいけない…題材と用語とについて…結び・深い感動をよめ

三、短歌創作の意味

経験の意味すなわち生き甲斐の把握・その芸術性…短歌と国民同胞感・その倫理性…永久生命への没入・その宗教性

四、質疑応答

字あまりについて…感情の直接的表現と客観的描写について…各句間の連絡構成について…結論を冒頭に出すことについて

五、補足

秀吉の歌と家康の歌…連作短歌について

六、鑑賞

正岡子規「しひて筆をとりて」…黒上正一郎「手紙のはしに」

一、はじめに　――日本古来の詩と政治との関連

「短歌の哲学と技術」と題してお話をするわけですが、この「短歌の哲学」というのは、要するに、短歌というものは一体どういう存在意義をもっているかということ、「技術」というのは作り方ということです。ですから、「短歌の哲学と技術」というのは、別の言葉でいえば、「短歌創作の意味と作り方」ということになります。

今年の合宿ではみなさんは短歌を作ることになっています。この合宿で短歌の創作が取り上げられたということは、非常に意味のあることだと思います。この際みなさんに是非とも日本における短歌の位置というものを、歴史的に、事実に基づいて、考えてみていただきたいと思います。今日はまずそのことについて少しばかり私の考えを述べ、ついで本論にはいっていきたいと思います。

私は日本の歴史というものをずっと振り返ってみまして、最近のことですが、ある一つのことに気がついたのです、それは日本の歴史の中のさまざまな政治的支配的グループ、これはいろいろなグループがあったわけですが、その中で歌を全然つくらなかったのは一体誰かと考えてみたのです。藤原氏や足利氏というのにはずいぶんひどい人もいますが、代々歌を作っています。又皆さんは戦国の武将というのはろくな歌を作っていないだろうというようにお考えに

なっていらっしゃるでしょうが、あとでよく説明するつもりですが、たとえば豊臣秀吉や上杉謙信などという人は当代第一級の歌を詠んだと、戦国時代の和歌を研究した川田順という歌人が折紙をつけております。（川田順著「戦国時代和歌集」）それらの武将たちはいわゆる歌人といわれる人ではありません。しかし実生活者でありながら、しかも第一級の歌をよんでいたということが大事なのです。そのように考えてみたときに、日本の古くからの政治的グループの中で歌をよまなかったというのはほとんどないといってもいいでしょう。ただ北条氏の初期の人にだけは歌がないのです。もっともその中で北条泰時はそれほど多くはないのですが歌をつくっています。ただここで考えておかなければいけないことは、北条泰時が歌を作ったということは実は源実朝の影響と考えられるということです。源実朝を殺してしまった北条氏も、その実朝の悲劇というものを契機として、歌という伝統的教養の中に自分の身を入れるようになったということは大切なことではないかと思います。徳川将軍にもほとんど歌人らしい歌人はないのではないかと思いますが、まだよく調べていません。現代の経営者の模範にするという徳川家康の歌は、川田順さんの研究によりますと、少し残っているようですが、ひどい歌です。しかしあることはあります。三代将軍家光にいい歌があるそうですがまだ見ていません。その後の将軍に歌があるということは聞きませんがどうでしょう。ともかくこのように考えてくると、日本の古くからの政治グループのほとんど大部分に歌があったといえましょう。北条

氏のように歌人将軍を殺してその影響を受けるとか、家康のように秀吉に強要されて歌を作ったように見られる武将や、徳川将軍のような人もありますが、歌をつくる教養は連続しているように見られます。

ところが明治以降、特に明治憲法が出来てから以降になると、伊藤博文をはじめ政治的支配グループ――つまり歴代内閣の閣僚にはほとんど歌がないのです。しかし明治憲法が出来る前まで、日本の政治というものを担当し、政治の主要な軸になっておった人、いわゆる明治の元勲には歌があります。例えば西郷南州にも歌がありますし、木戸孝允も歌をつくっている。特に明治の元勲という場合には三条実美と岩倉具視をあげるのが一番穏当ですが、その二人とも数多くの歌を作っているのです。しかしそれ以降の政治家は歌をよまないようになってしまった。もちろん例外はあります。山県有朋とか尾崎咢堂などがいます。しかし山県有朋はいわば明治の元勲ですから別に考えるべきでしょう。尾崎咢堂に歌のあることは不思議に思えますが、彼の在野精神とつながりがありそうです。全体としてみて明治以降の政治家にはそれ以前の政治家に必須であった「短歌」という教養は失われたとみることができます。その理由は、「帝国憲法」が出来たあと日本の政治的支配層を形成した人々のあり方と重大な関連があると思われます。すなわちそれ以後政治的な指導者の資格として要求されたのは帝国憲法についての知識でしょう。更に憲法が細かくわかれて諸般の法律になるのですから、その法律について

の知識をもっている人々、更に自然科学についての知識をもっている人々、その源流は西洋文化にありますから外国語に堪能な人々、こういう人々が日本の政治的支配層を形成するようになったと思います。このような人々に、殊に政治家に歌がなかったということは非常に重要な事実であって、つまりそれまでの伝統的な日本の教養というものが失われてきたということが言えるのです。その教養というのは、結局、詩と政治との合一、すなわち詩心と政治との調和、もしくは統一をめざしたものであったのです。ギリシャに「哲人政治」という言葉がありますけれども、それに対して日本の政治の理想というものは「詩人政治」といったらいいかと思います。そういう伝統的な政治理想というものとは違った政治が、明治以降に展開することになったのです。ここで明治天皇が歌をよみつづけられたということの意味や歌人政治家ともいうべき三条実美ほかの人物の悲劇性などについて詳しくお話したいと思いますが、時間がありませんので省略いたします。

ただしかし以上のようなことを大ざっぱに考えてみただけでもここの合宿で、これからみんなで歌を作ってみようとしていることが、いま言った長い歴史の事実の上で、大きくいえば一つの画期的なできことであることが予感されると思います。これがあるいは、今日福田先生がいろいろとお話になりました近代日本の混乱というものに対して、なにか光明を投ずることがありうるかも知れない、そういう可能性を含んでいるというように私は考えます。

私のような多少国文学などをやって、そして歌を研究するというようなことを職業としているものが、歌を作るということはあたりまえなことなので、大げさに言わなくてもいいわけですが、そうではなしに、実際に近代日本の政治的経済的の実生活の波乱の中で日本の運命を切り拓いてゆく、そういう人々が歌を詠むということは、これは非常に重要なことであって、日本人がほんとうに日本の心に帰り、しかも未来に向って進んでゆく道を示すのではないだろうかというふうに考えます。これが短歌をこの合宿で創作するということの歴史的な背景ですから、一つ大いに心をこめて歌をお作りになつていただきたいと思います。

二、短歌の原則

(1) 一首一文ということ ― 俳句との相違

歌をつくるには一体歌というものはどういうものかということを、あらかじめ知っていなければならないのですけれども、その短歌の原則というものを簡単に説明します。

短歌が五七五七七という韻律によってつくられること、それから言葉は日本語を使うことぐらいは誰でも知っているでしょう。だが五七五七七で、日本語であれば歌になるかというと、決してそうではない。では一体どういうのが歌になるかということ、それが大切です。

私は短歌の原則として第一に「一首一文」であるということをあげなければならないと思います。このことは世間ではあまり言われていないのですが、一首が二つに分かれるということをなるべく避けるという原則があるのです。たとえば柿本人麻呂に有名な

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

という歌があります。万葉集にある有名な歌で、高等学校の教科書などには必ず出ておりますが、この歌を二つに切断して「東の野にかぎろひの立つみゆる」と切って、「かへりみすれば月をたぶきぬ」こういうふうにしてしまうとこれは歌にはならないのです。

ところが俳句は二つに分けるという原則をもっているのです。だから俳句のほうは「二句一章」（大須賀乙字の俳論による）というように言います。もっとも必ずしも二句である必要はないのですが、ともかくそれが原則になっているわけです。前の人麻呂の短歌と似た俳句で、江戸時代の蕪村という非常に多能な俳人が作った句があります。これも有名です。

菜の花や月は東に日は西に

という句ですが、これは「菜の花や」で切ってあるのです。それから「月は東に日は西に」というのが一つの情景です。月が東のほうから出て来て日は西のほうにはいってゆくという天空の情景、そして地上には菜の花が一ぱい咲いている、その二つの間に緊張関係を感じるのです。菜の花というきわめて民衆的な、家々の近くに作ってある花、油を採るためというそうい

う生活に卑近な菜の花というものと、それから天界の広大な夕べの景色というものが二つ別々に提示されている。その二つのものを当然作者はその精神において一つのものに統一しているわけですから、読むものもその菜の花とその天空の対照というものに微妙な味わいを感じるわけです。従って俳句をつくる場合には、なにか違ったちょっと突飛なものを二つくっつけて、それに季題を加えれば下手な俳句は出来るのです。しかしその場合二つのものが内容的に同じ系列の観念を表わすのであればだめなのです。たとえば「汗が出た、暑い暑いとあおいでいる」というような、そういう同じものをくっつけてもだめなのです。その二つが離れているという場合に、それが俳句になるのです。つまりその間に緊張関係が出てくるのです。

ところが短歌ではそういうことはあり得ないのです。先にも述べたように短歌は一首一文を原則とします。ということは短歌の場合にはことばのつづき全体に作者の精神というものが行きわたるわけなのです。はじめから終りまで一貫した精神が流れている、これを「調べ」というわけですが、一首一文ということはその調子が一首全体に行きわたるということにもなるわけです。だからこの人麿の歌も

「東の野にかぎろひの立つみえてかへりみすれば……」

と一貫して流れてゆくので、「て」というところで切ってはいけないのです。すなわち東のほうの野にかぎろひの立つのが見えて、ふとふりかえってみると西の方には月が傾いたという、

これは冬の情景です。暁の非常に寒い冬の雪の降った情景を言っているので、その中における人麿の行為をそのまま言葉にあらわしたところに人麿の思想、生活感情というものが生き生きと現われているのです。そうしてそれが千何百年後の今日のわれわれの心にも、さながら人麿が生きておったときに感じたであろう如くに迫ってくるのです。

われわれは自分の感情の波というものを言葉の調子に現わそうとして言葉を選択するわけです。そして、その感情の波と言葉の調子とが完全に一つになったときにわれわれは「表現が出来た」というように考えることが出来るわけです。これが形態の上での短歌の原則であります。

とはいえ一首一文というのはあくまで原則であって、一首三文になったってかまわないし、もっと分れてもかまいません。それぞれ非常にいい歌があるわけですからかまわないけれども、原則は一首一文であって、その言葉の調子にわれわれはわれわれの感情を現わしていくということ、これが形態上の第一原則だと思います。

山上憶良（やまのえのおくら）の「憶良らはいまはまからむ子泣くらむそのかの母も吾を待つらむぞ」など一首三文の名歌ですが、初心のものはまねてもむだです。

(2) 自己の体験をよむこと ―― 理屈をよんではいけない

次に内容に関してまず大切なことは自分の体験を歌うということです。自分の感情を歌うということです。これは今さらいうまでもないことだとは思いますが確認しておく必要があります。あるところで、私が多少歌をやっていることを知ったある学生が、私に「歌を見てくれ」というのです。その歌を見てみるとなにか女の人が男の人に恋をしているような歌なのです。ところが見てくれというのは男の学生なのです。それだから「これは誰の歌なの？」と言ったら「私の歌です」というのです。いよいよ変だと思って「しかしちょっとおかしいのではないの」と言ったら、それは、自分の相手の女性が自分を思っているであろうという、こうも思っているであろうという歌だ、というのです。ずい分ずうずうしい話ですね。私はあっけにとられて、批評も何も出来ませんでした。そういうのは短歌ではないと思います。

もちろんほかの文学ではそういうことは許されるわけです。劇の中なんかではどうだってかまわない、ほかの文学であれば別ですけれど、短歌はそれは出来ないのです。出来ないというよりすべきではないと思うのです。それをすれば短歌の本筋を逸脱するというふうに考えていと思います。しかし短歌の有力な作家で「誰々に代りて想ひをのぶ」という歌をよむ時がある。万葉集などもす大分そんなのがあります。このような歌についてはどう考えてゆけばいいか、私は次のように思います。

例えば大伴家持（おおとものやかもち）が「防人（さきもり）の心になりて想ひをのぶ」という歌をつくっています。防人とい

うのは御存じのように天智天皇の時以来、関東から筑紫（つくし）の太宰府のあたりに、いまでいえば戦前の徴兵制度のようなものによって、若い壮丁がやって来て国境警備についたわけです。その人たちが歌を作っている。その歌が非常に有名な歌になって今日残っているのです。その防人の気持になって家持は歌をよんだのです。しかし家持の歌は防人の歌にはかなわないのです。家持というような万葉集の末期の作家としては第一と目されている人が、いくら防人の気持になって歌をよんでもほんとうの防人の歌にはかなわない。これは非常に大切なことだと思います。結局家持の試みは短歌というものから、ほかの小説などという文学への過渡的なものとして理解すべきであって、歌としての本来のあり方であるとはいえないわけです。すなわち歌というものは、あくまでも自分の感情を述べるところにある。これが歌における第二の原則です。

次に右のことと関連しますが、歌には理屈をよんではいけないということを言っておきたいと思います。今日も午前中福田先生の御話の中で、いわゆる言葉というものはみんな主観的なものであるということを言われておりました。このことは短歌においては特に注意しておかなければいけないので、いわゆる客観的に自分の感情とは別なものをよんでは、それは歌にはならないのです。正岡子規はそれを「理屈を詠むな」という言葉で言っておるのです。そこにい

われる「理屈」というのは自分を離れたところの一つの概念なのです。たとえば「民主主義とは多数決原理に基づくものである」などということを言ってもそれは歌にはならない。五七五七七にすることはわけもないでしょうが、それは歌とは言えないのです。

しかしそういうと、それでは自分の思想というもの、人生観というものは歌にならないかと言う疑問をもたれる方がおられるかもわかりませんが、それはちがうのです。人生観というものが、生き生きとその人に感ぜられる場合には、それはいくらでも歌になるのです。私がいいたいのは、頭の中で、つまり理知的に考えられておるものは歌にはならない、そういうものは道歌などというように呼ばれて排撃されております。すべて自分の個性的な感情をわれわれは歌によむのであります。

(3) 題材と用語とについて

それから素材、すなわちなにを一体歌によむかということですが、これは何でもかまわないわけです。今言ったように思想だって歌になるわけですし、恋愛でも民族的感情でも、失敗も成功も、喜びも悲しみもすべてよむことが出来る。ただ大切なことは出来るだけ生き生きと、大胆に、なるべく現実的に詠むということです。

次に言葉ですが、すなわちどんな言葉を使うかということですが、われわれにとって一番直

接の言葉は口語ですから、したがってこういうふうに話しておる日常語というものをそのまま使って歌を作ったらいいではないか、それが最も現実的ではないかという考えが成り立つわけです。そういう立場から口語短歌というものを作る人もいるわけです。こういう考え方からすれば、韻律もじゃまだからいわゆる口語自由詩というものが一番いいというのでそれを実行している人もあります。しかしこの口語自由詩というのは実際にやってみますと、なかなかうまくいかないのですね。それはなぜかと言えば、日常語というものは、切実な体験というものを完全に現わすには足りないからです。

ほんとうにわれわれが歌にしたいと思うのは切実な感動です。すなわち普通の言葉にはならないような深い感動を表現しようとするのです。したがってそのような非常に深い感動というものを日常の口語でよめばその感動が薄っぺらなものになってしまうのです。

例えば人が死んだ時に悔みの挨拶に行くときにはいうべき言葉はなにもないのです。だから私たちはその言葉を前もってきめておくのです。「ご愁傷さまでございました」とかなんとかいう言葉を決めておいてただ頭を下げて来るわけです。どんなに相手が悲しんでいるかということをほんとうに考えてなにか言おうとすれば、結局は言葉にならない。したがってそれを形式的に決めておくのです。日常の会話というものはなかなか真実の感動を完全に表現出来ない。だからといってあんまり日常的な言葉を避けようとして、いわゆる万葉語かなにかで、ち

よっと外を見ても「はろばろにみさけつるかも」とかいう言葉を使ったりすると、これはまたアナクロニズム（時代錯誤）で全く始末の悪いものになってしまう。案外有名な歌の中にもそういうのがあるのです。

結局出来るだけ日常語に近く、しかも日常語の浅薄性に陥らないようによむことが大切です。だからなるべく現代語に近い言葉を使っていいのですけれども、あんまり卑俗な言葉ではいけない。それが用語についての原則だという程度のことで歌をお作りになってみたらいいだろうと思います。

(4) 結び——深い感動をよめ

結局一ばん大切なことは感動の深いことを詠むべきだということです。もちろんそれは現在の感じというものに限定する必要はありません。自分がかって経験したことで深い感動をおぼえたことでもいいわけです。もっともその感動が完全に消え去っているものはだめですが、どんなに遠い昔のことでもそのときの気持が直接に蘇る、いまそのときのことを思うと自分の心は非常に感動するということならそれは立派に歌になるわけです。とにかく感動が薄いとだめなのです。しかしそんなことを言っておれば自分の経験は全部歌によむ資格がないということになると困るのであんまり強くは言えませんが、ともかく自分の一生で強い感動をもって経験し

たことを歌に歌っていただきたいと思います。以上が歌の作り方の原則です。

三、短歌創作の意味

(1) 経験の意味すなわち生き甲斐の把握——その芸術性

それではそういう形で歌を詠むということは一体われわれの人生経験として、どういう意味をもって来るかということですが、これは実際よんでみなければわからないのです。ただ私は私なりに長いこと歌をつくってきた経験に基づいてお話してみたいと思います。もちろんこれは私が自分の経験を分析して話をするのですから、これは間違っているかも知れません。あるいは諸君がいまから三十年ほど歌を作ってゆかれたら、ぼくとは全然違った考え方になるかも知れない、いくらでもそういうことはありうるわけです。

まず第一に、歌は自分の感情の表現だと申しましたが、それが一体どういう意味をもっているかと言えば、それは人生の経験の意味というものをわれわれ自身が把握するということだと思います。すなわち非常な感動を受けたときに、それをわれわれが言葉に表現するということは、その感動というものをもう一度自分自身で味わうことになるのです。しかもその味わうというのも、ただ感傷に溺れてはいけないので、それをはっきり言葉に現わすという形でなされる。すなわちこの経験の意味をわれわれがもう一度言葉に表現するようにつとめることによっ

て定着させてゆくわけなのです。ここのところの言い方が非常に難しいのですが、これが歌をつくる意義の中で一番大切なことだと思います。

だから「歌わざる歌人」ということばがありますが、実際にはそういう歌人はいないのです。歌わなければ歌人ではないのです。言葉に自分の感情を表現することによってはじめて、その経験の意味というものが自分にわかるわけなのです。すなわち歌をつくるということは日常一般の行為の世界とはちょっと違うのです。行為そのものではなく行為の意味をわれわれが感じとるということなのです。したがって歌をよむのは、われわれが生き甲斐というものを求める、その生き甲斐のひとつの把握の仕方だといってもいいかと思います。この点で短歌は芸術であり文学です。

(2) 短歌と国民同胞感——その倫理性

次に短歌というものはその性質として、誰が短歌を詠んだからこの短歌は非常にうまいのだとか、先生が詠んだからうまいのだとか、年の若いものが詠んだからこれはだめだとか、そういうようなことは歌の世界ではあってはいけないのです。歌というものは、つねに平等の原則に立っておるものなのです。だからここでたくさんの人が歌を作ったその歌の中から、もう何十年も歌をやっておるわれわれよりもはるかにいい歌が現われる可能性があるのです。歌とい

うものは本来そういうものなのです。さきほどもちょっと例をあげましたが、大伴家持の歌よりも名もない防人の歌のほうがいいということがありうるわけです。日本の長い歌の歴史をみてくると、有名な人の歌よりも、名もない人の歌の方がはるかに真実がこもっていて、永遠の光を放っているというようなことはいくらでもあるわけです。歌というものはそういう平等の原則に立っているということをよく考えていただきたいと思うのです。従って歌というものは、極端に言えば思想、イデオロギーの相違というものを超越する性格をもっているのです。ぼくはマルキストというのは好きませんが、マルキストの歌の中にでも感心するものもあるわけです。しかし実際にはこういう場合は非常に少ない。それはなぜかと言えば、マルキストというものは必ずその歌の中でプロレタリア的意識を詠まなければいけないというふうに考えている。ある固定観念によって価値の判断をする——つまり平等の立場を否定しているわけですから、したがってその歌が面白くないものになるのです。しかしそういう意識がなければ、イデオロギーが違っていても、その人の真実の感激の表白というものは必ず人の心を打つものがあるわけです。そういうわけで短歌というものは平等の原則に立っているということがはっきり言えると思います。

その短歌における平等の原則ということが、日本の昔からの国民生活の心の連帯性というものを今日まで維持してきた一番大きな力になっているのではないだろうか、私はそういうよう

に思います。つまり私が歌によんでその歌を人に見てもらう、その人がその歌をよんで私がどういう社会的地位にあるかなどということとは別に、私自身の人間的な本性というものを聞いてくれる。私自身もあの人が誰だとか、その人が自分とどういう利害関係にあるかとかいうこととは別に、その人の心情の表現というものを歌によって味わうことが出来るのです。先程の福田先生のお言葉を借りれば、それは日本人のつきあいの道でしょう。日本人がお互に、お互の心持というものを尊重し合っていくという一番基本的なものをこの短歌というものが実現していると思うのです。

したがってその短歌の教養というものがなくなってくると、人間関係はそういうお互にお互の気持を尊重するという世界から逸脱して、人間関係は支配と被支配という権力関係によって規制されるようになる。あいつが自分を支配するか、また自分が生きるためにはあいつを支配しなければならないということになるのです。したがって冒頭に述べましたように現代の政治家の教養から短歌というものがなくなってしまったということは、日本の政治というものを支配と被支配という二つの非常な冷酷な関係によって分断する結果を招来することになるのではないか、と考えられるわけです。

ただ日本語というものは健在ですから、短歌でなくてもほかのいろいろな形で心の交流が行なわれることはありますけれども、短歌というものが最も有効に国民平等の原則を維持しうる

ように思われます。ほかの小説だとか俳句だとか、それから劇だとかいうものは技術を要するでしょう。相当の技術を要するから誰でも出来るというわけにはいかないのです。はじめて書いた素人の劇が世界一流の傑作になるなどということはちよつと考えられない。長いこと修練を重ねてきた者は、ごく初歩的な技術のものよりもなんと言つてもいいものが書けるわけです。だからそこには一つの序列というものがありうるけれども、歌はそうではない。そこには根本的に何らの差別がないわけです。したがつて政治家が歌をよむということは、一般に国民生活の支配的地位とみられている政治家が、国民的同胞感を修得するということで、これが政治を支配と被支配という関係から救つて国民生活を調和させる方向にみちびくのです。将来国民生活の指導的地位につく大学生にとつて短歌の教養が必要であるのはこの意味からです。

最後に、歌は五七五七七という形式で大体日本語でよまれる。ただあまり卑近な日常語というものによつては表現しないということを申しあげましたが、このことは歌に表現するということが、われわれの感情を日常語をこえた一つの長い歴史と、方言の範囲をこえる広い同胞——空間的時間的のひろがりにおいて日本語を使うすべての人々の間という広い世界につないでいくということになると思います。一定の地方とか一党一派の利害とかある時代のみに通ずるというのでなく、日本国民のひろく長い範囲全体に通ずることになるわけです。ここに短歌創作のよろこびの源泉があるのです。

五七五七七ということは一つの形式ですから、これは確実に存在しているものなのです。その形式にどういう内容をもりこむかということは別ですけれども、この一首一文、五七五七七というものは一つの形として存在しているのです。それに対してわれわれはそれぞれ自分の感情を述べていく、すなわちわれわれのきわめて自由奔放に動く感情というものを一つの秩序ある形式の中に述べていくわけです。それはわれわれ個人というもの、あるいは個性というものと、社会というもの、団体というものとの関係を、短歌という一つの形式によって味わう、或は秩序立てていくことになると思います。すなわち短歌の世界の中で、個人と社会との関連を具体的に実践するわけなのです。しかも歌は素材が自由で、体験をとり上げるということについても自由であって、一方、その形式は歴史的に永続性を持っております。したがって短歌の創作は人間の自由と秩序との問題に対する一つの修練になるとも考えられます。個性のない類型的な短歌は理智主義や形式主義の人生観の表現でしょう。逆の、形式無視の自由律短歌は伝統無視の革命主義に通じるようです。

短歌は一面この個人の社会におけるあり方というものを具体的実践的に修練するわけで、自由と秩序とが調和を得た場合が短歌として最高のものとなるわけです。

(3) 永久生命への没入——その宗教性

さて、いまから千数百年前の人麻呂などという有名な歌人の歌をよんで感激するのは別とし

て――防人というような、そういう無名の人の歌をよんでも今日のわれわれが感激しうるということは、これはおそらく世界の歴史の中で他には見られないことだろうと思います。千何百年前のわれわれと同じような、たいして有名でない人の歌というものが千年も経って残されていて、われわれがそれを感激をもって味わうことができるということ、そういう国民生活というものは全く類のないことだと言えましょう。それは他方から言えば、われわれが今日詠む歌も、千年ぐらい後になって後世の人がよんでくれる可能性があるということです。もしそうでないならば、ただぼくらがそれに及ばなかったというだけで、われわれが今日詠む歌の中の一首が千年の星霜に耐えぬいていくことができる可能性がある。それを思えば人生の中でこれほど可能性のあることはないだろうと思うわけです。事業も富も、一切が埋没していきます。しかしわれわれの生きた言葉というものは長く残っていく、つまりわれわれの生命というものが非常に長く残っていくというような――全部がそうなるわけではないけれども、その可能性があるということは、これは人生のまことの楽慶（ぎょうけい）であるということを私は痛感するわけです。

以上の三点、すなわち㈠短歌が体験の表現であるという点、㈡同胞的感動の味識である点、それから㈢短歌の創作というものが一つの永久の生命へわれわれの身を献げることになるという点、ほかにもいろいろあるでしょうが、特にこの三点が和歌創作の重大な意義である

というふうに私は感じるわけです。これで前半の講義を終ります。

四、質疑応答

(1) 字あまりについて

（問） 和歌において字あまりというものがありますが、あれはどういう場合に許されるのでしょうか。

（答） 和歌における字あまりというのは、たとえば七字（七音）で終ればいいのにどうしても八字（八音）になるというように、いわば必然性がある場合には許されるのです。例えば子規が源実朝の名歌として指摘した

ものいはぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子をおもふ

という歌など読んでいて別に不自然にも感じないでしょう。しかし最後の二句は「あはれなるかなや」というので八音、「親の子をおもふ」で八音なのです。すなわち七七であるべきものが八八になった典型的な字あまりですが、それが非常に感動がこもっているので、最後が非常にゆったりと荘重に感ぜられるという効果を生んでいるわけです。だから例えば七七と調子をととのえるために「かなや」の「や」をとったり、「思ふ」を「もふ」と読ませて「あはれなるかな親の子をもふ」などとしてしまうと最後の句は大分違ってくるでしょう。それだけの違

いがあるわけで、その違いというものは許されるというだけではなしに、それは字あまりだからかえっていいのです。字あまりにしないではおられない程の深い感動がこめられているのです。ついでにちょっとつけ加えますが、字足らずは大体だめです。字足らずの場合はやはり少し無理をしても字を詰めないといけない。短歌にはよむことがあまるぐらいな感動が入らなければいけないのです。よまなくてもいいようなことを無理によんだりするから字足らずになるわけです。それからいつも音数ばかり数えて神経質になることもよくない。思い切って大胆によめばいい、そのあとで少しずつ直していけばいいわけでしょう。

(2) 感情の直接表現と客観的描写について

(問) 感情を直接によんでゆくということ、すなわち嬉しいとか悲しいという言葉を使うということを避けて、感情が自然に察せられるようによむべきだということをよく言われますが、いかがでしょうか。

(答) 私はどっちでもいいのではないかと思います。はじめのうちは嬉しいとか悲しいとかを言っておいたほうがいいのではないですか。はっきりわかるから。(笑)大体進歩してくると直接的な言葉を使わないようになるということは一応はいえるかもしれませんが、だからといって「嬉しいとか悲しいとかいうことを言わないほうがいいそうだ」ということになると困るので

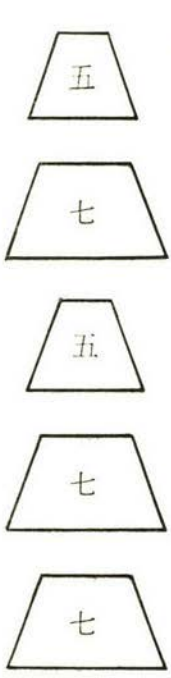
す。そんなことにはあまり心を煩わせなくて嬉しかったら嬉しいでいいと思います。「嬉しい」というのでもずい分いい歌がたくさんありますよ。

(3) 各句間の連絡構成について

（問） 漢詩には起承転結ということがありますが、和歌では五七五七七の各句の間にはどういうつながりがあるのでしょうか。

（答） 和歌は一つ一つの句がそんなに切れないし、切れては困るのですから、なるべく上からずっと詠んでいくのがいいと思います。結果的に見てそれが起承転結という風になってもいいし、そうでなくてもいいわけです。

大体短歌のリズムの五七五七七というのは、ぼくはこんな恰好で書くのがいいのではないかと思うのです。



これはよく見ると日本の塔の形をなしております。ちょっと話が脱線しますけれども薬師寺

の塔というのは短歌のリズムと同じようなものではないかというように私は思っているのです。五七五七七というのは大体こういう形でいくわけですから、上からぐっと流れてきて下の方がどっしりとしている形なのです。先ほど例にあげた「ものいはぬよものけだもの」という実朝の歌も、一番下が非常に強くなっている形です。そういうわけで短歌の場合下のほうが軽くなってしまうとまずいのです。

(4) 結論を冒頭に出すことについて

(問)　短歌の場合、結論を前に出してそのあとのほうでその内容を歌うというのがありますが、それはどういう効果を生むのでしょうか。

(答)　それはたとえば一番最初に「あなうれし……」というような恰好になるとその非常に嬉しいという感動が最初に出て、そのあとでこれを説明していくわけです。

あなあはれ見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづぬる

これも実朝の歌ですが、「あなあはれ」というのは全体の直接的な感動ですね。実朝の時代は鎌倉が非常な戦乱の巷になったのですからいたましい孤児が数多くいたわけでしょう。その孤児が道のほとりに立って母を求めて泣いていたところへ実朝が通りかかって「どうしたのか」と聞いたところがそばの人が「父母なむみまかりにき」と答えた、と詞書にあります。それを聞

いて実朝はこういう歌を詠んだというのです。それで「あなあはれ」、その一番最初にそれを聞いたときに実朝の心にはじつにかわいそうだ、なんとも言いようがないという感動が生れて来たのでその感動を「あなあはれ」というふうに概括して表現したわけです。それから「見るに涙もとどまらず」ということになるわけです。そのあとに「親もなき子の母をたづぬる」とつづいてゆく。これは感情のほうを先に述べてそして自分の感情から溢れた行為を述べ、それが何によって生じたかということを説明したような恰好になっております。こういうふうにも述べられるし逆にも述べられるのです。「親もなき子の母をたずねるのを見ると、自分の涙がとどまらない、実にあはれなものである」即ち事実というもの、客観的な表現から出発して最後に自分の感情でそれを結ぶという形なのですが、どちらでもかまわないのです。結局なにも規則はないわけです。したがって作歌上の技術というよりも、その人の切実な体験がどれほど切実に読まれているかという方が価値をもって来るということに充分心をとめていただきたいと思います。

五、補　足

(1)　秀吉の歌と家康の歌

それでは質問はまたあとで伺うことにしてもう少し先程の話の補足をさせていただきたいと

思います。

その一つは、さきほどもちょっとふれました秀吉の歌と家康の歌の比較について少しばかり申し上げます。秀吉の歌というのはたくさんあるのでなかなかいい歌なのです。その中でここでとりあげるのは天正十六年四月、秀吉が聚楽第に後陽成天皇の行幸を仰いだときの歌です。秀吉はそこで戦国の武将たちをみんな集めて天皇に対する忠誠を誓わせるのですが、そのとき秀吉はみんなに歌をよませるのです。これにはおそらくみんなずいぶん困っただろうと思います。福島正則とか加藤清正とかいう豪傑が大ぜいいるわけで、さぞかし困って、中には代作でごまかした連中もいたかもしれない、それは別として、その時秀吉は次のような歌をよんだ。これは秀吉の歌としては特別いい歌ではないのですが。

万代の君がみゆきになれなれむ緑木高き軒の玉松

そこに松があって、松を題にしてみんなに詠ませたらしいのです。万代にわたって天皇の行幸を感謝しつづけることだろう、緑木高きこの聚楽第の美しい松が、ということです。それほどいい歌とは言えないけれどもしかしまあ素朴な感動がよく現われているでしょう。

それに対して家康の歌は

緑立つ松の葉毎にこの君の千とせの数をちぎりてぞみる

この歌も別に語法の上での誤りがあるわけではありませんし、いまの相当学問のある人でも

この程度の歌でさえ出来ないだろうと思えるほどの作です。「緑立つ」というのは緑の色をしているという意味ですから、この歌は緑色に生えている松の葉一葉毎に「この君」つまり天皇の「千とせ」の数をちぎる、約束するというわけです。すなわち後陽成天皇が、この松の葉がしげっているように、千年でも生きていていただきたい、こういう意味です。松の葉の一本一本を見るたびに、それが天皇の千年の齢を約束しているように見える、そのように祝いの心をもって松の一葉一葉を見るというのです。しかしこんなことは嘘です。松というのは、ここにもありますが、こうしてみておれば一本一本の葉を見るなどということはあり得ない。その嘘は家康の忠誠心のあり方にもつながってくるわけです。すなわちほんとうは、腹の中では別に忠誠心というものはないのだけれども、しかし忠誠心があるように詠んでいるわけです。これがいけないのです。それが一つの観念でしょう。「忠誠心というものはこれこれこういうものである」ということを決めておいて、自分の心とは別にそういうことを詠むわけですから、そんなことでは、今まで繰り返し申し上げました通り、歌にはならないのです。家康の歌は「理屈だ」ということになります。これが秀吉と家康の人柄の違いです。秀吉の方は率直ですが家康のほうはこういうように細かく計算している。これではとても秀吉は家康にはかなわない——かもしれない。少くとも政治的にはどうしても家康の方が強いだろうと思います。しかしそのために日本は江戸時代三〇〇年、いい面もありましたけれども、むしろ非常な苦しみというものを

味わって来たし、さらに明治維新の近代化に際して、立ちおくれたために非常な苦悶を経験することになったわけです。それはなぜかといえば、家康が自分の身の安全、あるいは自分の子孫の安全ということだけを考えて、国民全体の発展の方を軽くみた、つまり自分の生涯を、秀吉のように国家の発展そのものの中に投げ出すような心持がなかったからだろうと思うのです。このことが家康の歌の中にはっきり現われていると思います。このことはもう一つの家康の歌によくあらわれています。

のぼるとも雲に宿らじ夕ひばりつひには草の枕もやせむ

というのがあります。これは夕ひばりがのぼってゆく、しかしあれはきっと雲の中に宿るのではあるまい、必ず最後には降りて来て草の枕をするだろうというのです。ひばりは空で心持よく鳴いているのに、「あれは必らず下に降りて来て草の枕をするほかにはないだろう」という。これはそのとおりです。しかしそれでは歌にはならないのですね。つまらない理屈を述べているにすぎない、それにしてもこの歌にもいわば徹底した現実主義とでもいうべき家康の個性が実に如実に現われていると思います。

こういうわけでその歌を読み、その、歌を見ればその人の人柄というものがわかるから、そこでそれに対して、現代であったら本質的な思想批判が行われるわけです。

そのほか上杉謙信とか、武田信玄とかいう人はそれぞれ日本の短歌史上に立派な歌を残して

いるのです。戦国の武将すらしかりと言っていいか、戦国の武将だからそれだけの歌を作ったと言っていいのかわからないのですが、諸君もこれから秀吉とか謙信とか信玄ぐらいの気持でやるのであったら、やっぱりそれぐらいの歌が出来なければとてもそれらの人と太刀討ち出来ないし、同じような仕事をやるということは出来ないのではないだろうかと思います。最近は経営者間に家康ブームというのがあるそうですが、秀吉でなく信長でなく家康をとりあげたというところがおもしろいと思います。実業家や軍人には歌をよむ人が結構あったものですが、いよいよそれもなくなってゆくというわけでしょう。

(2) 連作短歌について

では最後に連作短歌ということについて申し上げておきます。私どもは現代短歌は連作短歌中心であると考えておるわけです。連作短歌形式というのは明治になって正岡子規が打ち出したのです。複雑なおもいを一首の歌に詠んでしまおうとすると非常に抽象的な概括的なものが出来てしまうのです。しかし歌というものは頭の中で考えてでっちあげたものを作るということではいけないのですから、それをさけるためには一つの体験を何首にも分けた方が自然に、まとめるという苦しみをしないで詠めるわけです。歌を作るという場合に、一首も出来ないのに何首も作れというのは無茶だという人がいますが、実際はそんなことではないのですね。一

首に作ってしまおうとするために苦労するので、何首にもわけて作ろうとすればそれほど苦労しないでできるのです。現代短歌では連作短歌というものが基調をなしています。

だからこの合宿の感想をよもうとすれば、たとえば、東京を出るときは合宿とは一体どんなところだろうと思ったり、いろんなことで不安なおもいがしたというように第一首を作る。それからその次には汽車に乗っていたら友達に会ってとても嬉しかったというようなのが第二首。それからここへ来たら知っている顔もないし淋しいとか、なんとか、そういうふうに第三首を作り、合わせて自分の全体の感情をまとめることが出来るわけです。だから歌を詠むということはじめから何首にもよむというように考えてやっていいのです。しかしこの一首一首は独立していなければいけないのです。

六、鑑　賞

(1) 正岡子規 ―しひて筆をとりて―

時間がきましたので詳しい説明ははぶきますが最後に正岡子規の歌と黒上先生の歌をよんでおきたいと思います。

子規の歌は「しひて筆をとりて」という連作短歌ですが、これは子規の晩年の作で、いよいよこの世を去らねばならなくなった自分の目に、自然の美しさが身に泌みてわかってくるとい

う切実な体験をよんだものです。

しひて筆をとりて

佐保神の別れかなしも来む春にふたたび逢はんわれならなくに

来年の春まで生きていることは出来ない、もう二度とこの春に逢うことは出来ない、それで「佐保神の別れかなしも」とのべているわけです。佐保神とは春のことです。

いちはつの花咲きいでて我が目には今年ばかりの春行かんとす

なんの難しい言葉もないけれども、しかし境涯が境涯ですから非常にいい歌です。

病む我をなぐさめ顔に開きたる牡丹の花を見れば悲しも

世の中は常なきものと我が愛づる山吹の花散りにけるかも

自分の愛している山吹の花が、人生無常の法則さながら、散ってしまったのですが、やがて自分もこの山吹の花と同じく死んでいくことであろうというような感じがあるわけです。

別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ絵にかけるかも

夕顔の棚つくらむと思へども秋待ちがてぬ我がいのちかも

くれなゐの薔薇ふふみぬ我が病いやまさるべき時のしるしに

薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種をまかしむ

(2) 黒上正一郎 —手紙のはしに—

それから「国民同胞」（国民文化研究会機関誌）の一〇号の中に黒上先生の歌について書きましたから、あとで読んでおいていただきたいのですが、その一番最初に掲げた歌に「手紙のはしに」という歌があります、これは大正九年七月二十七日のものですが、先生二十才のときの歌です。これは先生の著書「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の新しい版にも掲載されております。みんなで「手紙のはしに」をよんでみたいと思います。

手紙のはしに

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし
みことばにつながりを得て一信海にわれも入らむとおもふよろこび
こののぞみわれはもてりと思ふごとわれ生くらくのここちするかも
ああ一信海われもつながらむと求むるこころそのこころにこそわれは生くるか
ありともへどなきかとおもふ悲しみよおなじなげきをおもひたまふらむ

こういうような歌を、黒上先生は非常に若い時期に歌われて、結局、こういう歌によって福田先生のお言葉をかりれば、言葉の修練というものを出発点にして人生に生きて行く道を求め

て行かれたのであろうと思います。

講師略歴

東大文学部国文学科卒業。在学中より短歌の創作研究をつづけ今日に至る。現在亜細亜大学教授。著書に「三条実美公歌集・梨のかた枝とその研究」「ホイットマン詩撰（木口公十氏と共著）」「歌人今上天皇」などがある。

第一回短歌創作と批評

短歌創作の記録

批　　評……夜久正雄
はじめに：選択の基準：全体としての感想：作者の心を理解する努力：正しい表現への修練：概括的表現を避けよ：すっきりしない理由：切実な経験をよめ：題材のよしあし：感動の波をつかめ：連作短歌の実例

次に掲載する短歌作品は前掲「短歌の哲学と技術」の講義に引き続いて提出された作品四四一首の中からこれを選んだものである。○印は一人の作者、次の○印は別の作者の歌を意味する。○印のない歌は○印の歌から始まる連作と考えてほしい。学生諸君の歌は、批評が自由に行われる配慮から、氏名を省略した。仮名遣は原文のままである。

一、短歌創作の記録

○うたわんと思えば迷いに限りなしすっくと歌がよめぬものかな
○りんりんと鳴く虫のねはもの悲しバスの娘はいかにしつらん
○風呂浴びて心澄ませば秋の虫ただ爽やかに大阿蘇の夜
○ともどもに正しき道を求めんと阿蘇の麓に集いし我ら
　リンカーン読みてし後に語りおる友の瞳は輝いており
○九州の合宿めざす車中にて一緒に学ぶ友をみつけし
○ぞくぞくと友は集いき阿蘇の宿準備のために気持は高まる
○まだ来ぬと指折り数え合宿の参加許可証の到着を待つ
○語らむとわが思いをば言い出せど言葉つまりてもどかしきかな

ホイットマン詩集を読んでベルリンの壁を思い出す

○同胞の結び守りしリンカーンを悼む詩人に心打たるる
　ベルリンの隔ての壁を思い出しその非情さに心ふさがる
○暮れかかる阿蘇の夕山美しき我の力の小さきを知る
○何故に裸になれぬこの心悲しくもあり恐しくもあり

○夜ふけてすだく虫の音静かなりこの高原にはや秋近づく
旅宿の窓辺によりて手紙書く楽しき心伝えんとして
○吾が友に思う心を伝えむに伝うる事のいかにかたきか
ともどもに語る口調の激しきにひきかえ班はなごみゆくなり
雄大にそびえる阿蘇の麓にて集ひし我らは学びゆくなり
いにしえの文を読みたるわが友の声は静かにひびきゆくなり
○夕月を眺むる阿蘇の山中で友と語れるこの一時を
○いま一度会えるその日を楽しみに夜おそくひとり君の手紙読む
苦しみや悩むことのみ多けれど若き血潮を失わであらなむ
○緊張におしつぶさるる思いしてほっと息つく窓のそよ風
○待ちわびし阿蘇合宿に我れは今向わんとしてホームに立ちぬ
みだれたるわが祖国をば前にして何をなすべき集いし我ら
○緑なす美しき肌陽にさらししとやかに見ゆ米塚の山
○阿蘇に来て意義ある日々を過すことこの喜びを母に伝えむ
○濃緑に縞なし横たふ山脈の外輪山に陽は暮れむとす
○はるかなる阿蘇に来りて月を見てわが故郷の母をおもえり

○道端に湧き出づ湯にて顔洗う老婆の額に濃緑映ゆる
○見も知らぬ友の語りし言の葉に耳を傾け知己の思いす

我家を発って阿蘇に向う車中で

○木曽川を過ぎて長良も渡りけり心はやれる合宿の地よ
○温泉に一人来し老爺右手なく鍵を取って呉れと吾に言ひける
○よろこびもかなしみもなきこのごろの心になごむ合宿の友
○御祖らの生命ささげしその道につながる思ひいやましにけり
○こんこんと泉の如く湧き出づる力と熱が今の我は欲し
○たらちねの母と来りし宿に寝て忍びつつ語る友と日本を
○裸燈照る暗き下宿の一部屋で友と語りぬ合宿のことども
思うこと思うがままに言い合える友は良きものありがたきもの
遅れ来し友に出会いて言葉なしニャリと笑いて心かよえり
○大阿蘇のいでゆに浸りて安堵せり初の参加に緊張せし我は
○いづこより来りしものかひしひしと胸にせめ来るこの喜びは
まごころを求めて集える友に逢ひ己れの軽き心は失せぬ
肌に汗にじませいるに全身のすがしき心いづこより来し
むし暑き職場にありて待ちし日の二日過ぎゆく尊さのうちに

一日を心厳しく鍛えたるその日の夜は月静かなり
生き方はさまざまなれど道求め励める心永久に忘れじ
○死期近き病みたる母は声低くまじめにせよと別れ告げけり
貧しさは恥にあらずと言いし母手足かなわぬ身となりにけり

両親を亡くして

○親亡くし何にあまえん妹の悲しき姿に胸は迫れり
手をとりて最後の意識よび起し親亡きあとのことのみを案ず

加藤善之

× × ×

合宿地をめざす車中にて

合宿地めざしつつ進む汽車の窓の明るくなりぬ山の朝かな
朝霧の晴れ間に青く大いなる姿出しけり阿蘇外輪山
はるかなる大き山々仰ぎつつ汽車走りゆく深き谷間を
緑なす大き山並眼前に寄するが如く迫り来るなり
朝霧の真白に長くたなびきて浮けるがごとし阿蘇の山々

川井修治

和歌創作の時間に

心しづめ歌つくらんと筆とれば庭のあたりゆ虫の音きこえく
流れ湯の音にまじりてかぼそけれどたゆる間もなくこほろぎの鳴く
たまきはる生命をこめてなく虫の声のひびきはりりしからずや

胸内にわきくる思ひそがままを吐露し合ひつつ生くべし我らも

合宿参加を思い立ちて半年前　川井トヨノ

おうなわれあまた若人と阿蘇山の草原に立ちて日の出おがまむ

合宿会場につきて

はるばると野越え山越えついにきぬ学生若人の姿を見むと

会場にて

疲れをも覚えぬ如く若人はまなこ見張りて講義聞き居り

大分よりひかり号にて阿蘇に入る　三重野梯次郎

外輪の山突きぬきて火の国の今まなかひに阿蘇盆地見ゆ

共に寝むと吾を求め泣く子の遠く旅寝の宿にせせらぎを聞く

友の言葉に　瀬上安正

とつとつと語りそめにし友のまみはとみに輝きわが心打つ

言の葉の一つ一つにすぎて来し苦しみのあとにじむごとくに

おのがじしおひしつとめを語り合ひて国のすがたを思ひやるかな

合宿に向う途中　宝辺正久

夏空の空高く立ちさみどりの阿蘇の草山風そよぐなり

谷ぞひに汽車ゆくかなたはろに立つ阿蘇の岩山雄々しかりけり

二、批　評

はじめに

昨日皆さんに歌を詠んでいただくようにお願いいたしましたが、提出された歌の総数は四四一首です。歌を作ったことのない人が大多数であるこの合宿で、四四一首の歌が出来たというのは、皆さんの非常な努力の結果で、驚異的なことだと思って居ります。

ここにあげましたのは、その中から学生諸君の歌が五七首、それに「合宿地を目指す車中にて」という加藤善之さんの歌から始まるところの、国文研、大教協、先輩諸氏の歌一九首であります。最初の五七首の母胎になった習作四四一首というのは学生諸君の歌だけです。加藤さん以下のものは数に入れて居りません。従って数としては非常に多いわけです。

これらの歌全体について、これからお話をするわけですが、その目的は、みなさんがもう一度歌を作って、その作品を各自で批評し合う、その相互批評の時の手引になればいいと思ってです。皆さんの歌を拝見して、それを高い処から講評するという気持は毛頭ありません。これ

から皆さんがお互いに人の歌を読み、友達の歌を読んで批評して行く際の準備作業の一つである、こういう風に考えていただきたいと思います。

選択の基準

まず第一に全体についての私の読後感からお話し致します。四四一首という厖大な数ですから、一首一首味わいながら読むということが非常に困難な状況です。そこで、小柳、山田両先生に御協力いただいて、この四四一首の中から取り上げるにふさわしい歌を五七首選んでいただいたわけなのです。しかし、選ぶといってもこの選んでいただいた歌が特にいい歌であるとか、ほかよりも優れているとかいう基準で選んだわけではないのです。何らかの問題を含んでいるが、一応とり上げてみようという漠然たる基準によって選んであるのです。だから自分の歌がここに載っていないから俺の歌は落ちたのだ、それからここに載っているから「俺は相当なものだ」というような事はお考えにならぬように、そういうことは関心の外に置いて戴きたいと思います。

歌を詠む場合にはよく経験しますが、「うまい歌を詠んでやろう」と思うことがしばしばあ

ります。しかし、それでは自分の真実というものは表現されません。従って、うまい歌を作ろうと思う気持をつとめて排除して行かねばなりません。人より優れてやろうとか、誇張した表現で人を驚かしてやろうとか、そういう心持を歌を作る過程の中で排除して行くわけです。いい歌を作ってやろうという意識はかなり根強いもので、諸君より作歌の経験も多く、世間からほめられるような見込みのない私でも、歌を作っている時には、たまには、何かすごい歌でも出来ないかと思うような気持が起ることがあります。まして若い諸君にそういう気持の起ることは充分納得できますが、歌を作る中でそれをつとめて排除してゆくわけです。よい歌を詠みたいという気持を通せば、ありのままの自分の気持は表現できないわけですから、そういう気持と戦いながら、それを排除してゆくところに、真実の表現に達することができるのです。誇張が歌の中でいけないと強くいわれるのは、そういう意味があるのだろうと思います。結局、自分の真実の表現をする為に邪魔になるものを排除しながら、われわれは真実の表現に向って言葉を選択してゆく、これがわれわれの根本の姿勢です。従って、歌の中に自分の歌が取り上げられたいという希望もあるでしょうが、選択は歌に等級をつけるという意味ではありません。いくらいい歌を作ったからといって褒美が出るわけでもないし、まずい歌が出来たからといって「お前だめだからここから帰れ」などということもありません。技巧の優劣を論ずるという立場とは根本的に違った場所で発言しているのです。このことは非常に重要なことです。

これは人生を生きる上でも非常に重要なことですから、まず頭に入れて下さい。

全体としての感想

先ず題材の方から考えて見ますと、合宿に来て初めて父母に対して痛切な思いを持ったこと、お母さんが恋しいとか、遠い旅に自分を出して呉れる時の母親の心配がここに来てしきりに思われるとか、家庭、父母、遠い友人を偲んだ歌が相当数あります。それから、合宿の決意といったものを述べた歌、あるいは合宿に来て喜びや悲しみを感じたり、心のもどかしさを感じたりするというような歌が相当数あります。阿蘇の自然を詠んだ歌もかなりあります。川の流れ、激しく照り注ぐ陽の光、雄大な山なみ、それらの自然の姿がよまれています。これらの素材はすべて我々の現在の心を動かしたものであり、感動がまだ生きているわけです。現在の感動を歌ったものですから、或る程度生き生きとした歌が出来る可能性を持った素材であるといい得るでしょう。

形式の方面から申しますと連作短歌を詠んだらいいという私の話をよく聞いて下さって、大体連作の傾向を持っているようです。無理に一首の中に自分の感情を概括してしまうということではなしに、何首かに詠んでいるというのは、歌の正しい道を行っているのだと思います。

それらの連作短歌の全部をとり上げて批評することは技術的にも時間的にも不可能ですか

ら、ここに抜かれたものを中心に考えてみます。歌の数も多く、どれも形の上では一応歌になってはいるけれども、内容が稀薄だという感じがするのです。これは已むを得ない理由もあるのです。一首に多くの内容をこめよといえば、内容が充実して来ますから、むしろ形式を破るような緊張した強い歌が出来る可能性があります。しかし、自然の感情のままに何首も詠めということになると、感動の余りない歌が並ぶことになります。ここが連作短歌のむつかしい所です。感動が稀薄だということはどういうことでしょうか。歌はわれわれが経験したこと、あるいは現在の感動を言葉に表わすことですから、感動が稀薄だというのは、いまの自分の気持を言葉に把えるだけの力が弱いということでしょう。言葉の修練が不足だから、これも仕方がないと言えばそれまでです。しかし、案外はじめてでも、もう少し強く感動を把えることも出来るのです。自分の経験を強くしっかりとみつめる、把えるということが出来ないのは何故でしょうか。それは強い意志力を持ち、緊張した姿勢で生活しているという意識が薄いからでしょう。心が張って、生き生きと動いているような場合は、自分の感動も、外部の自然も、その細かい微妙な動きまで、我々の目に映り、耳に聞こえるものです。無理に緊張するということはないのですが、平静な心であっても、その心が一つの強い気持を底に持っていると、目に見えるものは瞬間の動きまで心に把えられるし、自分自身の心の動きも、その微妙なゆらぎまではっきり言葉に映るものです。今私がお話していることは皆さんどれだけお解りか分りません。不

満そうなお顔も見えます。しかし、もう少し強く求める心があれば、全体がもう少ししまった歌が出来るのです。もう少し調べが緊張した歌ができるのではないでしょうか。

ここが非常に微妙なところで、一応素朴でなだらかで、形がととのっていても、その素朴さがぼっとして、焦点がぼけていては困るのです。素直であるということが、屈折を乗り越えて行く強い意志を祕めた素直さでなければならない、それがわれわれの心の本当の姿であろうと思うのです。折角合宿に来たのですから、われわれはここで自分の心を鍛えるべきだと思いますし、われわれの求めるものの方向だけでもしっかりつかみたいという気持を持っているわけですから、その気持を強く引きたてて、お互いに訴え合って行ったらいいのではないでしょうか。全体としてそういう感じが致しました。

作者の心を理解する努力

これから一首一首の批評に入りますが、初めの方から批評して行きますから、途中で時間が来てしまうだろうと思います。私の批評は二回目の習作の後の相互批評の準備としてやるわけですから、批評の根本的態度について最初にお話し致します。

言うまでもなく、一首一首をよく読んで見ることです。一ぺんぐらい読んでも、言葉遣いが難しくてよく分らない歌があります。しかし、何百年の間名歌として伝わっているような歌だ

と大体よく読めば意味が分るのです。ところが、われわれお互いが作る歌には、言葉の上の間違いがありますから、いくら読んでも意味が分らないという場合が出て来るわけです。語法が間違っているから分らないので、仕方がないのですが、その場合お互いに聞いてみるような努力をして、ともかく相手の気持をよく理解するということが第一段階です。ちょっとみて熟さない言葉などがあると、それを種に全面的に否定するというような態度は最もいましめられるべきです。

さて、私は昨日の第一回のみなさんの習作を、今朝の八時から昼食時間も割いて今まで全部目を通しました。すぐわかる歌もあるし、なかなか分らないのもあります。一首の歌について二十分も三十分もかけて、何とか理解しよう、間違いがあるならどこが間違っているのか、私自身でも、少しはっきりさせて納得したいと努力しました。こういう努力は歌の批評については常に必要なことで、これで終ったとは思っていません。後でまた読み返して考えて見ようと思っています。諸君がお互いの歌を詠むときにも、相手の気持をよく察するということに努力してほしいのです。相手の気持をよく察するということが、福田先生の御講義の中の「教養」という言葉の意味であったはずです。自分の言いたいことをあらかじめ決めて置いて、「あいつはいつも生意気なことを言っているから、今度歌でひとつやってやろう」というように、自分の既成観念を持って相手を攻撃するというのは非常にまずいことです。批評というと悪口を

言うことのように考えがちですが、そういう前提を捨てねばなりません。

それから、いくら読んでもよく分らない、相手の気持に自分が共鳴できないということもあります。その時にも相手の身になって、どうしてこんな表現をしているのであろうかと考えてやるのです。自分を主にして考えるのではなく、相手が何を言いたいのか、言いたいことが何かあるのか、どうしてこういう言葉になっているのか、という風に相手の気持を推察しつつその表現を確かめて行くわけです。

正しい表現への修練

相手の気持になるという努力の次に、相手の表現の間違いを正して行くわけです。それも文法的な誤りは別として、そうでない限りは、こちらから主体的にやるというよりも、その表現を少し変えることによって、相手の気持がより正確に表現できるように、と考えるのです。従って、この批評というのは、外から批評するということではなく、あくまで相手の気持を主にしてゆくことだと思うのです。一所懸命に相手の気持になるということですから、相手が簡単に詠みちらしてしまったものまでよく考えてあげるということになります。それは結局、私を無にして相手のためにするという大きな努力によって、言葉と精神との関係についての修練をお互いに積み上げてゆくのです。「ここは私はこういうように思うけれども、君はどういう

気持で作ったのか」「私はこういうつもりでこの言葉をえらんだのだ」「いくらそういうつもりでも、そういう言い方をしては分らないじゃないか」というようになるのです。皆に聞いてみて、皆がやはり分らない。別に多数決ではありませんが、単に主観的に「おれはこういうつもりでやったのだ」といっても客観性がないでしょう。「それではここはこういうように変えよう」ということになるわけです。字の間違いや文法的な間違いは、字引を引けばはっきりしますから、一語一語努力して正しい表現を作り出して行くことになります。従って、歌の創作は勿論、その批評もまた、国民同胞感の実現、われわれがお互いに共感共鳴の世界、お互いに心の通う平和な精神の世界を実現する一つの道であろうと思います。そういう気持でこの次に行われる相互批評もやっていただきたいと思います。

概括的表現を避けよ

習作の実際の批評に入ります。第一首目の歌から順次にやってゆきます。

うたわんと思えば迷いに限りなしすっくと歌がよめぬものかな

歌の上に○印のついているのは、その印によって一人の作者のもの、次の○印は次の作者であることを示しています。最初の人の歌は原稿によると五首あって連作の形になって居ります。

つぎつぎに群がり起る問題に頭を痛め河辺を歩く
われのみか胸に名札の友達が頭をたれて河辺を歩く
下駄履いて河辺を歩く楽しさにその楽しさに苦しさ忘る
指折りて歌詠まんとすれど気の遠く山の青さに呆然とする
うたわんと思えば迷いに限りなしすっくと歌が詠めぬものかな

この五首の一番最後をここにあげたのですが、これは前の「下駄履いて」の歌の方が、詠みぶりが素直で素朴であると思います。しかし、その歌も別に取り立てていい歌ということではありません。素直だけれども取り上げる程でもないと思って、この「うたわんと」の歌を取り上げただけなのです。だからこの歌が特にいいというのでもない。そうかといって別にまだ悪いとも言っていないのです。皆さんも一緒によんでみて、一緒に考えるようにしてみたいと思うのです。

私は自分でこの歌を大分考えて見たのですが、「うたわんと思えば」というのだから、歌を歌おうという意味なのでしょう。それならやはり「歌を歌わん」という風に表現した方がよい。あるいは「歌を詠まん」という言葉があるのですから、その言葉を使った方がよかったのではないでしょうか。「歌う」という言葉は現代語としては「歌を詠む」という言葉ではなしに、「合唱する」という言葉に近く使われているのですから、作者は或いは声を上げて歌を歌

うように歌が詠みたいと思ったのかも知れません。しかし、それならちょっと無理な表現です。「歌わん」といえばやはり声を上げて歌う形になると思います。また「うたわんと思えば」の仮名遣いはどうでしょう。短歌のような韻文で文語の語法を基本にするものは、歴史的仮名遣いで書くのが正しい表記法です。従って「うたはんと思へば」と書くのが正しいのです。ここで一つ一つ直して行きますと非常に時間がかかりますから、文語的語法によって詠まれているのだと考えて行きます。そうすると「うたわんと思えば」というのは「歌を詠もうと思うので」というのか、「歌を詠もうと思うと」というのか、ここもちよっとはっきりしない。恐らく後者でしょう。それに「迷いに限りなし」と続くのです。これも不正確です。迷いが限りないという意味でしょうか。歌を詠もうと思うと迷いが限りなく出て来るというのでしょうが、その迷いというのも漠然としています。歌を詠もうと思うと迷いが限りないというのは、胸中の思いをどんな言葉に表現していいか分らないということだと思います。それなら、そういうように詠んでもらわねばわからないわけです。「歌を詠もうと思うけれども、いい言葉が見つからないので、なかなか歌ができない」というのであればわかります。難しい事でも何でもありません。ところが「迷いに限りなし」というと、その迷いは「煩悶」のようにも受け取られます。「歌を詠もうと思うといろいろな煩悶が出て来る」したがって「やめればそれが消えてしまう」という意味にもとれます。そういう事もあり得るでしょうが、その場合でも「迷

い」では不充分でしょう。もし自分に迷いというものがあるなら、その迷いを真向から歌えばいいのです。「迷いに限りなし」というようなことで止ってしまうと解決や進歩はないでしょう。迷いが本当に限りないかどうかも分らないままで終ってしまうのです。そういう精神の低迷を破るのが歌の表現ではないかと思います。

すっきりしない理由

次に、この歌の特徴は一首二文です。「うたわんと思えば迷いに限りなし」で一応切れるのです。「歌を詠もうと思うと煩悶雲の如く湧いて困る」といって「すっくと歌がよめぬものかな」と続けるのです。「すっきり歌が詠めないものかなあ」と全然反対のことを言っているのです。こういう気持ではすっきり歌は詠めない。それから「歌が詠めぬものかな」というのは「歌が詠めないものであるか」というような疑問の気持があるようです。おそらく「なぜこうすっきりと歌が詠めないものか」と自ら問うているのでしょう。すっきりした歌が詠めないのは、自分の心がすっきりしていないからなのです。自分の心がすっきりしていないのはありのままの自分の気持を言葉に現わそうとしないからなのです。非常に概括的に「迷いに限りなし」というように言ってしまうからです。これでは「おれは煩悶しているよ」というのと同じことで、何の足しにもならないのです。自分はこれこれのことで、こういう煩悶をしているの

だというなら、言葉にそれを表現する事によって何か光明を見出すことも出来るのです。

それから、「すっきりした歌が詠みたい」というのであれば、それを素直によめばいいのです。「すっきりした歌が詠みたい」と「すっくと歌を詠む」とは少し違うのではないか。「すっくと」という言葉は「立つ」という言葉に続くのです。「すっくと立つ」というのです。私などは言葉に正直ですから、「すっくと歌を詠む」というと、自分が歌を詠む時にすっくと立ち上るような感じが思わず出て来るのです。これは言葉の使い方が間違っているからです。

この歌は一首二文になっているので意味が分りにくくなるのですから、むしろ二首に読めばいいのです。「うたわんと思えば迷いに限りなし」というのをもう少し細かく、「歌を詠もうと思うけれどもなかなかいい言葉がみつからないので、とても言葉にならない」という歌を作るのです。それから「どうして自分は心が乱れるのであろう、心がはっきりしないのであろう。もっとすっきりした歌が詠みたいなあ」というように詠めば、人にもわかる歌になるし、作る人も必ずすっきりした歌が詠めるようになります。すっきりした歌が詠みたいという思いを持ち続ければ必ず何かの機会に心の転機を求めることが出来るはずです。

極論のようですが、作者はこの歌を強いて詠む必要はなかったのです。連作の前の方の、河のほとりを歩いて、そこに自分と同じような思いを抱いた人がいたという三首をもっと充実して詠めばよかったわけです。作者が技術的に下手だということではない。この歌は単純で素朴

なものとは違って、心の屈折を持っている歌です。こういう所を経過して素直な歌が出来はじめるとそれは本物になります。人生のさまざまな屈折に耐えるものになってゆくのです。この歌の心情が皆さんすでに経験ずみのことなのか、これからの皆さんの精神生活の先にあるのか、簡単には分らないのです。ただ、今のように説明すれば、この歌の欠点というものが大体分るでしょう。欠点が分るということは、お互いに素直な表現というものを発見して行く契機ともなるでしょう。そういう例の一つとして聞いていただいたわけです。

切実な経験を詠め

次の歌の批評に入ります。

りんりんと鳴く虫の音はもの悲しバスの娘はいかにしつらん

という歌です。この歌は作者がここに来るまでの経験をうたった八首の連作の最後の歌です。バスの自分の席の前に座った娘さんと笑み交わしたりして心が通ったというような歌もあります。或る人が私に、「自分が恋愛の歌を見せたら人が笑ったから、これからは絶対に人に見せない」といったことを覚えています。歌は切実な経験を述べますから、その内容について笑ったりするのはよくないのですが、この歌は多少笑っても大丈夫だろうという感じを持っています。非常に切実に詠んでいるのではなく、全体として割合に軽く詠んでいるのです。八首

全体がフワッとして軽いのですから、多少からかってもそれほど心を痛めることもないと思います。「バスの娘」に相当惹かれているようですが、歌の調子はきわめてのんびりしています。この歌もやはり二つに分れているでしょう。「りんりんと鳴く虫の音はもの悲し」で切れてしまっています。心が強く張って全体を一息に言うだけの痛切な気持がないわけです。心の強さがないという点では前の歌も全く同じです。最初にちょっと言って、それからもう一つくっつけるという恰好になります。前のものと後のものとが俳句のように、虫の音とバスの娘を対照してみるような恰好になってしまいます。「もの悲し」と言ったところで、それほど悲しそうには見えない。何故かというと、「りんりん」という言葉がよくないのです。「りんりん」と虫がなく時には、もの悲しいというよりも、もっと緊張した感じがする筈です。もの悲しい虫の音というならば、何か別の言葉を使って表現すべきです。ちょっと直してみました。

かのバスの娘はいかにせし宿に来て鳴く虫の音の心にしみる

というようになると、多少強く表現したことになります。しかし、そういう歌を作るようになると、この恋愛の後日譚か何かが出来るようになったりして、まかりまちがうと「阿蘇の恋」とか何とかいって心中だとか何だとかになりかねないように気持が発展しないとも限りませんから、これは大体こんなところでいいのじゃないでしょうか。

題材のよしあし

次の歌に入ります。

風呂浴びて心澄ませば秋の虫ただ爽やかに大阿蘇の夜

というのです。「心澄ませば」という言葉がおかしいのです。従って、これは

風呂浴びてくつろぎ居れば秋の虫の声爽かなり大阿蘇の夜

のようにでも直せば、自然になるのではないかと思います。

その次は、

ともどもに正しき道を求めんと阿蘇の麓に集いし我ら

この歌は、

阿蘇の麓にわれら集ひぬもろともにまことの道を求めんとして

大体このように直せばいいと思います。理由を言うといろいろありますが、「正しき道」「まことの道」同じことを言っているようですが「正しき道」というと何かはっきりしないような気がします。それは私の考えが足りないのかも知れませんが、これだけ考えて居っても時間がかかってしまうので、途中で考えをやめて「まことの道を求めんと」というようにしたのです。

リンカーン読みてし後に語りおる友の瞳は輝いており

この歌は次のように直しました。

リンカーンの言葉を読みて感激を友は語りぬ瞳を輝かせて

「友の瞳は輝いており」というと、それを自分が見ていることになります。むしろ友はその感激を語って居り、それを自分が聞いて居るところに意義があるわけでしょう。一つ一つの添削の理由をくわしく説明する時間がないので簡単にやってゆきます。

その次の歌は、

九州の合宿めざす車中にて一緒に学ぶ友を見つけし

これは「一緒に学ぶ」ということが、どういうことか分らないのです。学校での一緒の学友なのか、或いは一緒にここに来る学友なのかはっきりしないのです。「見つけし」と言うと「見つけた」という過去形になります。しかし、これは見つけた時の感動がよみたいのでしょう。それなら「見つけたり」というような形にすべきだと思います。

合宿をめざして旅行く車中にて同じ旅行く友を見つけたり

こういう風にありのままにはっきり歌っても、パッとしたところがないのは、題材が悪いのです。きわめて自然に、ありのままに詠んだところが、大して面白くないものになってしまっ

たというなら、それは表現が悪いわけではないのです。内容が、それを歌に歌うほどのことではないというわけです。そうなったら、それは捨ててしまうわけで、つまり歌にならなかったということなのです。

感動の波をつかめ

次の歌に入ります。

ぞくぞくと友は集いき阿蘇の宿準備のために気持は高まる

これは、

ぞくぞくと友の集へば準備するわれらの心はいよいよ高まる

こんな風になるのが自然でしょう。「集いき」という所がどういうことかはつきりわからない。「集い来て」というのか「集った」というのかよく分らないのです。

次の歌

まだ来ぬと指折り数え合宿の参加許可証の到着を待つ

これは五七五七七の三十一字にはなっていますが、殆んど感動が感じられません。日記の断片のようで、全く感動の波がないから、「到着を待てばもどかし」というような言葉がなければ歌にはならないと思います。

次の歌

語らむとわが思いをば言い出せど言葉つまりてもどかしきかな

こういうのはその時の感情だろうと思います。たしかにこういうものであろうと思います。次に進みます。

同胞の結び守りしリンカーンを悼む詩人に心打たるる

ベルリンの隔ての壁を思い出しその非情さに心ふさがる

前の歌は「悼む言葉に心打たるる」の方がよいでしょう。「ベルリンの」の歌は、ホイットマンやリンカーンの「ユニオニズム」や「ユニオン」という言葉に触れて、ベルリンで見た東西を隔てる障害を思い出した一首です。ベルリンで実際に見た光景がなまなましく浮んで来て、自分の胸は再び痛むわけですから、その感情を直接詠むべきであって、これでは集約が過ぎて感動が薄くなります。もう少し何首にも分けて詠むべきものです。

その次は、

暮れかかる阿蘇の夕山美しきわれの力の小さきを知る

急いでやっていきますが、それぞれ前に述べたような批判の過程を踏んで結論だけをお話しているのです。相手の気持になって見て、その気持の表現としては、こういう風に言った方が正しく気持が表現されるだろうという観点から直しているのです。それを心に入れて置いてい

ただきたいと思います。この歌は「夕山」と「暮れかかる」という言葉が重複しているのが問題です。言葉が重複しているというのはくどいということでしょう。会話の場合は重複することが多いですが、歌の表現ではもっと細心であるべきです。次のように直してみます。

暮れてゆく大阿蘇の山遠く見てわれの力の小さきを思ひぬ

「われの力の小さきを知る」というように言うと、法則的になります。つまり「夕山の美しいのを見るときは必ず知るものである」というように一種の法則を現わす恰好になります。暮れてゆく阿蘇の山を眺めていて感じたというのは、やはり時間の制約を受けている感想ですから、法則的に詠まない方がいいでしょう。以下時間の関係で割愛させていただきます。

連作短歌の実例

「第一回創作」のプリントの中に連作短歌のはっきりした例として、一つだけ六首の連作があげてあります。他にもたくさんありましたが、印刷の都合上一例だけそのまま採ったのです。

いづこより来りしものかひしひしと胸にせめくるこの喜びは
これは「胸に迫まり来るこの喜びは」という意味なのでしょう。
まごころを求めて集える友に逢い己れの軽き心は失せぬ

「軽佻な気持はなくなった」というのでしょう。
肌に汗にじませいるに全身のすがしき心いづこより来し
「こういうすがしい気持はどこから来るのだろうか」という意味です。
むし暑き職場にありて待ちし日の二日過ぎゆく尊さのうちに
「もう二日も過ぎてゆく、尊い気持の中に」という意味でしょう。
一日を心厳しく鍛えたるその日の夜は月静かなり
「その日の夜は月静かなり」というような所に多少問題点があります。概括的過ぎるのがよくないのです。
生き方はさまざまなれど道求め励める心永久に忘れじ
「励む心を永久に忘れじ」の方がいいでしょう。ともかく立派に連作短歌の形になっていると思います。一首一首を充実すればよいでしょう。
死期近き病みたる母は声低くまじめにせよと別れ告げけり
貧しさは恥にあらずと言いし母手足かなわぬ身となりにけり
非常に深い感動が表現されている歌です。
次の、「両親を亡くして」という題の作者は前の作者とは違いますが、
親亡くし何にあまえん妹の悲しき姿に胸は迫れり

手をとりて最後の意識よび起し親亡きあとのことのみを案ず

これにも悲痛な感情がよまれています。感動が切実ですから、従って表現も切実に、ありのままになって、誰の心にも通う歌になって居ります。悲しい歌がいい歌であるということは、まごころが人生の根本であるということを示す短歌の約束なのでしょう。これで学生諸君の歌の批評を終ります。国文研の加藤善之さんの歌に移ります。「合宿地をめざす車中にて」という詞書のある連作です。われわれはみなこういう経験をしながらやって来たのですが、その同じ経験からこういうものが出て来るのは、やはり作者の合宿に対する心の期待の強さを示しています。その心の姿勢が緊張している、強く張っているために、そういう生き生きした心から歌が溢れて来るのだと思います。

合宿地めざしつつ進む汽車の窓の明るくなりぬ山の朝かな

朝霧の晴れ間に青く大いなる姿出しけり阿蘇外輪山

はるかなる大き山々仰ぎつつ汽車走りゆく深き谷間を

緑なす大き山並眼前に寄するが如く迫り来るなり

朝霧の真白に長くたなびきて浮けるがごとし阿蘇の山々

次は川井先生の歌です。「和歌創作の時間に」という詞書を持った連作です。

心しづめ歌つくらんと筆とれば庭のあたりゆ虫の音きこえく

流れ湯の音にまじりてかぼそけれどたゆる間もなくこほろぎの鳴く
たまきはる生命をこめてなく虫の声のひびきはりりしからずや
胸内にわきくる思ひそがままを吐露し合ひつつ生くべし我らも

その次は川井先生のお母様の歌のようです。

合宿参加を思ひ立ちて半年前
おうなわれあまた若人と阿蘇山の草原に立ちて日の出拝まん

合宿会場に着きて
はるばると野越え山越えついに来ぬ学生若人の姿を見むと

会　場　に　て
疲れをも覚えぬ如く若人はまなこ見張りて講義聞き居り

諸君の態度を、諸君のお母さんぐらいのお年になる方がじっと見ていらっしゃる、そのお心がよく現われています。

あと三人の方の歌も読むとよいのですが、時間がきっちりになりましたので、これで終ります。

第二回短歌創作の記録

導入講義「短歌の哲学と技術」、第一回短歌創作、その批評という三段階を経て、合宿三日目に第二回目の短歌創作が行われた。参加者全員の作品の総数九百余首の中より一人一首以上をとり、次の二五八首を掲載した。これらの作品は第四日目の班別の短歌相互批評の時間に一首一首緻密に検討され、班員相互の心の交流を深めることができた。

第一班

さびしさを抱きてわれの向へるは霞みて見ゆる阿蘇の山々　亜細亜大学　小堀勝司

友の指す山のかなたを眺むれば雲のまにまに根子岳そびゆ　長崎大学　角田啓爾

下りゆく阿蘇の山辺の草道に白く小さき花咲ける見ゆ　神奈川大学　大村雅章

いにしへのたぎる炎を地に祕めて今は静けし浅緑にして
ありし日の大いなる姿しのばする大阿蘇盆地あまりに広き
漱石も見たりと伝ふ大観峯に吾も登りて想ふこと多し　神戸大学　諏訪田陽三

見渡せば霞にうすく閉されて外輪山の峯広がれる　日本大学卒　斉藤全右

外輪山の暖かく包む阿蘇の山人の争ひの小さきことよ　鹿児島大学　中尾光宏

つき出でし岩の上より眺むれば東より西に走る川あり

赤蜻蛉草むら高く飛びにけり大観峯に秋は近づく　東京水産大学　山本俊一

どのやうに生きたらよいか語りつつ登りつきたり大観峯に　早稲田大学卒　国武忠彦

とりどりの薙の草木分けゆけば同じ緑の大観峯なる　下関大学　沢田勝正

阿蘇山の大地を踏みて見下せば豪快なりと友は言ふなり　九州大学　鶴本松彦

のどかなる阿蘇の火口の村々よいにしへびとは恐れし山を　宮崎大学　高原昌敬

第二班

道求め道踏みゆくはきびしくとも友らとともに進みゆくべし　京都大学　半田嘉弘

大阿蘇の山つらなれる外輪に花つみゐたり友と二人で　東京水産大学　山本伸治

雲白く阿蘇の頂にかぶさりてかすかに見ゆる白き噴煙　亜細亜大学　小林詔三

大阿蘇の煙ふく見ゆ火の山の絶えざる力尊かりけり　神奈川大学　井沢佑治

一面に緑さゆらぐ高原の乙女の姿にひかるるわれは　下関大学　藤田幸義

車にて阿蘇に上れる人もあり歩きて登らば面白からんに　国士館大学　丸山美恵次

阿蘇に来て共に語ればひしひしと同胞感をわれは感ずる　高崎経済大学　山本一郎

あな広し霞の中の緑こき阿蘇の山々うねるがごとく　長崎大学　合原俊光

阿蘇路ゆくバスの窓より見放くれば下に開くる緑濃き野辺

大阿蘇の高きに登り見渡せばはるかに霞むふるさとの山　法政大学　松浦正昇

友だちが写真撮り合ふ大観峯すべての顔によろこび見ゆる

九州大学　東迫旦洋

遥かなる阿蘇連山を見渡せばわが胸のうち広々となりし

鹿児島大学　須納瀬忠男

ますらをはかくあるべしと煙ふく阿蘇の五岳に向ひて念ふ

神戸大学　大西啓義

夕映えの外輪山に真向ひて一人立つなり孤独なわれは

第三班

鹿児島経済大学　野間秀雄

いにしへは活動したるこの山も今は煙をふかずなりにき

ここに立ちてふるさとの方ながむれど霧島山のいただき見えず

亜細亜大学　亀井孝之

もやかかる阿蘇外輪山見つむればその山並みの迫りくるここちす

鹿児島大学　前山武則

進みゆく国の歴史に耐へて来し大観峯よとこしへにあれ

下関大学　平岡格

大観峯へ登りて見れば広々とカルデラ盆地大平原のごとし

九州大学　村山国弘

緑なすふすまの丘に踏み入りて赤き小花の咲けるを見たり

法政大学　古玉和男

阿蘇山の大観峯より眺むれば泊りし宿はいづこにかあらむ

岡山大学　入江大祐

久々に訪ね来りし阿蘇山の風のうちにも秋を知りたり

岡山大学　日下光

講義にて疲れし目をば窓にやれば阿蘇の山々霞みて見ゆる

合宿もすでに三日を過ぎたれば友と心の通ふ時もあり

神奈川大学　奥田善輝

桃色の一輪の花野辺に見て我の心の安らぐを知る

熊本大学　赤塚恒幸

外輪の深きうねりを縫ひ行けるバス道路よくぞ誰が作りし

熊本大学　黒木林太郎

大阿蘇のながめはもやにうすけれどわが心にはおごそかに見ゆ

せせらぎのほとりに咲ける赤き花摘まずに置かむ散るその日まで

広々と草原開く阿蘇山に立ちて仰がむ夕べの星を　鹿児島大学　柚木俊彦

第四班

大阿蘇に集ひしわれらもろともに頂きめざし登りゆくなり　長崎大学　沢部寿孫

日は暮れてこほろぎの声しみじみと耳傾けて聞き入りにけり　鹿児島大学　大城俊彦

山のかげくっきり見えて空青し空に向ひて背伸びするわれは　神奈川大学　松坂俊輔

頂きに登りて遠く見渡せばあらためて思ふ阿蘇の大きさ　早稲田大学　山本博資

煙立つ中岳みたき心地すれどかすみて見えず心残りなり　神奈川大学　井上末彦

大観峯に登りて幸を祈るわれにしんしんとして秋蟬の聞ゆ　岡山大学　森福猷弐

九州大学　筒井　知

あな広しかつてこの野は煙噴きほのほを立てし時のありしか

長崎大学　市川征二

大阿蘇の草ふみ分けて行くわれの背にさんさんと夕陽照りたり

拓植大学　大蔵乃光

木立なき大観峯の頂きに蟬とび立ちて吾を驚かす

鹿児島経済大学　藤森俊彦

汗にまみれ山脈見下ろすわが顔にさわやかなるかな一陣の風

宮崎大学　三樹博光

流れゆく雲の合間にそびえ立つ久住の山の姿雄々しき

鹿児島大学　奥村晃久

はてしなく広がりてゐる高原を踏めばおのづとわが足はづむ

滋賀大学　徳地康之

せせらぎのほとりのなでしこわが足に踏まれて色のあざやかに見ゆ

第五班

大いなる阿蘇の山並み眺むれば夕もやかかり静かなりけり

鹿児島大学　平　孝雄

とめどなく流るる汗をぬぐひつつ阿蘇に登りゆくこのうれしさよ

鹿児島大学卒　湯津堂　義弘

大阿蘇の外輪山の草深き斜面に伏して歌を思へる

神々の雄叫びゆきし大阿蘇の草生ひし山に今われは立てり

草深き阿蘇の山々われに告げよ神々の代のうたげのさまを

明治大学　西田　正彦

先達が大観峯と名づけしはさもありなむと思はるるかな

宮崎大学　日高　義之

路の辺の名も知られざる白き花しほらしく咲けりおごるともなく

長崎県立短大　尾崎　啓一

小鳥鳴く大観峯の頂上の空気は澄みて心地よきかな

滋賀大学　西山　文隆

頂きに立ちてふもとを眺むればかすみがくれに見ゆる火口原

高崎経済大学　清水　聡

外輪山はるか彼方に広がりて夕日の光しづかにそそぐ

東海大学　天野弘正

みほとけの寝姿に似ると教へられ改めて見る阿蘇の山々

早稲田大学　今村宏明

広々と大地をふまへゆるやかに起伏を見する阿蘇の山々

九州大学　五十君裕玄

いにしへの先哲達をここに呼び膝つき合はせ語りたきかな

岡山大学　波多洋治

うす雲のゆきしみ空にそびえ立つ雄々しき阿蘇の夏の連山

高崎経済大学　加賀昭彦

人生に久遠のものを求めむと我は来りきこの阿蘇の地に

鹿児島大学　能野俊満

あまりにも間近に見えて驚きぬ九重の山へ歩きてゆきたし

長崎大学　中村允隆

ちはやぶる神の作りしこの大地守りゆかむと心定めぬ

長崎大学　尾形紘行

ひとすぢの道をたどりて登りゆかむこの大いなるものの頂きへ

緑なす山の稜線はてしなし心いつしかうつし世を忘る

第六班

宮崎大学　森久光雄

学問に寸暇を惜しむ気になりしこのごろのわれを頼もしと思ふ

苦しみをつきぬけし後の歓びにいたらむものと心勇むも

中央大学　柴田悌輔

大観峯駆け登り来て一息に冷き麦茶飲みかはすかな

北海道学芸大学　滝田浩造

うましきや遥かに望む阿蘇五岳かすみて見ゆるまぼろしのごと

亜細亜大学　神山尊圀

大観峯の頂きに登り遥かなるふるさと思ふ合宿の友

熊本大学　石黒義也

秋の日の大観峯よりながむれば鳥とぶ彼方寝仏のかすむ

滋賀大学　赤坂郁昌

大阿蘇の外輪山に佇めば温泉宿の煙立つ見ゆ

東京水産大学　木村　滋

小鳥とぶ外輪山の草原に白き人かげ動きて見ゆる

東京学芸大学　土田　敏夫

阿蘇に来て黄色き土を見し時はわが思ひはや武蔵野にかへる

高崎経済大学　平　俊夫

名も知らぬ花にかこまれわれひとり阿蘇山上に空をながむる

鹿児島大学　宇佐美　修郎

重き足引きずり登る阿蘇の山人の多さにわれは驚く

慶応大学　我那覇　清

摘まむとて立ちどまりたれどこの山のなでしこの花摘まず行きたり

九州大学　麻生　清隆

ほこりあげ坂道登るバスの窓に岩は迫り来今にも落つべく

緑なす阿蘇谷の田に空をゆく雲の影うつり動けるが見ゆ

日ざしうけ吾草原にねころべばその傍に虫の声聞こゆ

亜細亜大学　高村　光紀

見はるかすいにしへの山連なりて神代のことも思ひ浮かびぬ

迷ひたるわが心をば解かむとて君は進みてわれと語らふ

第七班

長崎県立短大　古賀保臣

中学の時に来し山ここに立ち昔のことのなつかしきかな

宮崎大学　行武潔

大観峯の上より見れば外輪山のはるかふもとにわが宿の見ゆ

長崎大学　有田二彦

緑なす阿蘇の草原走りつつ友と味はふ若きよろこび

亜細亜大学　細川明聖

友らみなはづむ心に唄ひつつ宿に向ひし夕映えの路

宮崎大学　徳田順作

山頂の小笹の中になでしこのうす桃色に咲くがいとほし

鹿児島大学　西平賀典

登り立ち遥か遠くを見おろせば学びし宿舎光りて見ゆる

武蔵大学　田中幸夫

すず風の夏の緑はもの足りずひそかに思ふ秋の日の阿蘇

熊本大学卒　牧野祐児

ひろびろと下に広がる阿蘇谷のかなたに霞む阿蘇の山々
小国路をうねりて登るバスの窓はるかに下に内の牧見ゆ

日本大学　高橋忠

空高くつばめとび交ふ大観峯われの心に喜びは満つ
汗流し登りつめたる我が前に急に開けたり阿蘇の山々

九州大学　山本祐嗣

白雲をおのれの胸に抱きては青く染めむとするや大阿蘇

鹿児島経済大学　久保明

外輪山に生ひたる草もその下は赤く焼けたる熔岩のあと

東京水産大学　大沼昭彦

砂礫踏み大観峯に登り来てのぞむかなたはかすむ中岳

岡山大学　三宅将之

生ひ茂る背高き草を押し分けて押し分けて登る一すぢ道を
黒き土黒き岩の間流るれど谷川の水清く澄みたり

あたたかく五岳を守り火口原母の心に似て広きかな　宮崎大学　大沢勲

第八班

老婆ありて静かに説きぬ釈迦の道われは忘れずそが輝ける目を　日本大学　五十嵐正章

かすみたる阿蘇の山々見わたせば心すみゆく何とはなしに　法政大学　都丸清孝

ふるさとの山に似にけりこの山も九重をカメラにおさめつつ思ふ　島根大学　野津強

大観峯そこに拡がる山肌に角髪(みずら)の人の見ゆる心地す　北海道学芸大学　松坂征二

けぶり立つ阿蘇の連山ながむれば浩然の意気胸つきてくる　岡山大学　志部昭平

雲間よりさし出づる陽に照り映えて阿蘇の連山厳かに見ゆ　九州大学　木田浩隆

永遠に連なり結ぶ山々よわれら同胞もかくあれと祈る

滋賀大学　池内一清

み仏の寝姿に似る大阿蘇にもえたつ緑続く遥かに

北海道学芸大学　工藤敏昭

草花や遥かに見ゆる山々やうましき国にわれら生れつ

福岡大学卒　山中稔

漱石もハーンも立ちけんこの丘にいにしへびとの校舎なつかし

同志社大学　沖崎継則

苦しみも山に登れば朝霧の消ゆるごとくに晴れわたりけり

早稲田大学　福島宏之

はろばろと阿蘇に集ひし友どちにさやけき姿見せまほしきに

高崎経済大学　山田雅文

みほとけの寝姿したる山見ればうつし世のことしばし忘るる

高崎経済大学　宮崎誠一

一心に聞きし授業も終りけり手足のばしてほっと息つく

鹿児島大学卒　上村和男

思ふごと何もなし得ぬわれなれど求めてやまじはらからの道は

長崎大学　福島恒雄

暗き空仰ぎてをれば清められわが魂は吸はるるごとし

九州大学　西元寺紘毅

亡き祖母の道説き給ふ顔のごと気高くそびゆ阿蘇の山脈

うつすらとかすみにけぶる山を背に語らふ友の顔は晴れやか

第九班

熊本大学　川添設代

班員のためになさむと思へどもなすすべ知らぬその役つらき

新しき道を求めて語られし言の葉ひしとわが胸を打つ

やはらかき言葉のなかにこもりたる力強さは大地の力

連なれる山の斜面を吹きわたる風にかたむくなでしこの花

吹きよする風に細身のかやの葉は白き葉裏を見せてなびきぬ

長崎大学　龍幸枝

夜ふけて廊下づたひに聞え来る合宿の友の語り合ふ声

神ありと信ずるなりと高らかに合宿の友は言ひ放ちけり

長崎大学　一瀬日出子

わが耳に友の言葉は残りつつ眠りやられぬ阿蘇の夜かな

長崎大学　植木正子

夕映えに映る緑を目の下に砂けむり残しバスはゆきけり

熊本大学　内田和子

中岳の煙見えぬを惜しみをれば大観峯にすず風の吹く

福岡女子大学　山本珠真子

大観峯登り来し目に山脈は青くつらなる夕日に映えて

熊本大学　谷田香枝子

うつとりと眺むる阿蘇の外輪山まなこの下に白き花一つ

亜細亜大学　菅野リン子

雑草の生ひ茂る中をあてもなく友とさまよへば楽しきことよ

熊本大学　赤星節子

かすみたる阿蘇谷の中を黒川は白く光りて流れをりけり

日本経済短大　大川範子

灼熱に額を汗したどりつきし阿蘇の山々何を語るや

熊本大学　竹崎静子

ここにほらなでしこ咲くよと我をよび喜ぶ友の声の涼しさ

岡山大学　伍賀幸子

頂上に早くつかむとがんばりてほこりまみれの汗ふくわれは

東洋大学　行武靖枝

黙し居る友にきびしく問ひたれば黙してさらに答へなかりき

驚きて顔見つむればその友は身を固くして息つめてゐ給ふ

ああ君も苦しみますかと友が手をとりてともども泣かましと思ふ

会社員　田川美代子

曇り日を受けて緑の大観峯うねるがごとく目に迫り来る

東京学芸大学　菊池美智子

大阿蘇を眼下に見おろす岩かげに静かに咲きしなでしこの花

第十班

熊本大学　池田弘子

カルデラを望みて友と語りつつまた来むことを誓ひ合ひけり

日本経済短大　田中美代子

大阿蘇を見し印象を湯舟にて静かに思ふ夕べの一時

鹿児島大学　阪本千穂

一面の緑の原をおのがじし想ひを持ちてわれら進めり

岡山大学　日笠隆子

いくたびも火を噴きしとふこの山に笹のうら葉は光りてしづか
君知るや見ればしづけきこの山もあつき流れを抱きてゐるを
太陽は光りのこなをふりまけりもだしてまどろむ阿蘇の町はや

長崎大学　佐藤風美

山頂にかぼそき二輪の花ありき生涯の知己となりし友かな

亜細亜大学　石井恭子

うねうねと大海原のごとつづく西日をうけし阿蘇の山々

公務員　福永諒子

大いなる心いだきて生きたしと山のひろがり見つつぞ思ふ
夕日さす山脈見つつふと思ふすでに退庁の時刻なるかと
なだらかな山すそあたり生家ありとうれしく語る同乗の人

東京薬科大学　古市洋子
岩肌のきびしき山にとげありて根強く咲けり紫の花

熊本大学　平木節子
広らなる阿蘇の高原に立ちをればいにしへの神の天降り偲ばる

福岡女子大学　坂東嘉美
雲のかげ大きく映し村々はゆったりとあり山々の内に

熊本大学　山本弘子
外輪の山ふところに抱かれし村里遠く静まりてをり

熊本大学　内田公子
大草原うねりて遠くはるばると続くかなたに白雲うかぶ

公務員　塚島美知代
大阿蘇の夕日に映ゆる山肌は濃き緑なるビロードのごと

国学院大学　杉光蘭子
あなうれし四方の山々に抱かれて草のしとねにねころぶわれは

第十一班

会社員　高山一成

雄大なカルデラ見むと登り来れば峰あやしくも霞にうもれし
地方公務員　日野　篤

黒髪に撫子さしし妹のころびしところしばしとどまる
秋草の山路たどれば東京に嫁ぎし妹に心走りぬ
地方公務員　行徳健次

根子岳の雄々しき姿求むれど遠く静かに霞みこめける
会社員　赤尾純一

見わたせば果てはいづこぞ山にしてただ呆然と絶景に酔ふ
会社員　稲野穂

かすみたる阿蘇の山々ながむれど火口見ざるを口惜しと思ふ
会社員　石坂次雄

子らの顔しばし想ひぬわが郷は阿蘇の山脈消ゆる方にあり
炎天に道直す人ありその道をいと軽やかにバスは登りぬ
会社員　浜田忠男

大阿蘇はけぶりて見えねど鳴く鳥の声聞き居れば心打たるる

会社員　河野多計哉

緑なす稜線に腹ばひ歌詠めば弧を画きて舞ふ鳶の一羽の

会社員　久保四郎

騒音の巷のがれてはつ秋の大観峯に立ち山河ありと思ふ

会社員　中馬幹夫

つづらなす登山道路にこだまする若人たちの声は高らか

×　×　×

黒岩一郎

大観峯に登る

たまゆらの郷愁かきたてて大阿蘇の裾野の原に赤蜻蛉飛ぶ

大阿蘇の大観峯のいただきにあざみの花の咲けるいとしさ

げんのしょうこかそけくはひて大阿蘇のいただきにして花附けゐたり

火をふける大阿蘇の嶽ふりさけて天つちの大いさ思ひけるかな

植木九州男

合宿に娘つれて

合宿に体つかれてゐむ吾娘(あこ)よ誠の道は永久にきびしき

合宿の大広間にて逢ひし吾娘に耐へよと我は目くばせをしつ

夜久正雄

西下車中にて

灯のもとに裸の人のねころびてすずむ見えつつはしるわが汽車
まどゐせる人もはだかの家々の見えてはたちまち過ぎゆくかなしさ
扇風機見えてふとおもふあつがりの妻いかならむあつき我が家に
知る知らぬ人のなつかしこのあつき一夜をともにたふると思へば
つれてゆく吾子をさなけれ何となく心にぎはし二人とおもへば

宝泉旅館にて

なきつれて心にしみるせみのこゑあかときのこゑにねむりさめつも
とほく来て阿蘇の一夜は秋早みなく山のせみのこゑに明けにけり
雲こめて阿蘇は見えざれ湯の宿の朝庭白き芙蓉まがなし
湯の町の朝しづかなり橋をわたる馬の足音のつばらつばらに

大観峯登山

三十年むかしの友らさながらに阿蘇高原をバスの旅ゆく
友とゆくバス楽しきに若くして失せにし友らの切にしのばる
なき友らのみたまよ見ませけふここにむかしさながら我ら集へる
目の下にひらくる国原ひろびろと森あり丘あり田あり町あり

阿蘇五岳ほのかにかすみてみほとけのねすがたに見ゆ人のいふごと
山の上の草にねころび目つむれば友らの語らふこゑのにぎはしき
阿蘇の山辺夕くだり来るバスにして五木の民謡きけばかなしも

小田村寅二郎

聖徳太子の輪読を了へて

輪読する友らの態度壇上のわれの心を打つがにきびしき
読みがたき文字辿りゆき古き世の人の心を学ばんとするか
拙なかるわが解説にも緊張のまなこかがやきわれに迫り来

岡本弘之

小田村先輩の講義を聞きて

ああなんといふ力強きみ言葉なるか意志につながる同信協力
看板に偽りありといみじくも喝破したまへるみ言葉きびしも
大阿蘇の燃ゆる思ひにそこはかの概念思弁打破して止まむ
名にし負ふ阿蘇の山並み夏の日のもやに霧らひて見えずさだかに

山田輝彦

大観峯に登りて

見はるかすカルデラ盆地鉾杉の並み立てる見ゆくもり日のもと
にぎはしく友ら語れり二十とせをかくつながりて生き来しものか
とがりたる外輪山の岩肌の目に迫り来も夕づきし陽に

たけ高き和多山儀平大またに歩み来るごとし笹ふみ分けて
死せる友別れし友を偲びつつまなかひに見る阿蘇の連山
たたかひにたほれし友の雄心を継ぎてし行かむ生くる限りは

吉田靖彦

夏草にまじりて咲けるなでしこのなびかふ見つつ旅ゆくわれは
大阿蘇のふもとの原にうすもものなでしこ咲きて秋近みかも
夏草のしじ生ふ丘のなぞへには宵待草の咲きみだる見ゆ
つづら折りつづく山道きはまりて大観峯ゆ阿蘇を望むも

阿蘇合宿

厚地章

木末ゆく白大雲の寄るがごと若き友らの集ひ来るなり
よどみなく山もといゆく白川のはやくも阿蘇に秋深みゆく

末次祐司

峯づたひ路ふみゆけばひろびろとつづく草原さやけかりけり
すずかぜは若草山を吹きのぼり汗ばむ面の快きかな
名もしらぬ千草の息吹きさ緑なし広きその谷ほのにけぶりぬ

瀬上安正

大阿蘇の森も畑もうすもやの奥にけぶりてはるかなるかな
うすもやの奥ゆつばめのとびきたり山かげにつと消え去りゆきぬ
うすもやにつばめ見えかつかくれつつ飛びかふなべに入日さすなり

加藤善之

高原の小谷流るる岩清水そのせせらぎの音しづかなり
高原の波うつかなた裾野引き久住連峯そそりたつなり

三重野悌次郎

雲影のゆるく動ける蒼き野に川面の白く光りて見ゆる
逆光の陽あしのかなた山淡く山また淡くかすみ立ちたり

深江圭三

九十九折の道をのぼれば窓の辺に大観峰はそそり立つなり
合宿にしばしのしじま求めんと大観峯の草むらに坐す
名にし負ふ大観峯に吾立てば見はるかす五岳かすみにけむる
釈尊の涅槃の姿そのままに阿蘇の五岳はしづもりにけり
われひとり神のみむねに抱かれて天地の声を聞かむとぞ思ふ
まなかひにひらくるかぎり緑なす外輪山の一すぢの峯

二十年前友らと登山せし日を偲んで

加藤敏治

さす日ざしなほ強けれど窓辺より吹くそよ風は肌にすがしも
疲れたる身もよみがへり窓辺より大阿蘇が嶺を眺めやるかな
中岳に燃ゆる火を恋ひ友あまた集ひ登りし日ぞ偲ばるる
中岳の嶺ろのうへ近くおく雲の動くともなししばし見れども
福岡ゆ我は来りて佐賀の友熊本の友らと共にのぼりき
火を噴きし名残りとどむる岩肌をつたひ登りき友らとともに
いただきに立ちて歌ひつ歌声の離れし友らに届けと祈りて
春浅き大阿蘇が嶺の草千里若草の上に酒を酌みしか
酒に酔ひ声たからかに歌うたひおどりし亡き友偲ばるるかな
まなかひを去らぬ面影たまきはるいのちのかぎり我は忘れず
つきせざる思ひに仰ぐ中岳の恋しき煙見えずよ今は

古事記仲哀天皇崩御の項をよみて

小柳陽太郎

ぬばたまの夜ふかくしてすめろぎは神降さむと琴ひきましき
琴の音のはたと絶ゆれば灯をあげて見まつるにはや神さりましき
はろかなる神代のことばにふれし後の波うつ思ひ未だに消えず

いのちみなぎるふるごとぶみを大阿蘇のやどの一夜によむがかしこさ
大阿蘇の山脈すべて闇にかくれ眠るがごとし神代ながらに

宝　辺　正　久

大観峯の草原に立ち見さくればまな下しづかに嶌よぎるなり
火の山のふもとの町ももやにかすみ阿蘇国原は夢のごとしも
友と共に大観峯の草の上にいこふやすらぎよもだしをれども
四方をめぐる青垣山よ安らけきこの国原よなつかしきかな
安らけく伝へうけたるわが国のもとついのちの危ふし今は
山の上ゆ吹きおろすごと国のいのちいぶき通へよ合宿の友に

あとがき

われわれが過去七年間にわたって営んできた合宿教室においては、どのような意図のもとに、どのような内容の運営を行ってきたかについては、「国民同胞感の探求」(理想社刊)三部作によってすでにその全貌が記録刊行されている。従ってこの書物ではその三部作には盛りこまれていない、今回の合宿独自のものを中心に編集することとして、焦点を福田、木内両講師の講義内容と、特に今度はじめての試みとして行われた短歌創作に絞ったのである。もっともこの他にも、今回はじめて全般の運営を学生諸君が中心になって行ったこと、女子班を新たに設定したことなどいくつかの重要な試みが行われたし、このことについても詳細な記録を残したかったが、紙数の関係もあり、残念ながらこれは他日を期すことにした。

今年の夏もまた第八回目の合宿教室が開催される予定であるが、これにそなえて今年の一月には福岡において全国の各大学の代表二十数名の参加を得て幹部育成の研修合宿が行われた。更に三月から四月にかけては、これまたはじめての試みとして東京、長崎、福岡、岡山、宮崎、滋賀、鹿児島の各地において学生独自の構想と企画において小規模ながら意欲に満ちた合宿が行われている。

われわれの運動は特定のイデオロギーを旗印として展開する運動ではない。われわれが念願するところはただ荒廃した国民感情の中において、信頼と友情の中に正しい学問の道をおしすすめる世界を繰りひろげること以外にはない。それだけに歩みは遅々としてはかどらないけれども、所詮、思想は一人から一人へと伝わるものである以上、その遅々たる歩みの中に真実の何ものかがあることを確信して、さらに歩を進めてい

きたいと思う。この書物がその際における輪読のテキストとして、又前進へのはげましとして御役に立てばこれにすぎるよろこびはない。

最後にこうした書物を出していただけるのも、このようなわれわれのねがいを、あたたかな目で見守っていただいている全国数多くの方々の御力によることを思い、感謝の念を新たにしつつ編集の筆をおきたい。

（今年度の第八回合宿教室は八月二十一日から四泊五日の日程で、雲仙ユースホステルにおいて行われることに決定しており、講師には昨年にひきつづき木内信胤、更にドイツ文学者竹山道雄、政治評論家花見達二の三氏の御承諾を得ている。なおこの合宿についての問い合せは東京都港区赤坂青山南町四ノ二一小田村寅二郎氏または鹿児島市下荒田町二〇九一川井修治氏あてにお願いしたい）

昭和三十八年四月五日

編集委員

山田輝彦

小柳陽太郎

—新しい学風を興すために—

昭和三十八年五月十日 発行

定価 二〇〇円
〒 50 円

編者 大学教官有志協議会
国民文化研究会

編集委員代表 小田村寅二郎
東京都港区赤坂青山四の二一

発行所 国民文化研究会
東京都港区赤坂青山四の二一
振替東京六〇五〇七番

落丁・乱丁のものは、お取り替えいたします

国民文化研究会発行図書目録

☆〝合宿教室〟レポート　No. 1～No. 7

（No. 5～No. 7 理想社刊）

☆〝**国民同胞感の探求**〟　三部作セット

（理想社刊）

☆黒上正一郎著

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」

☆（**機関紙**）月刊　〝国民同胞〟

☆（推薦・取次図書）

夜久正雄著「歌人・今上天皇」　（明治書院刊）

A 6 版　88頁　定価 150円　〒40円

混迷の時代に指標を求めて

青年、学生に訴う

青年、学生諸君!!

われわれ—国民文化研究会—は、諸君に深い関心と大きな期待を寄せている。

なぜならば、諸君は国民各層の中でもっとも活力に富み、真理と正義に対して、もっとも敏感な年令の人たちであるから。次代を背負うものは諸君である。混迷に沈淪しつつある祖国の命運を開く鍵を托されたものは、諸君をおいて他にはないからである。

このレポートに収録された内容についての価値批判は読まれる方々のお心のままにおまかせすべきですが、こうした事業が自発的に生まれでたこと、三十才台の人々が、直接に二十才台の人々の啓蒙にのりだしたことなどは、味うべき問題をもっていると思う。

—「はしがき」から—

講　義

経済学の考え方と日本経済への適用および政策の方向…石村暢五郎
平和革命論の検討……川井修治
世界史の発展……広田洋二
日米開戦の真相……渡辺　明
ソビエット第二十回大会における“スターリン批判”を中心に…日下藤吾
マルクス資本主義崩壊必然論について……吉田靖彦
共産治下国民生活の実態…名越二荒之助
昭和史をめぐって……森　裕三
社会主義文学理論の検討……山田輝彦
民族的抒情の回復を阻むもの…小柳陽太郎
抒情詩論……夜久正雄
日本政治の再建のために—特に天皇制の問題について—……小田村寅二郎
班別討論・意見発表会・検討会等—写真—

合宿教室”レポート　No. 2　　昭和32年（福岡）

A 6版　定価50円　〒20円

民族自立のために

—ぼくらはかく祈り　かく意志する—

—戦死した友と未だ見ぬ子孫に
この書を捧げる—

国民文化研究会

目次

民族復興の根底をつちかうもの
合宿にいたる経過
合宿人員の構成
経過報告
班別編成
班別討論
全体討論
講師別討論
合宿感想集
参加者からの手紙
参加学生、青年に訴う
—写　真—

講義

現代日本の盲点……名越二荒之助
現代思想の根本課題……川井修治
歴史観の諸問題……浅野晃
世界経済の基本的動向……伊部政一
日本経済の特質と
経済計画の方向……石村暢五郎
日本文化の位置……竹山道雄
現代哲学の窮極の問題……高山岩男
日本文化の源流—聖徳太子の
信仰思想を中心として……高木尚一
日本文化の血脈……南波恕一
学生生活と国民生活……小田村寅二郎

新書版 113頁　定価 100円　〒30円

民族復興の根柢を培うもの

○**パネル式座談会**「共産社会に住んでみて」
—在ソ11年児玉氏・杉本氏・同8年池田氏・同5年名越氏・同4年富岡氏・同2年川井氏

○参加者全員に**和歌創作**の手ほどきをなし、全員創作を行なう。

○**班別討論会**

○**感想発表会**

——わたしたちの念願する窮極の目標は、真の意味での日本民族の自立であり、正しい意味でのその復興である。まことの「独立と平和」を念じながらこの書を刊行した。

—写　真—

講　義

合宿教室の意図するもの…川井修治
現代日本の盲点……名越二荒之助
所謂、資本主義社会と
　社会主義社会について…石坂豊明
共産主義対策への私見……木下彪
経済学の日本的思考……石村暢五郎
古典のいのち……南波恕一
聖徳太子研究と現代……高木尚一
日教組は現状から
　脱却すべし……浜田牧二郎
人間性に立脚する政治……小田村寅二郎
分裂を統一に導くもの……南波恕一

新書版 250頁　定価 200円　〒40円

民族の明日を求めて

「はしがき」から

現代は「わかりきったこと」がわからなくなってしまっていたり、「あたりまえのこと」が、かえってものめずらしげに見られたりしている。

国を憂することも、民族の道統を求めることも、なにか、かたくなな人たちだけのものにされてしまって、現代—終戦後—の日本に生きる人にとっては、それらは、はれものにさわるような、こわいしろものにされたままになってしまった。

目次

第一日　友らの邂逅（かいこう）
第二日　民族の意志回復のために
第三日　思想の流れをみつめて
第四日　よろこびと前進のために
附　合宿感想集、外
—写　真—

講義

共通の広場を形成するもの…瀬上安正
人間性〝解放〟の道
国民共同体の現実—基盤·小田村寅二郎
天皇制の本質……森　三十郎
日中関係の過去·
現在·将来……木下　彪
道徳の周囲……山田輝彦
バイブルを統綜する
日本文化の遺法……名越二荒之助
生理学·医学の流れ……小川幸男
階級史観と民族の問題……川井修治
日本における社会主義の運命
—革新陣営の発生と
現状および将来……菊池紳隆
戦後意識の論理
—現代教育刷新の基本課題…勝部真長
詩的精神興隆に
期待するもの……小田村寅二郎

B 6判　365頁　定価 500円　〒90円

（三部作その一）—理想社　刊行—

国民同胞感の探求

目次

はしがき
“合宿教室”誕生の背景
一、現代の国民思想について
二、全学連の動きについて
三、全学連にどう対処すべきか
四、時代の断層と取り組んで
“合宿教室”運営のあらまし
一、講義と班別討論の関連性
二、チューターシップ
三、人生観に裏づけされた諸講義
阿蘇“合宿教室”の記録
一、未知の者ここに集う（第一日）
二、緊張する心を講義と討論に（第二日）
三、心の揺らぎと青春の歓喜と（第三日）
四、“時代の断層”をふみ越えて（第四日）
五、国民同胞感の生成へ（第五日）
はしりがきの感想文から
あとがき
—写　真—

講義

人生・学問・祖国……川井修治
学生生活に対する要望……宝辺正久
現代と心理戦……今立鉄雄
学生運動への疑問点……植木九州男
社会思想の構造と
マルクス主義……長野敏一
学問論……戸川尚
陶淵明の詩における
東洋的人間像……津下正章
わが国固有の人間観の特徴…野口恒樹
日本人のこころ……花田大五郎
マルクス経済学の生成と
近代経済学……石村暢五郎
畏と敬と恥……水野武夫
第二次大戦論……中山優
歴史なき現代に思う……木下彪
マッカーサー憲法と
国民主権……森三十郎
平和国家建設の
基本的課題……小田村寅二郎
班別討論・意見発表会・検討会等

"合宿教室" レポート No. 6　昭和35年（雲仙）

B 6判　433頁　定価 560円　〒 100円

（三部作その二）—理想社　刊行—

続 国民同胞感の探求

目次

はしがき
現代の問題点
一、初の宇宙人・ガガーリン少佐
二、ソ連の教育と日本の教育
三、全学連と大学自治会
付、自治会活動への所感

"雲仙合宿教室"の目ざしたもの
"雲仙合宿教室"の記録
一、学生による全体討議（第一日）
二、講義から班別討論へ（第二日）
三、唯物史観の横行を許さず（第三日）
四、経済の諸問題とその研究方法論（第四日）
五、"開かれた日本人"へ（第五日）
はしりがきの感想文から
十日後に書かれた感想文から
あとがき
—写　真—

講義

体験と思想……夜久正雄
現代の思想的課題……斎藤知正
新中国建設の原動力……佐藤慎一郎
日本文化の伝統と
　現代的意義……黒岩一郎
現代政治の批判と
　新しい指標……羽田重房
世界の経済と
　日本の経済（一）……木内信胤
良識について……花田大五郎
五日間の生活を
　ともにして……小田村寅二郎
思いのまゝに訴う……
　木下彪・野口恒樹
　水野武夫・峯辰次
　植木九州男・津下正章
班別討論・意見発表会・検討会等

B 6判　325頁　定価 500円　〒80円

（三部作その三）—理想社　刊行—

続々国民同胞感の探求

目次

はしがき
国民同胞感……小泉信三
—毎日新聞より轉載—
学問の興隆のために
正しい研究方法を求めて
……小田村寅二郎
第二次雲仙〝合宿教室〟のあらまし
〝合宿教室〟における講義（下記）
〝合宿教室〟運営の焦点
一、〝班別討論〟と〝夜の検討会〟
二、大教協・国文研会員の所見発表
三、合宿教室の総括的所見
はしりがきの感想文から（77通）
あとがき
—写　真—

講義

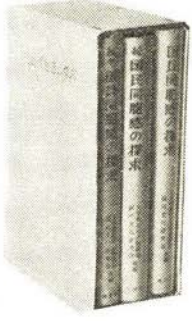
国民同胞感の育成への
努力と指向……小田村寅二郎
学問と人生……津下正章
EECをめぐる世界の経済と
日本の経済……木内信胤
学生時代を回顧しつつ
現代の学生諸君に……花田大五郎
吉田松陰を中心とした
幕末日本の文化精神……川井修治
小林秀雄先生のご講義
「現代の思想」……国武忠彦記
（所見発表）
水野武夫・黒岩一郎・宋吉哲
植木九州男・吉田靖彦
国民文化研究会……
小柳陽太郎・山田輝彦・岡本弘之
宝辺正久・加藤善之・徳永正巳
坪井保国・加藤敏治・関根康弘
瀬上安正

"合宿教室" レポート
大学教官有志協議会
国民文化研究会 共編

No. 5 国民同胞感の探求
No. 6 続国民同胞感の探求
No. 7 続々国民同胞感の探求

—理想社 刊行—

国民同胞感の探求 三部作セット



定価 1,560円 〒 270円

若き青年・学生の勉強の友として、この**三部セット**は、疲れた心をいつも休めてもくれるし、また無限の発展の可能性をたたえる祖国日本の学道の息吹きとその生命のほとばしりとを、身近かにしのばせてくれる。

"合宿教室" レポートは、これからも毎年一冊ずつ出版されていくであろうが、本書はぜひとも書架に一組お備えください。

——お申し込みは**国民文化研究会**へ——

A 6 判　146頁　定価 200円　〒50円

聖徳太子の信仰思想と日本文化創業

—黒上正一郎著—

著者

原著　第一高等学校昭信会版
昭和十年七月二十一日

本書は原著の約半分を戦後に再刊したもの。

著者黒上氏は昭和五年、三十才の若さで死去した。明治三十二年、徳島市の素封家に生まれ、商業学校をでて、阿波銀行に勤めた。聡明な宗教家の素質は、少年時代から芽生え、独学で親らん、日蓮の経文から、聖徳太子の研究に進み、特に本書の述作には、一語一句に心血を注いだ。昭和三年三・一五事件のあと、一高に昭信会、高師に信和会という研究グループが生まれたが共産主義運動の渦巻くなかで、著者は毅然たる態度で学生を指導し、太子のご精神を若い次代の青年に伝えたのである。

目次

再刊上梓のことば
序説　東亜大陸文化と日本・推古朝と明治時代・日本文化創業の綜合的指導者・聖徳太子の内治外交
序説付　聖徳太子の体験過程
第一編　聖徳太子の人生観と政治生活
国民生活の内的改革と三宝興隆
憲法第一条と十条—蒼生と共なる道
自他分別の心理を批判する内的平等観
第二編　聖徳太子の信仰思想と国民精神
常住法身と帰依の対象
仏法僧の意義
一体三宝と別体三宝
太子のおことばと明治天皇御製
古事記に表現された現実的民族精神
万葉集の防人（さきもり）の歌
聖徳太子**憲法十七条**
聖徳太子の**年譜**
聖徳太子の時代の**解説**——高木尚一
附、**黒上正一郎遺歌抄**

B 6判 206頁　定価 250円　〒60円

歌人・今上天皇

夜久正雄（アジア大学教授）

目次

まえがき

御歌研究

御歌の語法・御歌の音調・御歌の内容・家庭感情の御歌・平和の祈り・御歌と日本現代史・御歌歌風の展開叙景の御歌・三十年発表の御歌・明治天皇御製との比較研究・御歌「ともしび」

御歌解説

歌会始の御歌・終戦直後の御歌・植林関係の御歌・地方巡幸の御歌・生物学者としての御歌・神社祭祀関係の御歌・母宮貞明皇后をしのぶ御歌・ご家庭生活の御歌・その他の御歌

あとがき

初句索引

口絵写真

B 5 判（8 頁）毎月1回発行
―昭和36年11月創刊―
発行所　**国民文化研究会**

〝月　刊〟

国民同胞

定価　1部20円；年間 360円（送料共）

われわれ国民文化研究会は、現代の学生生活の中に何をねがい、何を求めているか。それはイデオロギーの相剋を越えたゆたかな国民的心情をあまねくくりひろげる以外にはない。これはまことにささやかな機関紙であるが、この中にこめられたわれわれのねがいに是非共耳をかたむけていたゞきたいと思う。

申込先（この機関誌に限り下記の通り）

下関市南部町3　宝辺正久方

月刊「国民同胞」編集部

（振替　下関1100）

大学教官有志協議会
国民文化研究会 編